
ひと雫の光源

左右田 水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひと雫の光源

【Nコード】

N7622W

【作者名】

左右田 水

【あらすじ】

あなたは裏切られても最後まで信じる事が出来ますか？
一向に芽が出ないがそれでも役者を続ける「瀬戸 祥」。彼は役者
を続けながら、毎日アルバイトに明け暮れる日々を過ごしていた。
そんな彼は過去のある出来事がきっかけで想いが離れられず過去に
囚われ縛られることになる。ある一人の女性とある一人の親友への
想いによって…。夢を追いかけているのに後退しかすることが出来
ない彼は、希望という未来の光を探し求めることは出来るだろうか？

ブローグー光の雫と闇の顔

いつもそう思っていた。毎日毎日狂おしいと想える時間の中、それでも平静さを装っていつだってそう思っていた。

『もう、これで最後かもしれないだろう・・・？だから・・・理子が本当は言いたいことがあったんじゃないかと・・・ずっとそう想ってた・・・』

今日もお決まりの時間に携帯電話のアラーム音が鳴る。僕は朝の目覚めは良い方だ。お気に入りのアラーム音によって決して深いな眠りの中から呼び戻され、寝ぼけながらケータイ電話を停止させる。ベッドの横に常時置いてある清涼飲料水を一口、口に含みながらベッドを離れる。カーテンをあけ窓から空を見上げる。僕の毎日の日課だ。このひと時が僕にはとても心地よく思える瞬間だった。

今日はあいにくの雨だった。

銀色の草原が空一面を覆うように広がっていて、そこから水色とも透明ともいえるような幾千万もの光の雫がおちてくる。

僕はなぜか、子供のころから雨は好きだった。どこか自分というものを落ち着かしてくれる。

シャワーを浴びてせかせかと家を出る身支度を進めていくと、「さあ、今から仕事だ！」という覚悟が僕を家の外に送り出してくれる。毎日自転車を通る見慣れた街路を、今日は歩いて通過する。この道を歩いていると、東京に住んでいる事を忘れてしまいそうになることがある。道の両端に広がっている民家の畑。息を大きく吸い込むと湿った匂いに混じって、畑独特のこげ茶色の土の香りがする。鼻から息を吸い込んでいるのに、全身でその香りを受け止めているような、また香りもそれを待っていたかのように優しく僕を包み込んでくれる。田舎育ちの僕にはとても懐かしく感じ、同時に寂しく

もさせた。

しばらく歩くと、道の両端の景色は大小様々な四角が乱雑に並んだ雑踏に豹変する。あくせくと早歩きの人達を、僕なりに気を使つてぶつからないようにすれ違っていく。サンロード商店街を抜けると、僕の職場はもうすぐそこだった。

吉祥寺駅北口のロータリーにある、四角い大きなデジタル時計を見上げる。

「ちよつと早く着きすぎたかな」

雨の為歩いてきたが、それが逆にいつもより30分も早く到着する結果になってしまった。余裕を持って家を早く出すぎたみたいだった。職場までそのまま行っても良かったが、せつかなので少しぶらぶらすることにした。

東京に上京してきてもう8年が過ぎていた。それは吉祥寺に住み着いてから8年超過する事も意味している。この田舎とも言えない、でも都会とも言い難い、中庸的な街並み。言うなれば、中等都市とでも言っておこうか。そういう街である。僕はこの街が好きだった。バイトが始まるまでの間、今来たサンロード商店街を今度は逆走してみる。来た道をUターンして逆に歩いていくと、また違った感覚を獲得できる。

今さつき歩いてきたばかりの道なのに、まるで別物と感じる景色の錯覚。でも、なんとなく見覚えがある景色。時が戻っている様な、時間を駆け上っている様な、少しだけ気持ちが落ち着く気がする。落ち着いた気持ちの感覚を獲得出来たとき、更にもう一步、至福の時を過ごそうと近くでコーヒーでも飲んで職場に向かおうと考えていた。

いろんな店が立ち並ぶ商店街をゆっくり吟味しながら歩いていく。「あれっ？瀬戸君じゃない？」

思ってもみないところで突然甘ったるい声を掛けられて、びっくりして慌てて振り向く。

そこにはバイト先の同僚の尾澤沙織がニコニコして立っていた。

「もうすぐバイト始まるよ？どこいくの？」

「尾澤さん。ああ、びっくりした。おはよう」

「うん！おはよう！！で、どこ行こうとしたの？」

「ん、ちよつと早く着きすぎちゃってさ。少し散歩」

とりとめて嘘でもないが、バイト前に独りでコーヒーを飲みたかった僕は、思わず散歩と口走っていた。

「ええー！なにそれえー！！お店に行つてればいいじゃん。今から沙織も店に行くから一緒に行こうよー！」

「えつ、ああでも、もうちよつ……」

「はいっ！行くよー！！ねっ！」

「いや、ちよつ……」

かなり強引な娘であつた。アルバイト先でも元気が良く明るくて、自己中心的なのがたまにキズだけど、地元が吉祥寺という東京生まれ東京育ちのいわゆる都会っ子なだけあつて、僕なんかと比べると随分垢抜けてる様を感じる。容姿端麗でみんなからの人気も高く、同姓からも異性からもすごく好感触で、いわゆるアルバイト先のアイドル的な存在であつた。

僕も尾澤さんの事は嫌いではなかつた。

細い手に捕まれた僕の腕を華奢な身体で強引に引っ張っていく。引っ張られながら、朝一番から予定が狂ってしまったな……今日はあんまり良いことがなさそうだなあ、などと僕は思いつつバイト先まで拉致された。

「おはようございまーす！」

「おはようです」

店長が開店準備をしている所へ二人同時に入店して挨拶をする。

「おー、おはよう。お二人ともお揃いで。早速で悪いんだけど、着替えたら開店の準備手伝ってもらってもいいかい。」

相変わらず淡々としている店長だったが、何気に会社の中では出世街道まっしぐらの人であつた。

こうして今日もバイトの時間が始まっていく。

僕が今働いている職場は吉祥寺に上京してから2つ目の職場だった。大きくもなく小さくもない雑貨屋であったが、若い人や年寄りまでいろんな年齢層のお客が行き交っている。良い買い物をした時の満面の笑みや眉間にしわを寄せてどれにしようか悩んだり、やっとなん人達を身近に見ていられるのは非常に楽しく僕に沢山の贈り物をしてくれる。

僕はここが大変気に入っていた。

バイトが終わってバイト先をあとにする頃、辺りはもう真つ暗だった。雨も夕刻時にはすっかり上がっていた。吉祥寺は昼の顔と夜の顔がずいぶん違って見える。少なからずどの町もそれはあたりまえの事なのであるが、吉祥寺はそれがあまりにも極端であった。昼間のあの、足の踏み場に困るくらいの雑踏がまるで催眠術にでもかかってしまったかのように、冷静さを身に纏ったもう1つの顔を現す。それがこの街の素顔かもしれない。

表裏を感じ取れた時、僕は少しだけ優越感に浸る事が出来る。

なぜだろう？

この街の冷たい顔を全身で感じて触れることが出来るといつても平静を取り戻す事が出来る。でも平静は一瞬で即大きな虚無感という暗黒のカーテンにつつまれてしまう。まるでイカロスが蠟の翼を手に入れ自由に雄たけびをあげながら空高く浮遊している刹那、ダイダロスの忠告も聞かずに天高く舞ってしまった為、太陽の熱によって地へ失墜してしまい取り返しのつかない闇が訪れるような…。そんな感覚も僕がこの街とあまりにも良く似ているわけと同じなんだと本当は気付いている。

自分の夢と、そして、一人の女性に対しての強い想い。

僕は今でも理子を愛している。

後悔というものは、当たり前だが現在より未来に感じ取るものだ。ましてや、過去には起こりえないことなのだ。だから、現在の岐路を1つ1つ慎重に選ばなければならない。それをあまりにも大雑把だった、慎重すぎたりすると、人は時として過去に戻りたい、あの頃に戻ってやり直したいと、無理難題な願望が芽生えてくる。僕もその一人であつた。

お酒の力を借りて気を紛らわそうとするが、それをどこかで冷静に見つめている自分がいて、妙に滑稽に思えてくる。

上機嫌で千鳥足になっている中年や若者を見るたびに、みんな自分と同じで気を紛らわしているのだと、自己中心的な悟りを開いてしまう。

おかしなひと。

理子が口癖のように僕に対してしゃべる一言だつた。僕は自分では頑固者だけど真面目なほうだと思っていた。確かに対人関係はあまり得意なほうではなかったし、あまり人と深く関わる術もよく知らない。自分が思うままに生きてきていた。逆に自分がやりたい事しかやっていないわがままな子供とも言えるが、それでもあの時はそれでいいと思っていた。そういった意味では特殊な部類なんだろうか？

祥つて本当におもしろい。でも祥のおかしさは真面目だからおもしろいのよね。他の人とはどこか違う真面目で真つ直ぐな事を私はわかつているよ。

僕の人生でこんなに嬉しいと思つた事は初めてだつた。

こんなにもおかしく侮辱にもとれる一言なのに、全く怒りはなかった。僕の内面をしっかりと見据えてくれる女性。透明な硝子ケースでの小さな生活を外から覗かれている様な感じで少しくすぐつた

い様な恥ずかさもあつたが、でも不思議と嫌ではなかった。おかしいと連呼される事も中身を透視される事も。それどころか理子が話す事は妙な説得力があつて、そう言われる事に喜びさえ感じていた。世界中の誰にも相手にされずに独りぼちでも、世界中の人々を敵に回したとしても、たった一人でよかつたんだ。

そう… たつた一人、理子だけが理解をしてくれれば、僕にとってはもう何も必要なかった。理子が僕の事を分かってくれているだけで僕は何者にもなれたし、どんなに辛い試練があろうとも、世界が崩壊しようとも、耐え抜く自信があつた。

理子が理子じゃなくなり、僕が僕じゃなくなるあの日までは…。

上京してきたのはありがちではあるけど、あるものを？みに来た。それは、まだまだ一筋の光にすらなつてない、細いとてもか細い閃光みたいな先の見えない道であつた。

役者という特殊な職業。

夢を追いかけて、いつたいどのくらいの人達が東京という決して広くはないこの大都市に集まつてきているのだろうか？そんな文学者もどきの質問に、諦めるといった単純明快な答えが手を招いてすぐ近くに息を潜めて待っていることを僕は知っていた。

諦めるということは本当にそれで最後なんだ。諦めてしまつたらそれ以上先へは二度と踏み込めない。僕にはそれがどういふことなのかよく分かつていたし、そうすることができないことも分かっている。

日本全国で役者の仕事が集まる都市、東京。僕が役者を目指すために東京に来たのは至極当たり前のことだった。田舎に居ては限りなく幅の狭い行動しか出来ない、それこそ自己満足にしかねない井の中の蛙だった。

だが、僕は井の中の蛙という言葉は嫌いではない。井戸の中にい

る蛙はきつと、その中の壁をみていたわけじゃなくずっと光の差す方向、空を見上げていたんだと思うから。どこまでも終わることのない果てしなく広がる空の光を。一差ししかない光の道だったろうけど、だからこそ蛙はどこまでも縛られず自由に敏感だったと思う。それを求めて飛び立とうとしていた。

僕は田舎から飛び出した蛙なのだ。

ここには、田舎では到底分かりえない事がたくさんあった。それを分かりやすく教えてくれたのが村中先生だ。決して才能があるわけでもなく、見栄えもあまり良いとはいえない、いわゆる凡人の僕がそれでもちよくちよくテレビドラマや映画に限りなくエキストラに近い役柄とはいえ、顔を覗かせ何とか役者としてやっていけているのは、村中先生の教えによるところが大きい。

先生も昔は役者をやっていた。その当時では名前をそれなりに残した方であつた。先生の一言一句を脳の細部に行き渡るほど聞いてそのとおりに実行する。すると、まるで操り人形みたいになっている錯覚におちいる。でも、それがまた優しい糸で引っ張って行ってくれていて、あたたかい。

演技をしているときの僕は何事をも忘れられる、一番楽になれる瞬間であつた。もっとも、演技そのものには苦悩を強いられることもあるし、行き詰まることもある。しかし、そのこと自体が僕を娯楽に導いてくれるし、直面する大きな壁から目をそらせてくれる。

人には忘れるという機能が生まれながらにして備わっている。時間という者が忘れるという魔法をかけてくれるのだ。そう、通常は忘れられないということは存在しない。生活していくうちにいろんなものを見ていろんな人と出会い、そしていつの間にか過去の産物と化して良い思い出、つらい経験となっていく。

それができるから、人は耐えてそして成長していけるのだと思う。しかし、5年の月日が流れているのにも関わらず、理子の姿、声、思い出が鮮明に形に残っていて、忘れようと形を崩すと形状記憶の

ように戻ってしまう。それでも平静さを装って必死に時間を駆けてきたが、僕の時計は物置にでも眠っている古びた置き時計のように、誰にも見つけられずに壊れて止まったままだった。

僕は、呪縛にでもかかってしまったのだろうか？

あれから一步も動けず立ち尽くしたまま、僕の時間は進んでいない。

バイトや芝居の稽古、たまには撮影だつて入る。日々、あくせくと進んでいく忙しい毎日。余計なことをいろいろ考える余裕などないし、それにメビウスの輪のようにいつまでも辿り着く事のないその生活をそれなりに楽しんでいる。不満などなかった。強いていえば、演技力をもっと身につけたい事と、芝居だけで生活していきたいことだ。

それは正直な部分であつたし、嘘ではない。

もし、理子と偶然の再会するようなことが会つても、僕は君の事をずっと忘れずに愛していたよ、なんて言わないだろうし、理子もきっとどうしたらいいのか分からないと思う。

実際会つてもお互いが困るだけだ。そんなことは分かっている。

分かっている？ いや、真実はその逆だ…。

ただただ、忙しい毎日。この街の昼間に垣間見えるような表情のように忙しい日々。でも、どこかで影のようについてまわる夜の顔と一緒に、僕は分かっていると自分で冴えない自己暗示をかけているだけで、忘れられないことが重くのしかかっている。

日々が苦痛だ。

苦しいなんて事は生きていればたくさんある。ただ、忘れられないことがこんなにも辛いなんて。いつも身体の一部を引き裂かれているのに、気持ち締め付けられる。一人でいるのが不安でたまら

ない。

だからといって新しい彼女を作る気にもなれなかったし、作りたくもなかった。馬鹿げているほど矛盾しているけど、こんなにも苦しいのに理子のことを僕の心の中で風化してしまいたくないんだ。本当は分かっている事解っている。忘れることのできない僕を、どこかで心地良いと思う僕がいて苦しさ追い討ちをかける。現状を打破するための強い心も勇気もない僕は、毎日誤魔化して進んでいくしかなかった。

僕はどうしたらいいのかな…。

枯渇する再生

芝居の稽古が終わると、村中先生と食事を共にすることが多かった。村中先生は、芝居の稽古をしていただけの先生であり、僕の所属するプロダクションの社長でもある。食べながら今日の演技について、ダメ出しやアドバイスをしてくれる。一所懸命に忠告をしてくれていたかと思えば突然くだらない話や女性についてなど話し始めたりする。こうゆう砕けた気さくなところが僕は好きだった。いろいろ話をしていくうちに先生は必ず昔話をしてくれる。流線を描くようにその話は芸能業界というひとつの社会の話に移り、ウチのプロダクションの看板女優の話しや役者の話しに発展していく。

楽しそうに満面の笑みで時には熱くいっぱい感情が僕に降り注がれる。ガヤガヤした雑談の聞こえる店で、麻薬捜査犬が麻薬を当たり前のように嗅ぎ分けるように、先生の言葉だけが不思議と耳に入ってくる。聖人君子がいたらこんな人かな？と思うことさえある。僕は先生の話しを聞きながら理子のことをよく考えてしまう。女優の話しをされると、より一層感覚が研ぎ澄まされ、過去を走馬灯のように駆け上る。だが、嫌ではない。むしろその先生の話のきっかけに思い出すのはすごく自然で、苦しくもなく一番素直に純粋な気持ちで、理子のことを思い出せる。先生とよく食事を共にすることを僕が喜んでいる理由はそこにもある。

理子と同じ社会で時間が流れている人だから。

理子は女優なのである。

理子とは前の事務所で一緒だった。

お互いにはじめの印象は対照的だった。所属オーディションの最終選考に理子は所属者として芝居の手伝いをしにきていた。最終才

ーデিশョンでガチガチに緊張をしている受講者に顔色一つ変えずに、ライン作業をするかのような淡々とした対応で手伝いをこなしていく。真っ黒よりも少し淡い綺麗な瞳に吸い込まれつつも、その瞳はどこか寂しげにも見えた。でもひとたび演技の手伝いで役者として舞台上立つと今までの冷静さが何かの冗談だったのかのように、理子の綺麗な瞳が輝き美しい光を放ち始めた。目を塞ぎたくなるくらいに眩しく光る姿に憧れすら覚えて、初対面なのに強烈な印象を与えてくれた。

光り始めた理子に対して、最終オーディションに挑む彼らはただただ無力で、理子の前にみんな蹴落とされてしまう。僕は芝居自体が初めてだったおかげなのか、僕の芝居自体がとても演技と呼べる代物ではないのが分かっていたからなのか、萎縮する事も無く大きな声を荒げて思いつき演技ではない台詞を口走っていた。

そんな物を見せられれば、きつと理子じゃなくても印象は悪く映るだろう。理子に後から聞いた事だが、あの時あの場所が一番最低な人は君だったよと、少し意地悪な顔をして、でもあの時あの場所が一番印象に残ったのも君だったよと、悪戯な冷たくも暖かくもある表情で告げられた。

対照的なインプレッションに理子は、不思議ね、あの時の君はすごく最低だったのにと、それでも平静さを失わずに言い放った一言に更に続けて、君の事を理解していくうちに君に対しての第一印象がどんどん変わっていったよと、話してくれたのをよく覚えている。「どう変わったの」

と、僕が更に聞いてみると理子は意味深げに少し厚めの唇を嚙んで君は優しいねと、僕の両の二の腕を引き寄せ僕の胸に顔をうずめて暖かな感触を確かめていた。

最初の頃、理子とは僕が所属してから全く話すことがなかった。理子を見つけては何度も話しかけようと努力をしてみるものの、第一印象が正反对だった為かお互いが警戒しあっていてまともに会話

を出来ずに数ヶ月経過していった。

もちろん僕にとっては最初の出会いがとても強烈で、それからほとんど理子の事に魅かれていくいい出会いだったのだが、理子にとつての僕との最初の出会いは決していいものではなかったようだった。

稽古場に独りでいることの多かった理子はいつも洗礼された冷たさを身に纏っていた。平常心で沈黙を通す女の子、誰にも頼らなく自分を見せない女の子、僕は理子のことをこの時はとても強い女性だと思っていた。

東京の空は僕の田舎から比べるといつも曇っているように感じた。東京に出てきて8回目の寒冷を感じ迎えている今ではもうすっかり慣れてしまっていたが、思春期に修学旅行で東京に来たときには、こんなに空気が悪く高層ビルやネオン灯のせいで星も田舎ほどあまりはつきりと見えない都市には絶対に住むことはないなと思ったものだった。

人はその環境・状況にどんな状態であれ順応して慣れてしまうものなのだが、僕には順応しきれない過去を芝居で循環して光を求めて光源を探し歩いていった。だから毎週3回行われている稽古は僕にとって貴重な栄養源なのだ。

その日も朝早くから吉祥寺駅に向かって自転車を走らせていた。東京の空はあまり好きではなかったけど、住んでいる所の印象なのか吉祥寺の空は好感が持てた。吉祥寺といっても僕の住んでいる所は駅からかなり離れていて畑などが並んでいる。夜になると街灯も少なく田舎ヘスリップさせてくれる場所だったから。その町並みを都会の空気に触れる前に味わえる事を僕は重宝していた。

吉祥寺駅に着くと、いつものように駐輪場へ自転車を置きに行く。駐輪場はかなり駅から離れていて不便だったが、駐輪場から駅まで向かう裏路地を通るのは好きだった。吉祥寺の線路高架の陸橋下沿

いを駅に向かって歩いていくと、駅前の道路を境目に急に人並みが増えてくる。駅から50メートルも離れていないこの場所が吉祥寺の一つの分岐点なのだなとも思う。

北口から慌ただしく駅のホームに向かって電車に乗り、新宿で乗り換えて高田馬場へ向かう。

好きなものに没頭している時は時間を忘れられる事が多々ある。だからもつと日々稽古づけになりたいと望んでいるのが正直な所だ。一つの役を作っていくために時間を掛けて入っていく。集中が高まり集中していること自体を忘れる所まで来ると、自分のくすぶっている感情が浄化されていくのを感じる。でも、決まって自分の再生が施されようと差し掛かると理子の光に照らされたシルエツトが浮かび上がってきて、落とし穴の罠にかかったようにまた暗闇に突き落とされる。

僕は役者として別段、有名になりたいわけではなかった。芝居自体が面白かったし、自分を再構築して取り戻せるのは芝居だけだと僕の本能がそう言っている。就職も考えた時期は確かにあったけど、ここから逃げてしまつては僕の人生には大きな穴が開いてしまう気がしていた。それに家庭を持つて家族の為にあくせく働くのはまっぴらだった。だから僕は家庭の為に一生懸命働くサラリーマンをすごく尊敬している。僕には出来ない道だったから。その分、表現者として大袈裟だけど世の中の苦悩の連鎖を解放してあげたいと常々思っている。そういった意味では有名になりたいと思っっているし、もつともつと役者として精進したいと焦っている。

でも、本当は焦っている理由にはもう一つ大きな、とても大きな理由がある。

僕は芝居で犯罪をなくしたい。

簡単なことではないし、普通に人に話せば馬鹿にされかねないよ

うな理由だけど、それは僕がいい加減な気持ちではなく役者を本気で志そうと決心したとても大きな理由に由来していた。

決まって中央線に乗ると中野駅と東中野駅を通過するせいか、外の景色によって気持ちが分断される。映写機によってフィルムが一定に刻んでいくのと同じで、窓からいろんな模様がスライドされていく。いつも通過していく見慣れた景色。見慣れたものを当たり前に見ている時、そのいつもと変わらない当たり前の景色が自分と調整して寂しさを膨張させてくる。中野駅の北口から伸びるサンモール商店街と東中野駅にさしかかる桜並木を目にすると、まだ桜が咲いていなくとも心の奥底の方でパキンと音が鳴るのが聞き取れる。

中野と東中野は僕にとって特別なところである。

僕と理子の特別な場所。

でも、もう二度と降り立つことはないと思う。いや、だからこそかな、もう二度と足を踏み入れたくはない。

電車はあまり好きになれなかった。意味もなく感情の引き出しが開けられてしまうからだ。毎回そういう気持ちになってしまう自分に嫌気をさしながら、慣れるって言葉はなんなのだろうか？と自問自答を繰り返す。東中野駅を通過してから僕はこの感情の修復に時間をとられながら高田馬場に到着する。いつもこの修復には少々手間どろ。でも修復をしないと芝居をする時の感情創りが困難なのだ。だから僕は稽古が始まる1時間前には着いているように心がけている。自分が1番下っ端というわけではないのだが、保険みたいなもので修復が間に合わなかった時の為に時間の余裕が欲しかった。

稽古場は高田馬場駅から10分くらい歩くとほどなく見えてくる。誰もいない稽古場に着くと、僕は決まって掃除を始める。壊れた感情が心なしか回復するような気がするんだ。

「おはよ〜」

その声に身体を向ける。同じ所属の吉田基樹がまた昨日も深夜のコンビニバイトのせいだろうか、目を真っ赤にして眠そうに入ってくる。

「おお、今日は早いじゃん。昨日はバイト？目の下真っ黒だぞ。」

「えっ、ウソ！目立つ？いや〜、最近さバイト忙しくて…ここ2〜3日あんまし寝れてないんだよね。」

「おいおい、大丈夫か？今日のシーン基樹からだぞ。」

「ああ、大丈夫大丈夫！」

「そっか。あつ、そうだ！基樹ちょうどいいやつ！もう掃除終わるから本読み付き合ってくれよ！」

「そうそう、俺もそうしようと思って早目に来たんだ〜。」

「なんだよ、結局僕頼りかよ。」

「いいじゃん！いつも祥早くきて一人稽古してるんだからさ。」

「んじゃ、もうちつと早くきて掃除手伝えよ〜！」

「あはは、ごめ〜んして。」

「んな、言い方しても可愛くない!!」

「え〜、んじゃ、これは？」

そう言つと、基樹はヨガの立ち木のポーズみたいな格好をし、なんと形容し難い格好だが、そのままの格好で、

「うん！ごめんっ!!」

と、謝っているんだかいけないんだか、これまたどちらとも形容し難い強調した口調で叫んだ。

「???…んっ？なんだ、それっ？」

「陳謝の表現!!」

「……さ、さすが表現者！って、言ってる場合か!」

「だめっ？」

「……はいはい、もう〜いいよ。ほらっ、本読みやるぞ!ふふふ」
「へへへっ!おう!やろうやろう!」

屈託のない基樹の純粹で子供みたいな仕草や行動が好きだった。

なにげない会話は心をほつとさせてくれる。基樹は僕の数少ない役者仲間であり親友だ。よく二人で飲みに行ったり、家が近い事もありお互いの家を行き来しては芝居について語り合ったり、稽古以外でも時間を共にする事が多い。

基樹とは3つ年が離れている。僕がこのプロダクションに所属してからほどなく、社長と一緒に別のあるプロダクションに芝居を教えに行つた時に知り合った。

基樹と知り合ってから3年は経つだろうか、まだ別のプロダクションに所属していた基樹は他の所属者と比べると、郡を抜いて芝居が器用だつたのをよく覚えている。

社長は基樹の才能に心底惚れ込んだ様子で、その頃の話しは基樹の事でいっぱいだった。しかし、そのプロダクションでの基樹の扱いは随分と底辺な扱いで、基樹自身いろいろと悩み考えている時期でもあつた様だった。

その事が切っ掛けで社長は基樹を口説き、基樹は事務所の移籍を真剣に考えたようだった。

なんでも話せる友人は少なからず誰にでもいるものだろう。僕にもかつて、失つてはならない友人がいた。それ以来、心の殻を破ることの出来ないでいた僕は、人を敬遠し遠ざけては、本当の孤独に自ら閉じこもる事で平静さを保っていた。脱出することが出来るはずもない状況を打破してくれたのが基樹だった。

「瀬戸ちゃん。今日のプロダクションへ教える台本のコピー20部ありますか？」

そう言つて、渋谷にあるオリエントというプロダクションの前に駐車をしながら確認してくる村中先生へ僕はいつもと同じ対応をする。

「大丈夫ですよ。でも、20名くらいという話しだつたんで一応25部刷つてきました。」

村中先生は、大雑把なところがあり20部用意してくれと頼まれ

て実際にその部数を用意していくと、かなりの確率で部数が足りない事が多く、そんな対応にも慣れてきたところだった。

「今日の所は女の子が多いから、瀬戸ちゃんには結構頑張ってもらわなきゃいけないと思うからね。」

「はい！稽古多く出来るって事ですよね！？頑張りますよ！」

村中先生とオリエントの社長とは昔、撮影で一緒になった事を機にプロデューサーもしていた村中先生に、今後芝居を本格的に教えたいので講師をして欲しいとの依頼があり、今日は初めて教えに行くところだった。

僕は、女性ばかりだから男女のシーンをする為にお手伝いとして村中先生と一緒に稽古へ向かっていた。

女性の割合が多いという事はそれだけ稽古回数が多くなるという事で僕は大いに喜んでいた。

「失礼します。」

「ああ、村中社長！お待ちしておりましたよ。どうぞ、こちらへ。」

「どうもどうも、こちらが生徒さん方ですか。」

大袈裟に表現しても決して広くない稽古場に20名くらいはいるだろうが、また更に小さく固まった生徒が、まだかまだかと村中先生の登場を目を輝かせながら心待ちにしていた。

ざっと見てもやはり女性の割合が多く、男性は3人しかいなかった。

「はい、皆さん初めまして。村中と申します。」

屈託のない笑顔で自己紹介を始めた村中先生の空間が一気にその場をつつみこむ。待ち構えていた生徒達のマリオネットのようにピンと張り詰めていた糸がふっと緩んでいくのが感じ取れる。

村中先生の緩急自在な不思議な空間。屈託のない笑顔、優しい口調、今初めて対面した生徒たちのはずなのに、いつの間にか村中先生にみんなが魅了されている。

村中先生の世界が投影された稽古場、初めての稽古場で初めての生徒たちなのに、既に村中ワールドなのだ。いつも僕はこの世界に

圧倒された。それと同時に尊敬という言葉では納まりきらない感情でいっぱいになる。

村中先生に言われて用意してきた題材を生徒達に僕は配り始める。「はい、今日は皆さんと始めましてなので、稽古に入る前にちよつとした余興をしましょう。今から皆さんに10分間差し上げます。各自隣に座っている人とペアを組んで出来るだけ多くの話しをして、その人の特徴を？んで下さい。もちろん皆さんは同じ所属なので各自知っている仲とは思いますが、改めて話しをして相手の事を見てあげて下さい。いいですか！？もう一度言いますね。相手の特徴を？んで下さい。」

村中先生の稽古は通常、いきなり台本を用いてワンシーンをドラマ現場と同じように進めていくことが多い。

しかし、今日はいつもと違う稽古から始まり、僕は戸惑っていた。「瀬戸ちゃん、何しているんですか？君も同じですよ。君も余った人とペア組んで、出来るだけ多くのことを語り合ってください。」

「え、あ、はい。分かりました。」

僕は訳が分からず、とりあえずみんなのペアが完成するのを待つて、あぶれた人とペアを組もうとした。

女性ばかりの稽古場で、ほどなくして最後に余った人に話しかける。

「あつ、どうも初めまして。瀬戸祥と言います。お名前は？」

我ながら堅苦しい物言いだなと感じながら、相手の反応を待つ。

「あゝ、よかったあゝ！！ちゃんと相手がいて。僕、吉田基樹です。よろしくお願いいたします。」

一目見た印象は僕よりも随分若くみえる。きっと、まだ20歳くらいであろうその青年の屈託のない表情がすごく印象的だった。

僕自身、相当人見知りをする方なのだが、その青年の好感触に今まで生きてきて生まれて初めての体験に出会っていた。初対面の人に対してこんなにもすんなりと心を受け入れられたのは僕自身、正直驚いていた。

すぐに打ち解けられた僕達であつたが、やはり10分間は短くて、もつといろんな話しをしたかつたが、あつという間に時間が過ぎてしまった。

しかし村中先生がおっしゃっていたように特徴を？むようと考えずとも、自然と10分間でお互いの考えなどが自動翻訳みたいに頭に入ってきていた。

「はい！10分経ちましたね。皆さん、いいですか？それでは、今から皆さんにはペアを組んでいた人の事を紹介してもらいます。いいですか？今からするのは他己紹介です。では、まずは今回芝居の稽古のために連れてきました、瀬戸君からやって貰います。皆さんとしても初めましての人ですから、参考になるでしょう。」

「え、ちょ、僕達からですか？」

「はい、お願いしますよ。」

村中先生からの突然のご指名はよくある事だつた。僕は始めの頃には突然言われて頭が真っ白になる事が多かつたが、そんなことにも、もうすっかり慣れていた。

この突然指されるという言う事に慣れたおかげで、随分と度胸がつきアドリブにも対応できるようになつていた。村中先生は日々の稽古に演技力の向上だけを目的としているのではなく、こういった本人が知りえない所で基礎を築き上げれるように考えて稽古をしている事に気付いたのは、それから随分あとになつてからのことだつた。

この時点で、今さつき知り合つたばかりの基樹の事を紹介するのには、10分間という時間は非常に短いと思つていたが、すぐに打ち解ける事が出来た事や、考えが方がすごく共感を持てた事によつて、すらすらと言葉が出てきた。不思議な感覚だつた。

基樹も同じで、すらすらと紹介をこなしていく。

それは、お互いに失い欠けていたパズルピースが見つかりやつとはまつたような、酷く安堵感に満ちた初めての感覚だつた。

『時が人を育てて光を生むんじゃない、人の中で時が育まれ光が生まれるんだよ。』

村中先生がよく口にする言葉を、僕はこの時に初めて少しだけ理解出来た気がしていた。

ただ過去との決別を未だに出来ない僕にとって大変重みがある言葉だったし、理解が出来ても整理が出来ない自分に苛立ちを覚えていたが、この言葉の本当の意味を理解するのはもっと後になってからだった。

『時が人を育てて光を生むんじゃない、人の中で時が育まれ光が生まれるんだよ。』

ただただ重く押し掛かる言葉、でも僕はこの言葉が好きだった。

他己紹介が一通り終わると、芝居の稽古に早速移った。用意してきたエチュード用のプリントをみんなマジマジとみている。

村中先生の稽古は通常ドラマの台本を題材に進めていく事が多い。1つの台本を終了させるのにどんなに早くても3ヶ月くらい時間を要する。現場さながらのような稽古の時間の流れ。1クールとゆう期間を本番と同調させて進んでいく。

ただ、他の所へ稽古を教えに来るときはエチュードを用意してやる事が多かった。

エチュードはいわゆる即興芝居で、人物と状況、目的や背景などだけを決めて芝居をすることが普通で、前もってそのシーンの為に役作りすることがほとんどない。しかし先生はオリジナルの台本を作って台詞があるエチュードを稽古に使用する。

もともとエチュードというのは、楽器などの演奏を向上する為の練習用の曲であったり、絵画などの下絵という意味から来ている。

芝居にとっても同じで、演技の下地として稽古することが多い。

例えば、舞台やドラマなどで役柄が決定している場合でも、エチュードを使って稽古をする人も少なくない。

その役の台詞にない部分の情感を得る為にエチュードが理にかなっているからだ。ドラマや映画、舞台は即興とは違いその役の台詞や状況が台本にある。その台詞を口に出す為には役作りが不可欠だが、そもそも役を作るといふ発想自体が少し過ちで、その役に自分が近付くのではなく役と自分を近付けるといった方がより分かり易い。その役を自分に近付け、自分もその役になる為に近付くときに、台詞のない所まで稽古をする事がある。その時にエチュードが活躍する。役柄の人物で台本の場面にはない状況や目的などを決めて稽古をすることで人物像が自分の中で明確になっていくのがわかる。僕も現場に出る前に役柄のエチュードをよくやる事が多かった。いわゆるエチュードは演技にとって発声練習と並ぶ基礎練習なのだ。

稽古を始めて、すぐに一つの事に気がついた。

ここの事務所のタレントは演技というよりもタレントそのものを育成する事に力を入れている為か、みんなぎこちなかった。普段はアイドルと称して事務所主催のトークライブやイベントなどを月に何回かやっているみたいで、みんな舞台度胸や話す事には慣れているようだった。でも人当たりはいいがエチュードをやると全て上辺だけなのが浮き彫りになってしまう。

その為に今回村中先生が演技指導に呼ばれたわけだが、正直に僕の目から見てもひどいものだった。村中先生の用意してきているエチュードの台本には、人物と状況と台詞まで描かれていた、いわゆる通常の台本に近い形のものを更に情感やト書きを多めに足して描いてあり、人物像を導き易いようにしてある。

しかし、人物像の演技指導をする前に停止してしまう。それは、そこに行く前に村中先生が止めてしまうからだ、例えば人を見つめる芝居をする時にその後の「久しぶり！」という台詞を言う前に

止めてしまうのだ。

人を見つけるといいう芝居をする事が出来ない人が多かった。さすがに村中先生も少し頭を抱えていた。エチュードでの人物情感を稽古テーマにする予定だったが、いつしか人を見つける為の演技稽古になっていった。

7人が8人くらい終わった頃だろうか、初めて男性が稽古に登場した。僕は見つけられる役をやっていて、次の稽古相手が基樹だとすぐに気付いた。

初めての感覚を見つけてくれたこの青年には、芝居にも驚かされた。演技なのに演技じゃない、自然な立ち振る舞いに面食らい、僕が芝居を止めてしまった。

「こらっ！！瀬戸ちゃん！何やってるんだよ！！」

村中先生から叱咤がくるのは至極、当然であつた。僕があまりにも驚いて、見つける前に今までは止められていた芝居が、そのまま進んでしまったので台詞が飛んでしまったのだ。いや、素直に進んだことで台詞が飛んだわけではなく、基樹の自然な芝居に魅入ってしまったという表現の方が正しいかった。

「ほらー！駄目でしょ！！瀬戸ちゃん。もう一度初めから！」

「あ…、はいっ！！すいません。よろしく願ひいたします。」

僕よりあきらかに若いこの青年の演技に引つ張られて、何事も無かつた様に一つのエチュードが結末まで進んでいく。

演技は一人では成立しないことは十二分に理解していたが、基樹と一緒に演技をするのはとても居心地がよく、気持ちよかった。演技はよく、自己満足や自慰になってしまふ事が多く、そうやってしまった演技は観ているほうは面白味もなにもなく、とても観れたものではない。しかし、演者はそれがベストだと妙な勘違いをしてしまいがちなのである。基樹と同じ板につき、芝居を共有してみると彼の次の行動や芝居がどんな事になるのかとドキドキしてたまらなかつた。自然な演技には自然な演技で引つ張られていく。まさに同調だった。当然のように村中先生も随分と驚いていたように見えた。

終わった後、村中先生は驚きを隠しつつ、

「君、名前をもう一度教えてもらっていいかな？」

「あつ、はい！吉田基樹です！」

彼は少しうわずった声でそう答えて名乗った。

結局、稽古を終えてみてエチュードを完結できたのは基樹だけだった。基樹の芝居を見てなのか、年は違うが背丈格好がほとんど一緒に共感を持ったせいなのか分からないが、なぜか僕は基樹ともつと話しをしたくて仕方が無かった。稽古が終わってすぐに、いつの間にか基樹と雑談をしていた僕は、基樹の家が僕の家近所だという事を知り、通常なら村中先生と一緒に帰るところを基樹と一緒に帰ることにした。

僕にとつてはこんな事は今までありえない出来事だった。今日会ったばかりのよく知りもしない相手と一緒に帰るなんて、現在の世の中に携帯電話を持っていないくらい不自然な出来事だったが、もつと不自然な事は初対面なのに話しが途絶えることなく盛り上がり心の底から笑いあえてしまった事だった。

初めから不思議と波長が合った。今まで生きてきてこんなにはじめから自然と打ち解けたやつは初めてだった。

この日を境に僕と基樹の関わりが深くなっていった。親友と呼べる彼との出会いは僕にとつて嬉しいはずの出来事なのに、この時の僕は素直に喜ぶ事が出来ない奇妙な感覚までも一緒に獲得していた。複雑に絡み合った巨大迷路を自分で更に道を増やして、より複雑にしていく気分だった。

そう、『死と再生』の象徴であるウロボロスが永続的であるように、自分で自分の尻尾を食べ、始まりから終わりを繰り返す。僕には親友も恋人も欲しくてたまらないはずなのに、作りたくも無い矛盾のウロボロスの『死と再生』が常についてまわっていた。

開かないトビラ

よく晴れた午後、バイトの休憩時間を使って井の頭公園まで足を運ぶ事が多かった。3月という桜が蕾をつけ始める時期、少しフライング気味の子は桜の本来あるべき姿に少しでも近づいていこうと新緑から淡紅色へ成長していく。まだ真新しい葉や枝からこぼれ落ちる少し大きめな木漏れ日の光を全身に受けて湖を見ながら昼ご飯を食べるのが僕のお気に入りだった。

三分咲きほどの井の頭公園の桜は、新緑色と淡紅色の混じった幻想的な風景を僕に提供してくれている。まだ咲ききっていない桜を見ると理子の綺麗な長い髪を思い出す。黒くて長い直毛の髪。真っ黒だけど光に照らされると少し緑がかった黒い髪。僕は理子の風に揺られてほのかに漂う優しい髪の香りが好きだった。

理子は満開よりも五分咲きの方が好きだと僕に珍しく熱弁を語っていた。あまり多くは語らない理子に、いつもは僕の方が必要以上の熱弁を語ったりしていたが、桜には学生時代に特別な思い入れが合ったようで、昔の話を自分から話してくれた。多くは語らない彼女からは特に昔の話について話すことはほとんどなく、理子の過去も知りたかった僕にとっては、いつも僕から尋問のように聞く術しか理子の過去を知りえる事が出来なかった。

なぜ僕はあんなに理子の過去に興味を持っていたのだろう。僕がまだ成人の男性としてあまりにも未完成で、過去の事にこだわらない強さを持ち合わせていなかったからなのか。いや、間違いなくその時に生きていた僕の感情は、きつと知りえない理子の全てを理解したくて、もつともつと理子の事を知りたくて知れば知るほど好きになっていった。過去も含めて理子の全てを愛せると思っていたから。それが一方的なエゴだとも気付かずに。

自らは語らなかつた理子は、そんな僕の尋問まがいな訊く過去を

暖かに導いて答えてくれる。まだ数字を数えられない子供に一から手で数えて教えるように嫌な顔をおくびにも見せずに丁寧丁寧に。そんな彼女が後にも先にも自ら進んで過去の話しをしてくれたのは、この時と深夜の眠れずにアロマキャンドルの暖かな光の中で語りあった時の2回のみだった。話しの内容よりも、理子から話してくれたことに、喜びと驚きが混沌した奇妙な感情がその時僕には存在していた。

理子は春を知らせる暖かい風に綺麗な黒髪をなびかせて、寂しくとも優しくともとれる二重の瞳目が印象的で、リップで潤った少し厚めの魅力的な下唇で僕を誘惑しながら、祥は過去にも光を灯せる人なんだねと、優しく微笑んだ。

「僕は過去に光を灯しているんじゃないで、理子に光を灯しているんだよ。」という、理子は俯いて少し困った顔を一瞬して、ふふ、おかしい人と、いつもの決まった台詞が返ってくる。

僕と理子は同じ年だったけど、理子が随分大人に見えるのは僕が子供みたいなせいもあったかもしれないが、この時折見せるクレバーな部分がより一層大人っぽく見せていた。

東中野の桜川橋の陸橋を渡って線路沿いに歩くと見事な桜並木が満開の桜で僕と理子を迎えてくれていた。満開の桜が一陣の風に煽られて桜吹雪を作った刹那、だから五分咲きがいいのと、ポツリと悲しげに呟いていた。散って行く桜の姿を頑なに拒絶しているように、散る事の無い五分咲きが理子にとつての満開だった。

桜並木を二人で線路沿いに歩いていくと、理子の細くて柔らかく、でも清冷された汚れのない澄んだ手を僕の手へ絡めてきて僕の熱を奪っていく。僕も理子の冷えた手に、より一層応えるようにぎゅつと優しく絡め返す。ちょうど理子と付き合いだして1年過ぎた二度目の桜の時期だったが全く色褪せることのない愛をお互いに臆病なくらい探りあいながら、小さな子供がなぞなぞの答えを紐解いていくようにゆっくりと確認しあっていた。

どれだけ好きだったとしても、どれだけ愛していたとしても、い

くら僕があの時子供だったからといって僕は毎日と言うほど理子と一緒にいるのにどうしてあんなにもドキドキが止まらなかったのだろう。初恋をしている時のあの純真無垢なときめきが理子という時はずっと継続していくことができた。

「理子、好きだよ。君を愛している。」

僕の突然の言動は理子を度々困らせているみたいだったが、すぐに理子は友達や事務所の人々には決して見せない安堵の表情を浮かべて、私も好きよ、君を愛しているわ。と、オウム返しのように嬉しそうにそう告げては安らぎを求めて僕の胸に飛び込んで温もりを確かめにくる。

理子は時々何かに不安になるのか、祥はなんでそんなに私の事を好きなの？と、聞いてくる事があった。まるで卵から孵化したばかりの弱々しいヒナが親を探して求めているように。

普段はすごく強い女性のように見えた理子は、平常心を常に身に纏っていたのではなく、平常心を装っている事に僕はようやく気付いてあげられていた。

この日の理子も、満開になって散っていく桜の花びらを悲しげな目で追いながら、同じ問いを僕に投げ掛けていた。

僕はなんて言えばいいんだろうといつもわからず、毎回同じ言葉を理子に送っていた。

「理子の全てだよ。」

そう返すと理子はいつも決まって少し俯き、ほんの数秒の沈黙の後、うん、私も祥の全てが好きと返してきた。

でも、この日はいつもと様子が違っていた。

全てってなに？本当に祥は私を好きなの？祥はなんで私と一緒にいるの？祥は私の何を知っているの？

今まで見たことのない理子が散り逝く桜の中で人目もはばからず徐々に声を荒げて咆哮していく。こんなに感情的になる理子を僕は

初めて見た。なにかを吐き出すかの様な勢いで桜並木の中、荒々しい声がこだまして行く。僕は慌てて理子を抑止して落ち着かせた。そのまま理子の肩を抱いて、人並みを避けて桜並木を進んで行く。桜並木を程なく通り過ぎ、いくつかの路地を曲がるとすぐに理子の家が見えてくる。僕はとりあえず理子を家に連れ帰り、抱えたままベッドの上に横にさせ休ませた。

まだ興奮が冷めきれない理子をみて、お茶でも入れてあげようと立ち上がった僕の手をいつもより少し温かくなっていた理子の手に？まえられた。ここにいてと、一言だけ消え入りそうな声で告げたのを聞いて、僕は理子の隣に腰掛けてまだ温かい瞳からの雫を人差し指の甲でそっと拭いてあげながら、

「大丈夫だよ。」

そういつて抱擁し落ち着かせた。肩越しに理子の顔が小さく痙攣しているのが分かって僕の肩がハンカチの役割を果してくれた。もう嫌いになっちゃったかな？そう告げた理子に、今まで培ってきた愛情より比べ物にならないくらいの愛おしさを覚え、

「そんなことない！好きだよ、理子。僕は理子を愛している。人には見せない意地っ張りな所も、どうしようもなくわがままな所も、鏡の様な繊細さも、そう全部愛してる。理子が年老いておばさんになったって、おばあちゃんになったって、例え太ったりして容姿が変わったって、理子が理子である限り僕は君を愛しているし、かけがえのない特別な存在だよ。」

気付いたら僕の瞳も滲んでいて、ひと雫こぼれ落ちていた。理子はあるがとうとはとても聞き取れない発声でそう告げると、僕たちは強くお互いに抱き締めあった。

この日僕たちは今までの一年が実り何かを得た気がして、何度も何度もお互いに身体を求め合った。

でも、得た気になっていただけできつと何も獲得はしてなく、逆に何かが足らなかったんだ。

だから、あんな事になってしまったんだ…。

「あつ！もう桜咲いてきてるね！」

急に現実に呼び戻されて、形容しがたい表情をして振り返る。

「あはははっ！なんて顔してるの？もうご飯食べちゃった？」

振り返りそれが僕に向けて発せられた言葉だったのだと認識するまで暫くかかった。

満面の笑顔で少しオレンジ色だった褐色のちよつとだけ短めの髪をなびかせながら、僕のすぐ目の前で尾澤沙織が立っていた。

「沙織も30分遅れで休憩に入ったから来ちゃった。」

そう言くと、尾澤沙織は僕の横に腰掛けて湖を眺め始めた。

「どうしたの？びっくりしたよ。」

「瀬戸君、前にお昼休みに井の頭公園に行く事があるって言ってたじゃない？だから来ちゃった！よく来るの？」

いつもハキハキした尾澤さんの口調は、すごくサツパリしていて好印象を人に与える。こういった本人すら意識していない部分が、尾澤さんが人気者でモテる理由だろう。

「うん、結構くるよ。バイトの休憩は最近だいたいここに来ているんじゃないかな。僕は田舎育ちだから、緑が多くて喉かな所が落ち着いてさ。なんかこうやって湖とか見ると寛大になれない？」

「あはは、おじいちゃんみたい。うーん、私は生まれてからずっと吉祥寺で育ったから、逆にあんまり井の頭公園って来ないんだ。地元だからいつでも来れるみたいな感じがあつて。」

「そつか。たまにはいいもんだよ。おじいちゃんになるのも。」

「うん、いいもんだ！久しぶりだなあ、井の頭公園……。」

そう言つて湖を眺める尾澤さんの横顔は理子とは逆に少し丸顔で、微笑むと右側のほっぺに綺麗なえくぼが生まれ、それがまた魅力的だった。いつも明るくて賑やかな尾澤さんは理子とは何もかもが正反対だった。そして僕とも対照的な尾澤さんと話しをしていると、僕にもほんの少し元気を分けてもらえる気がする。

「あつ！そういえばこの前、瀬戸君が出たドラマ観たよ！今回は結

構映ってたじゃん。台詞も結構あつたし、早くバイトなんかしなくても大丈夫になるといいね。」

「なかなかそう簡単にはいかないよ。」

「やっぱり簡単にはいかないかあ。でも、難しいからこそやりがいがあるよね！役者さんのお仕事は最近どうなの？」

「うん、来年大きなオーディションがあるらしいんだ。まだ詳細は分からないんだけど、なんでも制作費をすごくかけて作るみたいでさ。まあでも、大きなオーディションなんて大概がもうキャスティング決まっているようなもんだしね。またエキストラかな。」

大きなオーディションなどはそれなりに受けている。事務所の、尊敬する先生の意思だからだ。でも僕はオーディションなんてどうでも良かった。役者として精進でき表現者として人に伝われば、別に大きな現場でなくても良かった。僕には大きなオーディションだからといってたいした興味があまりなかった。

「…ダメ、ダメだよ！そんなこと言わないでよ！！どうせ無理とかどうせ無駄とかまだ結果も出ていなくてやり遂げてもないのに、そんな気持ちじゃ受かるものも受からなくなっちゃうよ。瀬戸君いつも頑張ってるじゃない！瀬戸君にはいつも未来という温かな光があたっているのが沙織には見えるもん。自分の未来を信じてよ。私は瀬戸君の未来を信じているんだから。」

口調も性格も容姿も全然違うのに、理子がいるように感じる。理子との、あの最後の暗闇のような、とても耐え難くつらい決別をしてから、どんなに理子と口調が似ている女性とも、どんなに性格が似ている女性でも、どんなに容姿が似ている女性にも、決して理子以外の女性に理子を感じたことはなかったのに。尾澤さんの言葉がストレートに僕の奥底に入ってくる。初めてだった。理子を他の女性に感じるのは。

「未来か…。」

あの時から過去との決別がいつまでも出来ない僕は、未来という言葉がとても眩しくて直視できないでいる。

「そう、未来。瀬戸君の未来は瀬戸君だけのものだし、沙織の未来は沙織だけのもの。現在より先のものだからその人だけのものなのだから未来は欲張らなきゃだめなの！」

「未来を欲張るか…。尾澤さんは未来に光を感じているんだね。素敵だね。」

尾澤さんとはよく会話をすることが多かったけど、こんなにも未来に対して真っ直ぐに生きていることへ嫉妬を覚えつつも羨ましいと思う。でもそれよりも正直、尾澤さんの考えが意外なものでその発見に驚いていることの方が大きい。

僕だけの未来…。

理子は自分の未来の事も僕にはあまり話してくれなかった。でも、決まって僕の未来を案じてくれていた理子に、僕はいつも守られていた気がする。同じ感覚を尾澤さんにも今感じて、僕の奥底にある理子に触発する。同時に理性と自己嫌悪が追いかけてきてまたすぐに強固な扉に鍵を閉める。

「でしょ？素敵でしょ。惚れてもいいよ。」

「うーん…考えとくよ。」

そう言ってお互いに顔を見合わせて、同時に大笑いした。女性と話しをしていてこんなにも大笑いしたのは随分久しぶりのような気がする。でも尾澤さんに興味を魅かれてきている自分に気付くとすぐに大きな蓋で押さえ込み、そしてまた自分をいつまでも戒めた。

青い忘れな草

外に出ると暖かな匂いの告げる風が気持ちよく、見上げると宵の空に金色に光った春の大曲線が夏の準備にいそしんでいる。新しいそれぞれの環境に身を投じる人が多い世の流れの中、ゴールデンウィークが終わる頃にはようやく慣れ始める頃だろう。しかし、世の流れに逆らうように、僕にはゴールデンウィークなんてものは当然の如くなく、アルバイトと稽古のいつもと変わらない往復と、あいも変わらず時間が止まったままの古時計を動かそうともせず過去に停滞したまま彷徨いを繰り返している。

桜のあの見事な淡紅色も今ではそれぞれの枝に新しい命の芽吹きが育っている。宵の空をじっと眺めてみる。特に5月というこの時期の宵の空はいろいろな顔を持っていて、橙色から褐色に変わる空はオーロラにでも懂れるような虹色の表情を恥ずかしそうに現してくれる。

宵の空から完全なる星月夜に変わる頃、家に向かおうと井の頭公園を後にする。井の頭公園の古着屋が集まる坂道を一步步つ足元を確かめながら登っていく途中、突然の携帯バイブレーションに驚きながら携帯を手にする。

「瀬戸ちゃん？あゝ、村中ですけど。」

着信画面を見るまでもなく、ひょうきんなその声で先生というところがすぐわかる。

「あ、おはようございます！どうしました？」

そう言っ、訊いてはみたものの大体の予想は着いている。

「今、どこいますか？ちようどご飯でも食べに行こうとしているんですが、一緒にどうですか？」

村中先生には、稽古がない日でもよくご飯や飲みにつけて頂ける事がとても多い。独身者である村中先生は、自身のプロダクション所属者を本当の息子や娘のように敬愛してくれていて、僕も村中先

生を父のように慕っている。

「今は吉祥寺の駅前にいます。いつでも大丈夫ですよ。いつもの西荻窪へ向かえば大丈夫ですか？」

「そうですね、わかりました。それじゃ、30分後に西荻窪の北口に待って下さい。」

村中先生との食事は、決まって西荻窪が多かった。それは、僕への交通に対する負担を軽減する為だろう。そんな先生から伝わってくる無言の優しさや思いやりが、僕にはまた嬉しかった。

慈愛に満ちた先生へ、僕はいつも感謝の気持ちでいっぱいだった。この世の終わりとさえ言えるような、とても辛いあの決別の別れからずっと過去に縛り付けられている僕が、先生の慈愛に感謝しているのは、僕が生きているんだと自問自答できる手段の一つだった。

吉祥寺駅からたった一つ隣の駅、当たり前だが30分もかからずに到着した。少し時間があつた僕は北口の花屋の前で足を止める。

「忘れな草か……」

紫とも青くともとれる、春の豊かで爽快な空にも似たその小さな小さな花の多年草を見つけ心を奪われる。

混沌と懐かしさの中、理子は僕がよくプレゼントしたこの多年草の忘れな草を大切に育てていたのが鮮明に蘇ってくる。あの頃の子供だった僕を。

「理子？理子？」

僕の呼びかけに、えっ？と、理子は突然見失っていた何かを発見したかのように我に返った表情をして、なぐに？祥？と、一瞬こちらに相槌を打ち、そう言っただけまた花を見つめなおす。

子供だった僕は自分がプレゼントした物だったとはいえ、花に対しても焼餅を抱いてしまう。

「理子、花ばかり見ていないで僕のことも見てくださいよ。」

理子は始めに困った子ねと言わんばかりの表情を覗かせて、すぐにふふと笑い穏やかな優しい聖母にでもなったかのような素顔で僕

に歩み寄ってきて、僕の頭を撫でる。

ふふ、君はおかしい人ね。君がくれた忘れな草に君自身が苦しんでいる。本当に変な人。

冷静でいる理子の言葉に陥り、不貞腐れる僕へ続けて理子は
でも、そこが君の魅力で君の良い所。その子供っぽさを私は愛している。

不思議な愛情表現をする理子へ、僕はいつでも安堵感を見つけることが出来た。僕のおかしな部分を愛していると告白してくれているこの女性の愛情に、母親のお腹にいるこれから体が形成されようとしている胎児が、子宮の中の羊水でへその緒一本で繋がっている一体感にも勝る絆のような安堵感。いつでも僕は理子にそれを感じることが出来た。

いつの頃からだろう、理子と僕が好きではなく愛しているとお互いに表現し始めたのは。いつの頃だったのだろうか？

「おーい、祥ー!!」

振り返ると基樹が手を振って駆け寄ってくる。いつも、元気な彼は満面の笑みを浮かべて嬉しそうに僕の横まで来る。

「祥も呼ばれてたんだ！よかった。いや、先生と二人きりかと思っただよ。」

少し額に汗を滲ませながら、笑顔で話す基樹はより一層童顔に見えた。

「お疲れ、基樹。基樹も突然呼ばれたの？」

「うん。さっき電話かかってきてちょうど新宿に買い物行って帰ろうとしたとこだからちようどよかったよ！花見たの？」

「ああ、花って綺麗だなってね。」

「え、なに、誰かにプレゼントでもしようと思ってたんじゃないの？」

「そんな相手がいたらいいけどな。」

そう言いながら女性に対してプレゼントしようなんて気持ち、も

う何年もないことに気付き、それが自分と理子との決別を物語っていて、妙に生々しい。

「プレゼントじゃなく、たまには自分の部屋にでも飾ろうかなと思つてさ。」

思い返せば思い返すほど、負の螺旋に巻き取られそうになり、慌ててその口に使っていた。

「えゝゝ！祥の家に！？似合わねゝ！！！」

「うつさい！！！」

基樹と仲がいい理由はここにもある。基樹のどうでもいい会話は、すぐに現実へ戻してくれてありがたい。僕は現在にいるんだと再確認をさせてくれる。

「あつ！祥、先生来たよ。」

そう基樹が初めに気付き、基樹の向いている方角を見渡すと村中先生がこつちだと手招きをして、僕たち二人を呼んでいる。行くかつ、と、踵を返して基樹を誘導しながら村中先生の元へ駆け寄る。

「おはようございます。」

二人揃って挨拶をすると、あゝ、おはよう、と挨拶も程無く、何食べたいと、と訊いてきた。二人で迷っていると、大して考える余地もないくらいの刹那の時間に、あゝ、わかった、とスタスタと歩いて行ってしまう。僕たちも慌てて、主人の後ろを歩く子犬のように追いかけていく。西荻窪の北口ロータリーを足げに女子大通りを横切り、商店街通りに入る。ほんの少しだけ商店街を歩き、先生が足を止めたのを確認して僕たちも飼い主の後を追う子犬よろしく、先生の真後ろで歩みを止める。

「ここでもいいでしょう？ここにしましょう。」

そういつて先生が地下へと続く、人が一人ようやく通れるくらいの細い階段を下って行き、僕たちは黙って後をついて行つた。

「いらつしやいませ」

店の中をみて、すぐに何屋さんなのかは一目瞭然だった。カウンターの上に透明なガラスケースが配列よく整列していて、笹の葉の

上の新鮮な魚が今にも動き出そうと主張をしていた。どんなに僕たちにはあまり縁がない場所でも、店の雰囲気、内装創りを活目すればかなり高級な鮨屋というのはすぐにわかった。

「ちょ、村中先生、ここかなり高いんじゃない？」

と、言いかけるのを制止するように、まあいいから、と半ば強制的に席のほうを促されて、カウンターに横一線に座らされる。と、同時に女将さんの少ない年上だがきれいな顔立ちの女性におしぼりを渡されて、

「あら、君たちが村中社長のお気に入りの子達ね。」

と、話してくるのを訊いて村中先生が常連の店なんだとすぐに気づいた。

「村中社長はね、気に入った人しかここへ連れて来ないのよ。」

「こら、中村さん。いらん事を言わないの！」

「あら、怒られちゃった！」

僕も基樹も村中先生と食事や呑みなどはよく連れて行ってもらっていたが、いつも一見さんのお店ばかりだったので、村中先生のいわゆる行きつけの店に来るのは初めてのことだった。いろんな話を聞いていると、どんどん僕たちの知らない村中先生の姿が明らかになっていって、先生の過去に一喜一憂をしながら、楽しい時間が過ぎていく。お寿司自体は高級店の名に恥じない、今までに食べた事もない新鮮なネタが次々と出てきて、それが更に楽しさを倍増させた。

ほろ酔い気分になった頃、それまで上機嫌だった村中先生が唐突に真剣な表情をし、僕と基樹に話しを始めた。

「この前、話しましたが来年に少し大きめの映画が製作されます。製作プロデューサーとも話しをしましたが、来年の夏頃からオーディションを始め、クランクインは再来年早々に撮影に入ります。しかしね、いくら大きいといっても日本の映画マーケットは正直海外に比べ、規模が小さいのはわかりますね？」

「はい、知ってます。世界に比べると製作費ひとつとっても大きな

差がありますよね。」

日本映画マーケットは世界の、特にハリウッド映画マーケットに比べると、まだまだ天と地ほどの差があるのは歴然だった。それは、日本映画の輸出は輸入額に対して大幅に赤字をカバーしきれないことから明らかで、日本映画のビジネス枠が小さいと吐露しているようなものだった。つまり、現段階で何十億とかけて映画を制作するということは、制作側が赤字を覚悟の上での進行となってしまうとなれば、簡単には世界視野を入れての映画製作はプロデューサーにとってはリスクが高すぎるのは言うまでもなかった。

「今回の映画を指揮するプロデューサーの小湊はね、私の古くからの友人なんです。まだ、私が役者をかけたしの時代に知り合いました。彼もその時はかけだしでね、歳が一緒ということもあって、よく朝までいろいろと語り合ったものです。」

先生は、ひとつひとつ噛み締めるように話しているようにみえる。なにか、悔しさにも似た感情がひしひしと伝わってくるのは気のせいだろうか？少し低い声で、思い出しながら過去を丁寧に話す先生の横顔には、迫力すら感じた。

「昔から日本映画は世界に進出することは難しかったです。今でこそ、映画は徐々に世界に進出はしているものの、それでもまだまだ世界にはかないません。それは、良い作品、悪い作品とかではなく、マーケットの規模が単純に違うからです。」

先生の言葉が少し荒げているのに気づき、思いがあるんだとようやく気づき始めた頃、先生は続けてこう言い放った。

「日本には、他の国と違った特殊な文化がいくつもあります。それは、江戸時代や侍などといった外国にとってもわかりやすいものではなく、過去から受け継いだ尊貴な文化。それが今、現在の日本人にも根付いています。たとえば、武士道といった精神は現代日本人にも多く引き継がれており心を形に残すといった素晴らしい精神が根付いています。プロデューサーに昇格したばかりの小湊とプロダクションを設立した私はね、世界を視野に入れた映画を製作しよう

と血氣盛んに東奔西走したことがありました。」

いつも先生と食事などを共にすると、決まって冗談交じりの話などが多かったが、いつもとは様子の違う先生を、僕はじっと真剣に見つめ、一言一句の重みを感じながら聞いていた。その横で、基樹もいつも以上に真剣で難しい表情をしながら先生の話を聞いている。

「でも、ダメでした。資金集めにどれだけ東奔西走しようと、売れている役者にオファーをかけようとも、まったく相手にもされませんでした。」

「……………」

「……それは、どうしてですか？」

何も言えなかった僕の横で、僕の言葉を代弁するかのように基樹が言葉を投げ掛けていた。

「……ん、そうですね、まずはその企画に賛同してくれて資金を捻出してくれる企業が全くなかった。残念なことだね。」

「え、企画がだめだったんですか？」

基樹はたまに物凄いことを平気で口にする横で思いながら、

「いえ。あの企画は面白かったはずです！」

「え、じゃあなぜですか？」

「今ほど、世界に対して売れる為、儲かる為のノウハウや情報、知識がその時代は乏しかったんです。それは、私達も一緒に最後の決め手となる説得材料が思いつかなかった。」

先生は少し俯きながら、おちよこに入っている日本酒を一気に飲み干した。

「そして、なにより一番大きな弊害となったのが、私達自身でした。」

「……………」

ずっと押し黙って聞いていた僕だが、たまらずに言葉が出ていた。「私も小湊も、お互いに製作としての大きな実績もなにもない時でした。役者としてそこそこの実績を残していても、製作としての実

績は皆無に等しい。知名度のない私達はそれだけで疎外されてしまったのです。」

「・・・・・・・・・・」

言葉がでなかった。先生の気持が痛いほど伝わってきて心が打ち潰されそうだった。

「はは、まあ少ししんみりしちゃいましたね。そういう過去もあってからね、小湊とは一つ誓ったことがあったんです。お互いに結果を残そうとね。そして、ある程度結果を残せたと感じたら、一緒に大きな映画を製作しよう」とね。」

「そうなんですか……」

「ずいぶん時間がかかりましたねえ……」

先生はそう言うとき飲み干したままのおちょこを眺め暫く目を閉じた。少しの沈黙が続いた後、静かに言葉を発し始めた。

「それで来年に製作する映画に実は私も企画として参加します。」

「えっ!？」

「そうだったんですか？」

驚いた。先生が企画に参加することもそうだが、過去の話を生が生がしてくれる中で一番衝撃を受けた話だった。先生のあまり見せたことない一面、先生のこの企画に対する想い、全てが自分の気持ちを高ぶらせる。

「今回のキャスティングですが、実は主演以外はまだ決まっています。正直言えば、君たち二人をキャスティングしたかったのですが……ま、小湊とも話して、主演以外はオーディションで決めることにしました。売れている役者も売れていない役者も、そして素人でも主演以外は一般公募します。」

「でも先生、大きな映画なんですよね？」

「はい、そうですよ。」

「そんな大きな映画なのに主演以外はオーディション選考なんですか？」

「今の業界はね、新しい波が絶対に必要なんです。これは小湊と一

緒にずっと考えていた作品だからこそ、新しい製作にしていこうと思います。だからこそ新しい波と一緒に製作をして行くには主演以外はオーディションなんですよ。」

芝居を教えている時のような真剣な眼差しを僕たちへ向けている先生は、おもちゃで一所懸命に遊ぶ子供のような純粹さが感じ取れる。

「だからこそ君たち二人には、頑張つてオーディションに受かつて欲しいんです。出来レースでも何でも無い、真剣に選定をするオーディションです。それに向けて、瀬戸ちゃんと基樹の稽古を今後は付けていきます。」

「はい！ありがとうございます！」

「よろしくお願いいたします！」

深々と僕と基樹は頭を下げながら、こんなにも自分たちのこと考えてくれている先生の心遣いが嬉しかった。

「それでね、瀬戸ちゃん！」

「えっ？何でしょうか？」

突然口調の変わった先生の言葉にビクツとしながら、先生に顔を向ける。

「瀬戸ちゃんにはね、前から言おうとしてたことが実はあります。」

「……………はい。」

「僕はね、瀬戸ちゃんの過去になにがあつたかまでは詮索しようとは思っていません。ただね、瀬戸ちゃんの芝居には常に100%をやりきつたという真剣味が伝わってこないのは基樹が見ていてもわかるでしょう？悪く言えば手を抜いてるようにしか見えません。」

「え、……………いや、そんなことは……」

ドキッとした。理子との決別があつてから、僕は芝居を自分の逃げ道にしていたかもしれない。ただお兄ちゃんのおかげでかろうじて芝居を真剣に想うことはできているのは確かだ。

「いいかい、瀬戸ちゃん。君には基樹にも敵わない芝居の才能があります。この場限りしか言わないからちゃんと聞いてて下さいね。」

普段、滅多なことでは人を褒めない、いや、正確には基樹に対しては褒めることは多かったが、僕には今までほとんど褒められた記憶がない。そんな先生の言葉に戸惑いを隠しきれないでいる。

「瀬戸ちゃんはいいいもの持っているんです。特に君の一番の特徴と言っても過言じゃないのが目力です。これは、稽古や訓練でどうにか身につけるものじゃなく、生まれもった才能なんです。瀬戸ちゃんは、今まで目に対する稽古や訓練はしてきたことありますか？」

「・・・いえ、ありませんけど・・・。」

「え・・・、祥って今まで目の稽古してきてなかったの？」

「ん、ああ・・・、目に対しての特別な稽古はやってないけど・・・。」

「うそっ……。」

「そうでしょう。目に力を入れるなんて言葉に出せば簡単ですが、あれは稽古をしてもそうそう簡単かつ自然にできる芝居じゃないんですよ。」

「え・・・、そうなんですか？」

「基樹はね、芝居ができます。それは、私の目からみても天才的な演技力です。でもね、瀬戸ちゃんは瀬戸ちゃんで、誰にも負けない個性を持っているんです。」

こんなことを村中先生に言われたのは、本当に始めてだった。いや、村中先生に限らず、人生でここまで自分の事を買ってくれる人が今までにいただろうか？こんなにも心が満ちていく感覚はもう随分と懐かしく感じる。理子との愛情に満ちたあの空間にも似た感覚で暖かく優しくかった。

「だからこそ、瀬戸ちゃん！今のままの芝居では、大きな役での抜擢は難しいです。瀬戸ちゃんの芝居は本気を出してやっていない。それは、瀬戸ちゃんがウチに来た時からそうでした。それでは君の個性は充分に生きてこないからこそ、そこはちゃんと理解していただきます。100%を私に見せて下さい。」

凶星だった。未来を模索することの出来ない僕はいつも芝居に救

いを求める為に、芝居に甘えていたのは言うまでもない。過去を彷徨っている僕には正直どうにかできる自信も勇気さえもなかった。天照大御神が天岩戸へ隠れてしまい光が封じられてしまったかのように、嬉しいはずなのに僕はただただ、…はい、と返事をするしかなかった。

始まりの光陰

季節は移り変わる。

心とともに移り変わる。

つい先日まで緑色豊かな世界観を入道雲の壮大で真つ青な空が見下げているとおもっていたら、金色の風景を映し出す為の段取りを整えるように、どんよりとした陰りをみせる曇天。まだ夏の余熱を残した天地に、徐々に肌寒さが顔を見せ始めては恥ずかしそうに隠れてしまう。

ここ3〜4日雨が降りやまない日々が続いていた。

この雨が止む頃には鈴虫の音色が妙に心に響き始め、辺りもすっかり赤や茶色の褐色へ衣替えをしているだろう。

秋の空とはよく言うが、心や愛情が変わりやすいはずの季節に差し掛かっていても、一向に僕は満たされることのない日々を暮らしていた。

毎日決まった時間に起きてアルバイトへ行く準備をする僕だったが、今日は朝から身体のことがかかった。身体を起こそうとしても全身の気だるさが勝っていて、布団から出ることができない。

「・・・弱ったな。」

とりあえず身体に鞭を入れて、体温計を探し左脇下に装着してまた布団へ潜り込み、体温計の知らせを待ちながら、ふふと微笑んでいる自分に気付く。

こうして身体が気だるく熱が明らかにあり、考えるのもおっくうな状態なのに、たった一度だけ風邪をこじらせて倒れた僕を看病して泣きそうになっていた理子の姿がフラッシュバックしてくる。

ちよつと！祥！！こんなに熱があるじゃない！理子は、怒り気味にそう言うともそれでも心配そうな泣き顔に近い表情で僕に向かって

そう言った。

「ああ、ちよつと高めだね・・・。」

もつ何も考えが追い付かないくらい、疲弊していた僕は理子に対しても適当な受け答えしかできなかったが、ちよつとどころじゃないよ！！39 近くあるんだよ！死んでしまったらどうするの！？と、いつも冷静な理子が今にも大粒な雫が瞳からこぼれ落ちそうになりながら、僕の右手をジツと掴んで離さずいつまでたっても寝かしてくれない。それが妙におかしかった。

「大丈夫だよ。ちよつと寝てればすぐに熱は下がるから。」

そのまま理子は僕の布団の上から、十の字になるように顔をうずめながら肩が波打っているのが布団越しにみえて、

「理子、本当に大丈夫だから。あ！そういえば少し寒い気がする。理子も一緒に布団に入って温めてくれる？」

そう言うつと、理子は顔を猫みたいにごしごし拭いて少しふくれっ面で、しょうがないなと、そう言うつと僕の熱の籠もった布団の右隣の中にススッと身体を寄せて入ってくる。

朝から体調の悪かった僕は、稽古場では平気を装って稽古をしていたが途中で限界が来てしまい倒れてしまった。稽古場では付き合っている事を内緒にしていた僕たちにとって、理子はそこですぐに駆け寄れない事に業を煮やしていたことだろうと考えながら、理子の横顔を少し撫でる。んつ、と少し瞼が腫れた真ん丸な瞳でこちらを向く理子に、思考が低下しているにも関わらずドキッとしながら、ごめんねというと、本当だよ！祥は無理し過ぎ！と一喝して、坂田さんが直ぐに行つてあげなっているいろいろ気を使ってくれたの、と付け加えた。

「そっか、お兄ちゃんが・・・。今度二人でお礼しないかね。」

うん、とそう言うつとまた僕の胸に顔をうずめて、僕を優しい暖かさで包み込んでくれる。

坂田俊樹は、僕と理子の関係を唯一知っている存在だった。

ピピッ！ピピッ！

電子体温計の音がなり、熱をみてる。

「38.7・・・こりゃ〜だめだな。」

思っていた以上の高熱で、実際に電子数字を目の当たりにして余計に体がだるさを要求しているように思える。測ってしまった事に少し後悔を覚えつつも携帯を手に取りアルバイト先に電話を入れる。

「あつ、店長、すいません。朝から高熱を出してしまいまして・・・

。39 近くまで熱が上がってしまったていて、申し訳ありませんが、今日お休みを頂いて宜しいでしょうか？」

「おいおい、大丈夫？こっちは平気だからゆっくり休みな。独りで大丈夫か？」

「あ、大丈夫です。寝てればすぐに良くなりますから・・・。」

「そうか？ま、やばそうだったらすぐに連絡するんだぞ！」

店長の優しさが風邪で言うことのきかない身体と気持ちが弱っている僕にはすごく暖かく感じた。

熱が一向に下がらず、布団に入っても熱のせいで眠ることすらままならない。こういう時は不安という魔物が必然的に覆いかぶさってくる。それと同時にいろんなことを考えてしまいがちである。高熱で思考は低下しているはずなのに、頭が冴えてくるおかしい感覚。雨は好きだった僕も、こういう時の雨の滴る音はより一層の不安をあと、気持ち悪かった。

ふと、気配を感じてドアのほうに目を向けてみる。

「・・・！？お、お兄ちゃん！？」

今いるはずのない坂田俊樹の姿をみて驚嘆しそうになったが、よく見ると壁のコルク板に貼ってあった一枚の写真がヒラヒラと木の葉舞うようにゆっくりと落ちていく。

写真はちょうど、表面で床に落ち、その写真を眺めると楽しそうに笑っている坂田俊樹と僕、理子、そして理子の同期の高田が上半身UPで狭いフレームの中並んで映っていた。

「お兄ちゃん・・・。」

僕が過去に縛られたまま動けない理由をお兄ちゃんに必死に未来を与えようとしてくれている存在である。しかし、理子とお兄ちゃんの両方はクサビのように僕の陰と陽を結びつかせる。

僕は一年にたった1度だけ、どんなことが起ころうとも毎年必ず中野駅を訪れる。それは例えば、登山家が目の前に山があればあたり前の様に登頂して、なぜ山に登るんだい？と問えば、そこに山があるからさ、と愚問のように答える、僕にとってはそんな至極あたり前の事になっていた。

1月7日…

それはまだ、僕が東京に出て来たばかりのいい加減な気持ちを持つて役者を志している頃、何の目的もなくなんとなく有名になりたくただただ売りたいと思っていた頃、その時に知り合った一人の役者の人生に深い繋がりがあった。

決して上京して来る事はないだろうと思っていた。田舎に比べる と随分と息苦しくもある無彩色な過密都市は、僕にはあまり良いイメージはなかった。右も左もわからないまだ上京してきたばかりの頃、吉祥寺に田舎とどこか似た感触を持った僕は、掌を返すようにすぐに順応し始める。

田舎から飛び出してくる当日の瞬間は今でも忘れない。地元を離れる事に多少なりとストレスを感じていたはずの僕は、なぜか地元を出発する際の気持ちはすごく清々しく新鮮だったのを良く覚えて いる。

冷静でいるのに高揚感というか、闇夜から一筋の光が持たされ徐々に茜色の明け方を迎えるような、例えるなら真冬のマラソン大会だった。

小学校や中学校で走った真冬の北風が吹き荒れるマラソン。スポ

ーツが得意だった僕は全校上げてのイベントをドキドキして、その緊張感を楽しんでいた。教室から一步足を踏み出した途端、その気温差に身が引き締まり、それが寒いと脳が身体に伝達するよりも先に痛いと感じた凍える程の寒冷さ。

その寒いのを通り越して痛いと感じる状況にもかかわらず、半袖短パンになり運動場に飛び出し全校集会よろしく、生徒たちは整列をする。スタート前の緊迫した緊張と寒さによって思考回路が低下していくのを手に取るように実感する。校長先生の長い挨拶にうんざりし始めた頃、スタート整列の号令がかかる。

いよいよ緊張が頂点に達しようとしていた頃、まわりの生徒たちとのスタートの場所取りの駆け引きが始まる。

ただ純粹にマラソンを迷惑に思っている生徒や興味ない生徒、必死で先頭を取ろうとする生徒と様々だったが、僕は後者の方だった。なんとか先頭に近い位置をキープして、スタート待ちをする。

パン！

一斉にスタートを切る生徒たち、僕も程なくよいスタートを切るが、身体が冷えきってしまったている為、足の裏がジンジンする。しかしそれに耐えるとオイルをさした自転車のようにスムーズに身体が動いてくる。

走っていくうちに段々と身体が温まってくるのが伝わり、気付けば額に汗が滴り落ちている。でも、北風の吹き荒ぶ冬なのだ。身体が温かいと感じているはずなのに身体を覆う冷氣によって、暑いのに寒いという摩訶不思議な状態が出来上がる。

この感覚が僕は好きだった。

そう、東京に上京する際、不思議だがこの感覚を味わえたんだ。だから僕の人生をおそらく左右するであろうこの第一歩は、鮮明な記憶として僕の中に残っていた。

東京に出て来る事になったのは、月並みではあるけどあるオーディションの書類選考に通過したからだった。まだオーディション自

体に受かった訳でもないのに、ここぞとばかりに書類選考に通過した事を理由に実家を飛び出していた。母親から高校卒業をしてからは家業を継ぎなさいと強く推し進められていた僕には、実家を飛び出すにはその理由で充分だった。

見渡せば地平線まで見えるんじゃないかと思わせるくらいの広大な田園風景の隅っこに、小さな町工場が田んぼに向かって自分の主張を誇示するかのようになっている。隣接する鈍色の瓦が目立つ純和風の一軒家を町工場と繋ぐ通路がまるで手を取り合っているようにも見えた。僕はここで育ち、この町工場を長男として継いで行く。まあ、それも悪くないかと、まだ若いにも関わらず諦めにも似た覚悟が働く原動力となっていた。

毎日、働いては真つ黒な姿になる事にも慣れて、日々が黙々と過ぎていき20歳を迎えた年、僕はある一本の映画の一人の役者に魅了される事になる。

それは幼少の頃に失くした大切な宝物をどんなに泣きながら探しても見付からず、ある時ふと偶然的にも発見できた、そんな素敵で輝かしい出会いだった。

ゲリー・オールドマン。

気付いた時には僕はゲリーに夢中になっていた。芝居という表現法によって、諦めかけたていた自分の未来に一つの光が照らされて、僕が自然と光源を模索し始めるまでそうは時間がかからなかった。傍観者から表現者へ、この時の僕のくすぶった価値観をゲリー・オールドマンと芝居が救出してくれた。命の恩人にも近い感情が田舎を飛び出すことを一つずつ選択し決意に変えていく。

僕がこっそりとオーディションの用紙を郵送し、程なくして書類選考通過の通知が返ってきた時、これで第一歩が踏み出せる喜びに母親がブレーキをかけてくるのは当然のことだった。しかしもう前を向いてしまっている僕にはさしたる障害でもなく、ハードルをぴよんと乗り越えるように母親の説得をしていく。そんな中、家業を一番継いで欲しいと思っているはずの僕の父親は、ずっと沈黙を守

ったまま静観していた。

職業柄だからだろうか、父親はかなりの筋肉質の持ち主で普段から口数の少ないいわゆる職人気質の人だった。酒豪でギャンブルもやる、そんな父親だったが僕は母親以上に父親の事を尊敬している。だから、高校を卒業してから継ぐということに抵抗はあったものの、継ごうという覚悟に至ったのはこの父親であつたからこそ成り立つたものだった。

子供の頃、父親からはよく殴られたものだった。特に嘘という言葉には過敏に反応して、僕が万が一にも嘘をつこうものなら漆黒の恐怖で覆われた。そのおかげで僕も人に嘘をつく行為を全くしなくなったし、逆に嘘をつく人は今でも大嫌いだ。暴力的な父親は当時から好きではなかったが、偽りや暴力は人の為には不利益という事を身を持って学ぶことができ、多くのものを授けてくれた不器用で口下手な父親の教えを今ではとても感謝しているし、愛している。

東京に旅立つ前日、東京に行く事にずっと静観したままだった父親が珍しく外に酒でも飲みに行こうと誘ってきた。父親と晩酌する事は一つ屋根の下にいるから珍しくもないことなのだが、外に二人きりで飲みに行くのは初めての事だった。

昔ながらの居酒屋よろしく、家から歩いて15分ほどの慣れ親しんだ朱色の暖簾が印象的な酒処に腰を据える。

「らっしやい！…お、親子二人で来るなんて珍しいね。」

居酒屋の大将はいつものように温かく僕たちを迎えてくれる。これが地元で最後の晩餐になるんだと思うと少しセンチな気持ちになった。

「久しぶり、大将。」

昔から父親はよくここに入り浸っている常連で、子供の僕をよく連れて飲みに来ていた。小さかった僕は、厨房にまで潜り込んだりして家で見ることのない大きな調理器具などをみては興奮し、よく走り回っていたのが昨日の事のように思い出されて懐かしい。幼少の僕にとってここは大きなおもちゃ箱だった。

思春期になつてからは全く顔を出す事もなくなつてきたが、ここ最近では友人と飲む時にはちよくちよく使わせてもらつていた。

中央に黒色のコの字に囲んだカウンターの上には煙止めの少し小さな暖簾がたれていて、焼き鳥の香ばしい匂いが染み付いていて食欲をそそる。そのカウンターの真ん中に親子並んで腰掛ける。

「二人揃つてくるなんて本当にめつたにないよな。いつもの日本酒でいいんだろ？ 祥ちゃんも同じかい？」

「じゃ、同じで」

「大将、今日は客少ないな。」

「そうなんだよ！ だから二人揃つてきてくれて助かつちやつたよ！」

「ま、たまにはな。」

相変わらず口足らずの父親は、きつと初対面の人には怒っているような印象を与えるだろうが、これが通常の自然体だった。

親子二人、晩酌を酌み合わせているにも関わらず、ここでも東京に行く事、家業の跡継ぎはどうするのかという事については全く会話にもでず、それどころか父親は大将との会話を楽しんでいるようで、時間だけが刻々と波を打つていった。

酒の肴も堪能し、ほろ酔い気分になつたあたりで居酒屋を後にした。外に出ると冷たい風が迎えてくれて、ほろ酔い気分をさらつて行つてくれるのが心地良い。ずっと静観を保っている父親に、ついに僕が痺れを切らして

「明日、東京に行くよ。」

この年齢にもなつて未だに父親の事を恐ろしいと思う所があった僕には決意を持つての一言で、どんな返答が返ってくるのかも大体想像がついていた。ところが長い沈黙の後、父親が発した一言は意外なものだった。

「ああ…お前の人生だ。好きにしろ。」

想像すらしていなかった思いもよらない返答に、驚きと動揺を隠せずには僕は父親の背中姿をただ黙つて凝視し、気付けば瞳に焼

き付けていた。その大きく力強い背中では父親の不器用さをそのまま表わしている様だった。小刻みにリズムよく動く肩、丸太のように太い腕、父親の背中をこんなにもまじまじと観察するのは初めてかもしれない。そう考えていると想像すらしていなかった父親の言葉が、壊れたレコードのように何度も頭の中で木霊し目頭が少し熱くなってくるのを感じた。

父親の後姿をみて、立ち止まっている僕に

「ほら、どうした？帰るぞ！」

と、言っただけで立ち去ると歩いていく。父親の背中をもう暫く見て居たかった僕は、その背中が見える一歩後を金魚の糞のように追いかけて歩いて行った。

その言葉からまた無言を保っていた父親が、家に到着するほんの数メートル手前で、最後にこう告げた。

「…頑張つてこい。」

何百人と申込があつたオーディションの書類選考に通つた30名余りが一つの空間に集められ、プロダクションの社長である森田の話しを一心に訊いている。このオーディションは所属者を決める為だけに開催されたようで、一日で終わるものではなく一般に言うワークショップ形式の6日間のオーディションだった。全てが初めての経験でワークショップなんて言葉も当然知らず、僕はまだ役者としては全く無知で分けもわからず受講していた。

初日にそれぞれ台本を渡される。初めての台本、初めての演技、僕は初めてばかりの新鮮な経験に興奮を抑えられずにいた。台本は30分位の実際に使用された舞台の脚本で特に配役など決められずにワークショップは進められていく。それには理由があつた。

「君たちには最終日にこの舞台の本番公演をしてもらう。但し、観客はウチの関係者と所属者であるから、そんなに構えなくても大丈夫だ。所属オーディションだが、この舞台公演のワークショップを通して最終日に所属合格者を発表します。」

オーディションというのはこんなものなんだと無知の僕はそう思っていたが、周りの反応をみて通常のオーディションとは少し違うことを容易に想像できた。続けて話した森田の一言に参加者一同にとよめきが走る。

「それから6日間の予定ではあるが、あくまで毎日がオーディションです。毎日落選者が出ると思っているので、そのつもりで望んでください。」

緊張と不安の混沌とした空気が一気に会場を覆って行くのを感じた。そんな中、僕は与えられた台本を一生懸命に覚えて必死に演じるしかなかったが、ただ演じること自体初めてで演技がどうゆうことなのかもわからず、まわりの受講者をみようみまねで演じるほかなかった。

たったひとつだけ気がついたことがあった。その時の僕にはそれしか出来ないと思い、それだけは誰にも負けないようにと望んでいた。声だった。全くの素人でも声だけは感情に関係なく張り上げることが出来たので、芝居を全く出来ない僕には声を出すことでしかアピールするものがなかった。

4日目ともなると、もう人数が半分近く削られていた。4日目に、現所属者の数名が舞台装置や音響などを手伝う為、初めてオーディションの参加者の前に現れた。皆、森田のサポートの為、テキパキと動いている。台詞のチェックや舞台の立ち位置のチェック、音響など、みんな慣れた手付きでこなしていく。その中でも、一際テキパキと動く女性がとても印象的だった。決して笑顔を見せず、かといって、剥れている訳でもない、クールという言葉がよく似合うそんな女性。その女性が動くだけで、とても華があるように感じて僕はすごく気になっていた。

誰よりも声を大きく出して望んでいた僕に、他の参加者達の冷たい視線を感じる。それはそうだろう。感情も演技も関係なく、大袈裟に言えば台詞を大声で叫んでいただけの僕が、日々数名落選者が出ている中で、なぜか落とされる事もなく気がつけば最終日のメン

バーに残っているのだから。

書類選考数百名から始まったオーディションは、初日30名余りもいた人数が最終日に残っていたのは7名であった。初めての体験で不安や緊張の連続だった僕も、6日目になると芝居をするのが楽しくてしょうがなかった。初めておもちゃを買い与えられた子供のように僕は新しく初めての気持ちで芝居によって手に入れつつあった。

6日間もあると、人は不思議でライバル同士であるはずなのに周りの人間と自然に打ち解けてくる。同じ目標に向かう戦友のように感じるのだろうか、常に一緒に行動するようになる。相変わらず周りの冷たい視線を感じていた僕はその中に溶け込むことも出来ず、ただ黙々と独りでいた。もともと、人との関わり合いはあまり得意な方ではなかったが、東京に出てきたばかりの僕にとっては少し羨ましくも感じていた。

「それでは配役を発表する。午後から本番の公演をするから、みんな準備を怠らないように。それと7名じゃ一つだけ役が空いてしまうと思うが、足りない役に関しては現所属者に手伝ってもらって公演をします。今、手伝ってもらう者に自己紹介をしてもらうから。おい！倉田。ちょっとこっちにきてくれ。」

舞台の設置などをしていた一人の女性が小走りに森田の横に来て自己紹介をした。その人は僕が4日目に初めてみて、気になっていた女性だった。

「倉田理子です。宜しくお願いします。」

ドキッとした。言葉短くそっけない挨拶をしたその女の子は、少し冷たい真つ黒よりもちょっと希薄の瞳が印象的で綺麗な長い黒髪のツンとした美貌の持ち主だった。僕はこんなにも女性を一目見ただけで興味を魅かれたのは生まれてから初めての事で、なぜこんなにも興味を魅かれたのかは分からないが、彼女の瞳に僕は吸い込まれてしまいそうだった。

午後の本番に併せて昼休憩をとっているみんなを横目に、もうすぐ本番だというのに相変わらず僕は独りである。コンビ二で買った僕のお気に入りのおにぎりを口に頬張りながら煙草でも吸って落ち着こうと思いい表に出た。

上を見上げると水色の澄んだ高い空がまだ寒さを物語っていたが、たまに吹く一陣の風に微かな春の匂いを感じ取れて、僕は少し満足げで煙草に火をつける。

「いよいよ最終日ですね。」

突然声を掛けられ、ビクッとして後ろを振り返ると男性がニコツとしながら立っている。顔立ちは少し老けてはいるが二枚目で少し身長の高めなその男性は、そう言うとそのままニコニコしながら僕の隣まできてハイライトの煙草をおもむろにくわえて火をつけた。

「あ、俺、坂田俊樹。なんかずっと一人でいるから気になっちゃってさ。」

「あっ、ども。瀬戸祥です。」

「あははっ、知っとつとよ」。6日間も一緒にいるんだから。芝居で元気が一番よかもんね。」

「いや、芝居はやったことないんで、声出すことしか出来ないですから。」

「うそっ！演技するの初めて？」

「…はい。」

「えっ、本当に初めて？」

「はい…そうですけど…。」

「すごかあー！！最終日に残るわけだ！今日は頑張って絶対一緒に所属決めような！よろしく。」

ハイライトの独特な匂いを体中に身に纏っているのが印象的でちよつと九州訛りの入った言葉の彼はそう言うと、片手を出して強引に僕の右手を受け取り握手をしてきた。人との壁をすぐに取り除ける不思議な感じを持ったこの人は、7人残った受講者の中で素人目

にみた僕からでも明らかに芝居が出来る人だった。森田もオーディション中には受講者に対して褒める事はほとんどなかったが、彼だけは絶賛される評価でほぼ間違いなく合格するだろうと他の受講者が前に噂していたのを耳にしていた。オーディションも彼を中心にして他の受講者達は困んでいて、いわゆるリーダー的な存在だった。いや、どちらかというとムードメーカーも兼ねたリーダーって感じだった。

人をひきつける魅力があり底抜けに明るい性格で、この6日間ずっと彼は中心に立っていた感じがする。

「緊張しとつと？え」と、あ、祥って呼んで良い？」

「…は、はい。」

「祥、初めての芝居かもしれないけど、大丈夫！祥はきっと受かるよ。なんたって初めてなのに他の誰よりも羞恥心がないんだから。」

これはすごい事だよ。祥は声がすごくよく出てるし、しかもよく通る！だから、大丈夫。頑張ろうぜ！」

東京に出てきて、初めて感じた安心感だった。ちょっとした会話だけど彼が話してくれた事によって、少しでもこれからの本番への気持ちの余裕が出来た気がした。そして、なにより初めての客前での自分の芝居に少しだけ自信を与えてくれた。

最終的に残った7名と現所属者1名で本番に臨む。この時の僕は、人前に入る緊張感も確かにあったが、それ以上にすぐ横にいる女性にドキドキしながら、最終のオーディション兼公演に臨んでいた。

今までの6日間と同じく誰よりも声を張り上げて、芝居とはとても言いがたい演技を本番でもこなしていく。僕の初めの場面が終わった頃、入れ替えて舞台上がる坂田俊樹と倉田理子の場面を見て脳に直接入ってくる電気信号によって衝撃を受けた。

あんなに無愛想で冷たい目をしていた倉田理子が舞台上上がった途端、別人のような明るい笑顔や、ハキハキとした口調、坂田の存在が小さく見えるほどの圧倒的な存在感、舞台なのに自然に見える

芝居、僕は一瞬で目を奪われ、舞台袖で見ているにも関わらず時間を忘れ、見とれていた。

舞台に華がそえられるというのはきつとこういうことをいうのだろう。

「すごい…。」

倉田理子が舞台袖に戻って来た時に、僕は無意識にそう口走っていた。

「ありがと。君、芝居初めてでしょ？ただ声が大きいだけになっているよ。ほら、もうすぐ一緒の場面なんだから、声だけに気をとられないようにね。」

キツイ物言いだけど、倉田理子と交わした会話と目の前で実践した芝居をみてもっと芝居を面白いと感じた僕は落ち込むよりも、逆にドキドキした感情と感動が入り混じって舞台上で何かを手に入れたようにはしゃぎ、気付けば今まで以上に声高に芝居をしていた。とにかく、楽しかった。舞台上上がるのが嬉しくて楽しくて仕方がなかった。

「では、最終の合格者を発表する。」

舞台が終わり、後片付けを程なく終えた頃、森田からオーディション参加者7名が集められていきなりこう告げられた。7名は今日オーディション結果が出るとは思ってもいなかったから、一同に動揺している。

「合格者は、坂田俊樹と瀬戸祥の2名だ。他のみんなは6日間ご苦労様でした。今呼ばれた2名以外はここで解散です。」

森田から出た言葉に理解を求めている時、僕の肩が大きな手にぎゅっと抱かれ

「祥！！やったな！受かったぞ！！」

坂田俊樹のその言葉で、僕は受かったんだとようやく理解した。

「はは、言ったろ？絶対に大丈夫だって！」

「…うん、ありがと、お兄ちゃん。お兄ちゃんのおかげだよ」

「お兄ちゃん？…なんだそれ？」

「いや、僕には兄っていないけど、東京出てきて初めて安心出来る言葉をかけてもらって、ああ、何かこれがお兄ちゃんかな？って思ったから、坂田さんはお兄ちゃん。」

「あはは、ふん、そっか！んじゃ、弟だな。やったな祥！！」

「うん！」

坂田と喜びを確かめ合っている僕は、まだ舞台の興奮と合格の興奮、そして倉田理子への興奮が冷めないまま森田の説明を聞いている。どうしてもどこかで倉田理子を気にしている自分に気がつくとなおさら興奮が目覚ましていつまでもドキドキが止まらなかった。倉田も今日はご苦労さん。もう今日は帰っていいぞ。」

「はい。失礼します。」

足早に去っていく倉田理子を横目に追いながら僕はどうしてももう一度会話がしたくて去っていく倉田理子に

「あの、今日はありがとうございました！これから宜しく願います。」

そう伝えたが、倉田理子の返答は相変わらず素っ気無く心無い物で「いいえ、ちゃんと芝居覚えてね。」

と、冷たい瞳で一言だけ告げて去って行った。でも、あの冷たいのに寂しげで印象的な瞳がいつまでも忘れられずにずっと僕の心に留まっていた。

この日の澄んだ水色の高い空は、僕を東京に迎え入れてくれて素敵な出会いをもたらしいつまでも高く澄んでいた。

『ブブブー、ブブブー』

携帯電話の着信バイブ音で目が覚める。高熱のせいでうなされてなかなか寝付くことが出来なかったが、いつの間にか眠りについていたようだ。

電話は尾澤沙織からだった。どうしたのだろうと慌てて携帯を手に取り通話ボタンを押す。今、少し動いてみてわかったが、寝たお

蔭だろうか、熱も引いているのがすぐわかりずいぶん体調は回復したようだった。

「あ、もしもし？瀬戸君？よかったー！！何回も電話したんだよ。」
そう言われて、掛け時計を見上げてみると、もう夜の9時近くだった。

「え、ごめん。寝てたみたい。」

「うん。寝てたならいいんだ。電話に出ないから死んじゃったのかと思って心配したんだよ！はは。」

笑えない。尾澤さんの裏表のない性格なのだろうが、高熱で苦しんでいた僕にはあまり笑えない冗談だった。

「あ、それでどうしたの？」

「うん、店長から今日は瀬戸君高熱で休みって聞いて、珍しいな〜って思ってた。ちよつと電話してみたの。独り暮らしだからさ、孤独死なんて困るじゃん。ね〜！」

やっぱり笑えない。

「はは・・・、あ、もう大丈夫そうだよ。一日寝てたからかな？熱も下がったようだしすこぶるいいよ。」

「あ、まだ駄目だよ！ちゃんと寝てないと。熱ずいぶんあったんだよ？」

自分自身が大丈夫と実感して話しているのに、おかしいことをいう娘だな〜と思いながら心配してくれている心遣いはいがたかった。

「本当にもう大丈夫そうだよ。それより、今日はごめんね。アルバイト急に休んじゃって。朝は本当に動けなくなつてさ。大丈夫だった？仕事？」

「全〜然！今日は暇だったし大丈夫だったよ！」

「そっか。よかった。本当にごめんね。」

「うん。それより、お腹すいてない？」

「え・・・、そういえば一日中寝ていて何も食べてないな〜。」

「でしょー！！そう思って材料買ってきたんだ！今、たぶん瀬戸君

の家の近くにいらるんだけど、家までわかんなくて……。お邪魔していい？」

「……えっ！？うそっ！？家の近くにいろの？」

「うん、たぶん近く。店長に住所聞いてお見舞いがてらご飯でも作るうかと思つてさ。」

正直に尾澤さんの行動には驚かされる。でもただ単純に嬉しかつたが、同時に戸惑いも生まれて混乱を招いていた。

「今どこ！？すぐに迎えに行くよ。」

家の近くまで僕のお見舞いにわざわざ来てくれているのに、そのまま帰すわけにも行かずとりあえず早々に着替えて、尾澤さんを迎えに家を出た。

外に出ると4日程度降り続き今朝まで曇天でシトシトしていた雨は、すっかり止んでいて、少し肌寒いくらいの澄んだ空気が僕を迎えてくれた。

尾崎さんは家から歩いて2、3分のところで待つていて僕を見つけるとすぐに、おゝいと笑顔でこちらに手を振った。合流して、家に向かう途中に

「ごめんね。いきなり来ちゃつて。迷惑だつた？」

と、今更ながらに謝つてきたが

「全然大丈夫だよ！むしろお腹ペコペコだから助かつたよ。」

と、内心戸惑つていたことを隠して明るく振る舞つてみせた。

家に到着して早々に尾澤さんが、すぐ作るねと台所に行き、慣れた手付きで料理をし始めた。料理をしている間に僕は少し汚れた部屋を掃除する。たまにチラツと料理する尾崎さんを見て、理子とは本当に真逆だなと感じてしまう。

理子は全く料理が出来なかつた。苦手なんだと自分でも言つていたのをよく覚えている。僕にとってはすごく意外なことだった。普段から冷静でいる理子は、僕の中では何でも出来てしまう才色兼備な女性と思つていたからこそ、少し安心もしたし、料理は決まつて僕が作つていた。

「何ニヤけてるの？」

「え、いや・・・ちよつと思い出し笑い」

「えゝ、何それゝ？なゝんかヤラシイ。」

「い、いや、そんなことないよ。あ、もうできそう？」

「うん、もうちよつとで出来るから待つてね。」

「うん、ありがとう。」

思い返せば女性に手料理なんて作ってもらうのなんて初めてかもしれない。そう思うと素直に嬉しかったのに、なぜか少し照れくさくもあり遠慮も混在した気持ちになる。

こうして、女性と二人きりで家にいることに不思議と抵抗がない自分に驚きを感じながら、少しは理子を忘れることができたのかと淡い期待を持つてはみる。

期待を持つ？

そんな馬鹿な！それじゃ今までの5年もの歳月はなんだったんだ。そんな簡単なことなら悩みもしないはずなのに・・・。

「おまたせゝ。お腹すいたでしょう？」

そう言つて、尾澤さんが鍋を抱えてテーブルに置いてくれた料理は、僕の体調の事を考えてくれたからこそそのものだろう。真っ白なお粥の中に希薄色の黄がマーブル状に混ざり合っている卵粥だった。尾澤さんのその心遣いが嬉しくて、少し胸をうたれた。

「・・・いただきます。」

「はゝい、どうぞ召し上がれ。」

おいしかった。なにも食べてないのもあつたのかもしれないけど、ひどくおいしく感じた。ちよつと良い塩加減で、卵の甘味が優しくかった。このちよつとした味付けを食べただけでも尾澤さんが料理に慣れていることが伝わってくる。

「どう？味付けちよつと薄かったかな？」

「ううん、おいしい。おいしいよ。塩加減もちよつといいよ。」

「ホント？良かった。」

本当に嬉しそうに喜ぶ尾澤さんを見ると、心が落ち着くのはなぜだろう？

「本当は、もつといろいろ腕によりをかけて作ろうかと思ったんだけど、瀬戸君風邪ひいてるじゃない？胃に優しいものがないかなって。風邪が良くなったら、今度はもつともつと手の込んだもの作るね。」

あー、こういうのもいいなと思う反面、こんなことをしている場合じゃないだと表裏が争いをしながら、僕は嬉しさと遠慮の狭間にいた。

「すごいね、尾澤さんって日頃料理するんだね？実家だったよね？お母さんのお手伝いとかしながら覚えたの？」

話題を変えられて、少しふくれっ面になっているのがわかったがそのまま続けた。

「僕も一人暮らしだから、東京に出てきてから料理は覚えたんだ。ま、上手くないけどね。」

「瀬戸君も料理作るんだ。私はね、子供のころからママが花嫁修業だって言って、いつも台所に立たされてたの。今じゃ、アルバイトがない日は決まって私が作ることになっちゃった。」

「へー、いいお母さんだね。」

「でしょー、私の誇り。」

意外な一面だった。アルバイト先の人気者だった尾澤さんは、僕よりずいぶん年下だし、吉祥寺で育った彼女はどこか垢ぬけて見えただからこそ、そんな一面があるとはおくびにも思っていなかった。

理子も東京生まれ東京育ちだったが、理子は実家からは離れて一人暮らしをしていた。過去をあまり語らない理子の家族のことは、今にして思えば僕は何も知らなかった。かたくなに過去を隠す彼女と過去をプラスに未来へつなげる尾澤さんとは、何もかもが対照的に思えた。

「今度はもつとちゃんとしたの作りに来るからね。」

相変わらず、少し強引なところがある尾澤さんだったが、混沌の中を彷徨っている僕には幾分か気持ちを和らげてくれる存在に間違えはないように思えた。

雨が止み、訪れる鈴虫の音色が秋の夜長の到来を演奏で告げていた。

赤い鎖

飴色に染まった空が落ちていき紺碧の澄んだ空へと移動していく。晩秋に満ちた木々の木の葉が舞い踊り、木枯らしが吹きすさび始めた紺碧の空には東京でも奇麗な秋の四辺形が天頂に輝きを放ち始める。いろんなことに理解を深めても人はいつまでも疑問を持ち続けるものだ。ましてや、自分自身の事など本当に理解しているのは世の中に何人いるのだろうか？

アルバイトが終わり、せかせかと稽古場へ足をいそしむ。今日は特に稽古日というわけでもなかったが、村中先生から言われた言葉が忘れられずに、時間が空けば稽古場まで行き自主稽古をするのが習慣付いてきていた。

過去への決別をしたかった僕には稽古で自分を再生へと導くほか思いつかない。先生からの自分への期待を裏切るわけにはいかなかったし、自分自身への裏切りも償いたかった。日々が重圧に押しつぶされてしまいそうな、ギリギリの綱渡りを繰り返していた。

僕は自分をどうしていききたいのだろうか？

自分の過去を振り返れば振り返るほど、臆病さへ拍車をかける。でも、どうあっても過去を振り切ることは出来なかったし、理子への想いは強まるばかりである。お兄ちゃん存在のおかげで、辛うじてだが芝居を諦めずに頑張れていることも自分ではよく理解しているつもりだった。

こうして夜も更けていく中、稽古場で自主稽古をしていると公園での自主稽古を思い出してしまう。自らの再生と蘇生をしていく為の自主稽古がどうしても雁字搦めにかかった過去の赤い鎖を外すことが今の僕には難しかった。

暗く光の見えないトンネルを必死で駆け出そうと努力をしてみるのが、一向に地上には繋がらないでいる僕自身は、本当は努力なんて虚しく儚いものなんだからこれ以上は何もする必要はないと、自問自答を繰り返す。

あの時の理子もそうだったのだろうか？ ぼくが所属してからもいつも独りでいる彼女は、時々何かを訴えかけているような演技をして、周囲は褒め称えた。しかし、芝居から一旦離れると誰とも会話をしようとしないう彼女に、他の仲間は駆け寄ろうとしなかった。周囲に溶け込もうともせず、ただ芝居を一生懸命するどこか冷たい目をした彼女には確かに近寄り難い空気はあったが、僕にはこの同じ年の彼女がとても高貴な存在に思えたし、より一層気になる存在になっていた。

理子が独りきりで稽古場にいる事は比較的に多かった。僕は所属したもののたいした活躍も出来ず、くすぶったまま3ヶ月が過ぎようとしていた。オーディションの受かったあの日からずっと気になっている女性、理子とは未だにたいした会話も出来ずに、稽古に明け暮れて、終わればお決まりのようにお兄ちゃんとお酒を酌み交わしながら反省会を繰り返した。

芝居は面白かった。明確な目標はなかったけど、ただ漠然と役者として有名になりたいと、この時の僕はプロダクションに所属していれば有名になれる、仕事が貰えると本気で信じていて、もうゴールがすぐそこにあるものと過信していた。

この雨が上がる頃には、真っ青な空に巨大な白い入道雲が天いっぱいに広がる暑い季節がやってくると容易に誰でも想像は出来たが、毎日のように空からの大きな溜め息でも聞こえてきそうな灰色の分厚い壁から大きな雫がいつこうに止まらない日々。少し肌寒さを覚えながらいろんな人が行き交うのを見ていると誰も表情が俯いて暗かった。

雨を見ているのが好きな僕は、雫の中に光を見つけ出す事に楽し

さを覚えていて、ずっと上を向きながら歩いていた。稽古場について、掃除を一通り終えてまた雨をジツと見つめていると、いつ入ってきたのかも気付かずに横に理子が立っていた。

僕は、聞かれてもいないのに慌てて今見てた事をいつの間にか口走っていた。

「あ、雨の雫って光が中にこもっているのを知ってる？僕こうやって、雨の雫の光を見つけるのが好きで雨の日はみんなと逆で上ばかり向いてしまうんだ。」

あの日以来初めてちゃんとした言葉を発言したであろう僕に、初めて見る暖かな優しい笑顔で僕を見つめたかと思うと、光のある上空を見渡しながら

知ってるよ。雨の光って綺麗なんだよね。私も好き。でも、君は変わってるね。そんな人が気付かずに通り過ぎてしまう事に気付いてずっと見つめてるなんて。

初めての会話、初めての柔らかな彼女の表情、初めてのことなのに僕は心が満ちていく感覚を覚え、とても心地のよいその空間をいつまでも感じていたいと素直に思っていた。

「あの、良かったら自主稽古付き合ってくれないかな？」

この空間維持の為に一杯の言葉だった。もちろん、稽古場で群れることをしない理子の事を知ってた上での誘いだっただから、断わられるのは至極当然だと思っていたが、返ってきた言葉はあっさりなほど簡単に一言だけ、うん、いいよ。やろう。と、意外な返答だった。

この日から、僕達はどちらともなく稽古が始まる前に決まって自主稽古をするようになっていった。

祥、帰るとよ。と、お兄ちゃんが呼んでいるのが聞こえ、慌てて帰り仕度をする。擦れ違い様に理子がこちらに視線を指していると気づいて、

「あ、倉田さん、また今度の稽古もお願いします。」

と、いつもと同じサインを送っては、うん、お疲れ様と理子も挨拶をして送ってくれた。祥、遅いよ。とお兄ちゃんの軽い叱咤に謝りながら、いつものように安居酒屋へ足を運ぶ。いつものお決まりのパターンだった。

でさ・・・、祥？・・・祥！！

「・・・え、えっ！？なにお兄ちゃん？」

なにじゃない！ちゃんと聞いとつと？今日のあのシーンなんだけど。

「あつ、ごめん。もう一回！どこのシーンだっけ？」

・・・ふうー、祥さ、お前倉田さんと何かあるだろ？と、唐突に理子の名前を突き出されて面を食らった。

「はっ！？え、どうして？そんなことないよ。」

必死に隠そうとしたが、今日の帰りぎわに倉田さんとアイコンタクト取ってただろ？滅多に話したり、笑顔を見せない倉田さんが祥の時だけ笑顔でお疲れっておかしかな。と、顔に似合わず鋭いことを言うと思いつながら、さすがに役者さんだな、人間観察をよくしていると感じた。

僕は、誤魔化しきれないなと思いお兄ちゃんだけには正直に話すことにした。

オーディションの時に会ったことから、本番公演でドキドキしたこと、一目惚れって言うのがあるんだということ、倉田理子を気になって気になって夜も眠れなくなってしまうことや、自主稽古を始める切っ掛けになったこと、みんなには内緒で稽古前に二人で稽古していること。お兄ちゃんにはすべて正直に話した。

全て話し終えると、ずっと隠していた感情を人に聞いて貰えた安心感からか、胸の奥のほうでつかえていた何かが、ふっと軽くなったような気がした。お兄ちゃんは、少し悪戯なニヤけた顔をして、相当倉田さんの事が好きなんだな、と、からかいにも、応援にも取れるようなセリフを吐いて、よかよ頑張りんしゃい、と励ましてくれた。

お兄ちゃんに話しを出来たことで、僕は気分が一気に解放された気持ちで嘯み締めることが出来て、理子とのこれからをどうにかしたいと考え始めた。

理子との二人きりの自主稽古を始めてから一か月くらい経とうかという頃、季節は徐々に真夏の暑さを物語り始めていたが、この日は朝から雨が降り続いていて稽古場は五右衛門風呂にでもなったかのように蒸し暑さを強調していた。

皆が一様に汗だくになり稽古が終る頃、社長の森田から別室に呼び出された。社長室に入ると稽古場のあの密閉された圧迫感と蒸し暑さはすぐに吹き飛び、クーラーの爽やかな風が火照った身体を癒してくれた。そこには僕だけじゃなく、お兄ちゃんと理子、そして高田さんも呼び出された様子で、みんな立って待っていた。

「よしっ！四人揃ったな。」

「・・・はい。」

なぜ呼び出されたか意味も分からず、とりあえず返事をしてはみるものの四人が四人とも構えたように怪訝そうな顔している。

「はは、まゝそんなに構えるなよ。別に怒る為に呼んだわけじゃないんだから。」

そう笑顔で森田は言うつと、

「坂田と瀬戸、お前らは所属してどれくらいになる？」

と、問われて四か月くらいですとそのまま答えると、今度は理子と高田さんへ

「倉田と高田は？」

そのまま、同じ質問を繰り返す。高田さんがちょうど一年半です。と質問に対応すると、

「うん、ちょうど一年くらいお前たちは所属期間が違っただよな。」

と、まだまるで話しが見えてこなかった。

「はい・・・」

「でな、今日、マネージャー達とも話しをしてたんだが、今、ウチ

の若手で一番成長度が高いのがお前たち四人なんだよ。本当に偶然なんだが、ちょうど同期が二組なんだよな。」

「あ、ありがとうございます。」

誰よりも早くお兄ちゃんが声を発した。

「そこでな、お前たち四人だけで舞台を一つ公演しようと思ってる。まずはその意思確認なんだが・・・異存は？」

突然のことで何が何だか分からなかったが、すぐに他の三人の言葉が入ってきて理解した。

「もちろん、やらせて頂きます！」

「ありがとうございます！！」

「頑張ります！」

一歩返事の遅れた僕に森田は

「瀬戸は？」

と、刹那の間に言葉をかぶせてきた。

「あ、はい！精一杯やらせて頂きます！」

「うん！よし、じゃあ決まりだな！公演本番は三ヶ月後だからな！台本は実はもう出来ているんだ。あとはお前たちの演技次第だ！期待してるぞ！」

社長室から出て、みんな目をまん丸としている。急速な展開に頭が追い付いてなく、とりあえず手渡された台本をみんなで本読みすることにした。しかし、稽古場はもう閉じてしまうので、どこか広めの公園で本読みしようと外に出た。外に出ると、僕たちの出演を祝福するかのように雨はすっかり上がっていて、天頂には天の川も確認できるくらい透き通った夜空が印象的だった。

「わあ、キレイ。」

平常時にあまり感情を表に出さない理子がそう言っただけ空を眺めているのを見て、他のみんなにも聞こえてしまうんじゃないかと思うほどの抑えきれない鼓動を必死に隠しながら実感した。

そっか、理子と一緒にの舞台を出来るんだ。理子と一緒にいられるんだ。と。

その日から四人で稽古前には自主稽古をし、稽古が終ってからも4人で自主稽古するのが習慣になっていった。そして稽古が終ってからは稽古場が閉まってしまつのもあり、お兄ちゃんの家に近い新中野駅近くの公園で自主稽古する事が多くなつていった。

高田さんは理子と同期でも気さくな人だ。理子もプロダクションの人とは滅多に話したりしないが、同期のよしみなのが高田さんだけではたまに話しているのを珍しいな〜と思いつながら何度か見たのを覚えている。まだ、大人として成熟していなかった僕は、そんな高田さんへ嫉妬をすることもしばしばあった。

僕と理子はここを切掛けに時間が進み始めた。万物流転とはよくいったもので、刻一刻と変わる変化の中、僕と理子は磁石に吸い寄せられるかのように惹かれ合つていった。それはまるで、急な勾配の坂道で雪玉を転がし初めはゆっくりだったものが途中から一気に加速して大きな雪玉になっていくような、そんな全速力で駆け抜けていくようなとても濃縮されたとても素敵でとても切ない色褪せることのない恋であり、そんな愛だった。

必要以上の執着は、嫉妬であり束縛である。あの頃の僕は理子に對して必要以上の執着をしてしまつていたのかもしれない。未熟さを全面に押し出しいつでも全力で理子へ對して気持ちを押し付ける青二才だった。そんな青二才の僕に對して理子はいつも、少し困つた顔をしてはすぐに微笑んで優しく受け入れてくれた。自分の未熟さを棚に上げて僕はいつの間にか理子を鳥籠に入れてしまつていたのだろうか？理子の自由な翼を僕が羽ばたけない様にもいでしまつていたのだろうか？一度、自責の念に捉われると如何様にもしたがたく、永遠とループから抜け出せない。だけど、未熟だった僕にはあの日のあの時の理子の行動は許すことがどうしても出来なかった。

理子、どうしてなんだい？

理由はなにもないかも知れない。ただ、純粹に子供な僕に嫌気が差したのかもしれない。それでも、僕には未だに信じられないし理子の事を忘れられないのが真実だ。

矛盾の連鎖が僕には永遠とも呼べる苦しみを召喚する。

鏡を背に台詞を声に出して自主稽古をしていたはずの僕は、踵を返し鏡に映った自分自身に向かって、とても人間の声とは思えないほどの獣のような咆哮を鏡が割れんばかりに何度も何度もぶつけて目から流れ落ちる雫を止めることが出来ずに号泣した。

その日の晩秋に満ちた紺碧の空は、それでも天頂のペガサス座の光が眩しくてどこまでも飛んで行きそうな翼に目を奪われていった。

セイシする時<1>

よく晴れた空だった。晴天とはきつとこういう事をいうのだろうと、納得したように窓を開けようとする。しかし、手に取った窓の淵の冷酷ともいえる冷たさに手を引き、慌ててカーテンを閉める。積雪こそまだなかったが冬至が過ぎ、恋人たちの一大イベントも終わった頃、夜空にはいつもオリオンの光が輝いていた。いよいよ年の瀬が深まり世の中は年明けに向けての準備に追われ、皆一様に時間が忙殺されていく。

今日は久しぶりにアルバイトも稽古も休みの為、朝から掃除でもしようと活き込んでみたものの、寒さが大の苦手だった僕は掃除をすること自体を躊躇し始めていた。

祥は本当に寒いのが苦手なんだね。冬眠でもしてるみたい。と、理子にはよくからかわれたものだった。

でも、いいよね。私は夏が嫌いで、祥は冬が嫌い。だから、二人足して一人前になるから、私達はずっと一緒にいられるね。

そう言って僕の懷をジツと見つめている事に気づく。

「はい、どうぞ。」

理子が愛らしいことを言う時は決まって、僕の胸を要求する時だった。

ふふ、わかった？と、僕の胸に顔を埋める理子は本当に愛おしく、真っ黒の中に碧色がみとれるサラサラとした美しい黒髪から漂ってくる甘酸っぱい良い香りに誘惑されながら僕も理子を抱きしめる。

さて、掃除でもしようかと雑巾を取りに台所へ向かおうとした瞬間に、携帯電話が自分を主張するようかのように大きな着信音で泣き出した。

ディスプレイを覗くと、珍しい人からの電話に驚いて慌てて携帯

を手取る。

「もしもし。祥？」

「もしもし！うわゝ、お久しぶりです！」

もう随分と会っていないどころか、連絡さえも約三年ぶりにもなるうか、前のプロダクションで仲間として共にした、理子の同期の高田さんからの電話だった。

「お！元氣そうだね。久々〜！」

「え、どうしたんですか？突然。珍しいですよね。」

「ああ、ちよつと久々に吉祥寺まで買い物に来たからさ。祥って確か吉祥寺に住んでたな〜って思つてさ。まだ吉祥寺に住んでる？」

「ええ、まだ吉祥寺に住んでいますよ。」

「そつか！よかった。今日は何か予定ある？良かったらちよつと出てこない？」

「いいですよ。今日はちよつとオフなんですよ。すぐに吉祥寺駅に向かいますね。」

「ああ、わかった。待つてるよ。」

もう、何年会っていないだろうか？おそらく4〜5年ぶりの再開になるであろう高田との約束にそそくさと身支度を整えて、駅に自転車で行った。

吉祥寺に向かう途中の顔を切り裂くような凍てついた風に何度も心が萎えそうになるのを我慢して、高田さんのもとへ急いだ。

吉祥寺駅北口に着くと、すぐに高田さんの方から声を掛けてきてくれた。

「お〜！久しぶり！！祥！」

「本当ですね！」

外国人よろしく、本当であればここでシェイクハンドをしながらハグをしたいところだが、さすがにハグまではせずに握手のみに留めて再会を喜びあった。

「よかったよ〜！今日はオフだったんだな。」

「本当にたまたまですよ！」

「たまたまか！でもよかったよ！あ、少しいろいろと見ておきたいものがあるからちよつと付き合ってくれよ。」

そう言つと、再開の喜びもひとしおにして、サンロード商店街を進み始めた。

高田さんの風貌、格好は昔からだかひと際目立つ。金髪のセミロングの髪で、いつもお気に入りの少し大きめのヘッドフォンを首にかけて、背中に自分の背中よりも大きめなリュックを背負っている。昔と何一つ変わらない風貌に懐かしさを覚えていた。

「あれ？サンロードってずいぶん変わった？」

「遅いですよ、気がつくの！」

近年、中央線沿いの各主要駅は都市開発が進んでおり、立川駅が一番わかりやすく都市化が進んだ町と言えるだろう。吉祥寺も例外ではなく大規模な商店街改造計画が進んで、サンロード商店街は一新したばかりだった。

「へー、そうなんだ、全然知らなかったよ。」

「え、吉祥寺自体は久しぶりなんですか？」

「うん、もう4年近くは来てないよ」

「あー、それじゃ知らないですよね。」

高田さんの買い物に付き合い、どこに行くのかと思えばなぜか百貨店などを見て回っている。今まで知っている高田さんだと、てつきり買い物は古着屋さんだとばかり思っていたが、程無くしてその謎は解けた。

買い物が一通り終える頃には、気忙しい年の瀬の人波も徐々に黄昏時を迎え疎らになっていく。晩景が徐々に紺色を示し始めるころ、僕たちは一杯飲もうかと、高田さんと一緒に居酒屋に入ることにした。

「それじゃ、改めて再会を祝して、乾杯！」

「乾杯！」

大ジョッキをお互い手にしながら、ゴクゴクと半分程度まで一気に飲み干す。ちょうど二人とも歩き疲れていて喉がカラカラだったせいか、寒いこの季節なのに妙においしく感じられた。

「いや、美味しい！！今日はありがとうな、祥！」

「いいえ。僕も楽しかったですよ。でも、あんなにいろいろ買ってどうするんですか？舞台で結婚式の芝居でもするんですか？」

「はは、やっぱり結婚式ってわかるか？」

「そりゃ、わかります。」

「そりゃ、そうだな。・・・いや、実は俺の結婚式の為のものなんだよ。」

サラッとそう言う高田さんの言葉には、全くと言っていいほど真実がないから冗談だとしか聞こえなかった。

「はは、またまた冗談が下手なんだから！」

「・・・・・・」

押し黙る高田さんの真剣な様子を見て

「はは・・・・は・・・・えっ！？本当なんですか！？」

「だから、そう言ってるじゃん！」

「ええ！！そうなんですか！？」

「だから！そうだって！！」

「う・・うあ、おめでとうございます！」

突然の告白に言葉にならなかった。

「ああ、ありがとう。」

「え、じゃあ芝居はどうするんですか？」

「やっぱりそこだな、話しが出てくるのは。うん、いろいろ考えたんだよ、俺も。その上で向こうのご両親とも話し合っただ。お兄ちゃんとの約束もあるし、どうしてもあと少しだけ悔いを残らないようにやらせて下さいって頼みこんで、もう一年くらいは続けられそうにはなっただけ、さすがにそれで芽が出なければ普通に働くつもりだよ。」

「・・・・・・・・」

言葉が出なかった。今までにも志し半ばで役者を諦める人を多々見てきているからである。それは、自分の人生に対して一つの決着をつけたと言っても過言ではないくらい今の今生の別れにも似たとても辛い決断ということを充分に理解していた。

人によって役者を諦める理由は様々だった。家庭の事情であり、自分の限界を見限ったり、金銭面だったり、俳優女優区別なく中でも一番多いのが結婚だった。

協力という言葉があるが、あれはなんて理不尽なんだろうと僕はよく思ったものだった。一人では出来ないことが二人だと出来るはずなのに、こと結婚となると守らなければなくなり、二人になった為に出来なくなってしまう。理屈ではなんとも言えるが、やはり現実はそのなにごとに甘くないのもよく解っていたからこそ、何も言えなくなってしまう。

周りを見渡せば、僕の前輩や同期と呼べる役者達は、今まさに人生の岐路を選ぶべき年齢にきているのは確かで、職業選択の自由なんて法律は一概に誰にでもあてはまらないんだと葛藤との戦いを虐げられている。

役者という職業は確かに特殊で、あくせくと働いている人達からすれば、何を夢みたいなことと言っている、何をいつまでもいい年をして遊んでいやがると、よく非難をされる事が多い。しかし、表現者であるからこそ人に伝え人に学ばせ人に尽くせる。表現者である事は、それだけ人に対して影響を与えて世の活力になっていく難しい職業だった。だからこそ、狭き門なのだ。

「おいおい、祥がそんな顔するなよ。まだ、一年は役者を死に物狂いでつづけるんだから！俺は最後まで諦めずに、これで嫁さんを食わして行きたいと思っているんだからさ。」

高田さんの表情は決意に満ちていて、僕が想像していたよりも全くもって晴れやかだった。

「・・・そうですね！とりあえず結婚決まったんですもんね。おめ

でたいのに僕がこんな顔で祝福したら失礼ですよ。」

「そうそう！ちゃんと祝ってくれよ！」

「はい、すいません。」

「・・・それでな、祥、今日わざわざ会いに来たのは、別に買い物メインじゃないんだよ。結婚の報告でもないんだ。」

「えっ？」

「うん、どうしようか迷ったんだけど、やっぱり祥に直接渡して、祥自身に決めてもらった方がいいかなと思ってな。これ。」

高田さんが青色の大きなリユックから取り出したのは、結婚式の招待状ハガキだった。

「俺は、祥には是非とも祝って欲しいんだ。だけど・・・なん・・・うん・・・ほら・・・あんなことがあったのを俺は知っているから、それでも・・・どうしても倉田と森田社長はね、プロダクションの関係上あの二人は絶対に外せなかったからさ・・・」

その名前を聞いて一瞬で顔が強張っていく自分が過去を全く決別できていないことを分かっていったことだが改めて思い知らされる。それだけ僕にとっては辛い過去で、僕が僕じゃなくなった日に結びついている。そんな僕と理子の関係は、お兄ちゃんと高田さんしか知らない。

あんなこと・・・理子・・・

毎年恒例となっていた、12月一週目のプロダクションの忘年会。僕と理子が付き合い始めてもう2回目の忘年会を迎えようとしていた。

忘年会じゃなくても、プロダクションでの飲み会は年中あった。舞台の打ち上げや映画、ドラマの出演者のクランクアップの打ち上げ、もちろんただの飲み会もあった。その都度、打ち上げする場所はまちまちだったが、忘年会は決まってプロダクションの経費持ちで盛大に貸し切って行われていた。

他の出演者祝いなどの打ち上げはあまり出席することはなかった

が、プロダクション全体の打ち上げや忘年会は絶対参加になっていたから、僕と理子も渋々参加を余儀なくさせられていた。そんな時は決まって、理子とは打ち上げが終わってからみんなには気づかれないうちに口裏を合わせてどこかで合流し、一緒に帰っていくのがいづから自然とお互いのルールになっていた。

この日も同じく、帰り際に待ち合わせて帰るものと僕自身は勝手にそう思い込んでいたんだ。

夕暮れ時の帰省ラッシュに肩身を狭くしながら電車に乗るサラリーマンを横目に、忘年会の会場に急いだ。会場に着くころには辺りはすっかり闇に覆われていて、オリオンの輝きをより一層強調している。程なくして森田や主要なメンバーが揃うと今年の忘年会も始まった。

毎年そうだが、忘年会にはプロダクションのメンバーだけに留まらず、森田の戦略で必ず局プロデューサーであったり、映画監督であったり、演出家であったり、第一線で活躍されている方をゲストで呼びすることが多々あった。

決まってそんな時は女性タレントを横に付けるのが常識的な暗黙の了解となっている。綺麗どころを揃えようとなると、当然のように理子は毎回呼ばれてしまう。

幼稚だった僕には耐えがたい光景だったが、毎回お兄ちゃんに慰め悟らされては理性を何とか維持し、理子と毎日のように寝食を共にするようになり、もう誰も僕たちの領域は侵せないだろうという思いが確信に変わった頃からは、なんとか一人でも理性を保てるようになっていた。

本当にあの時の僕はどうしようもない幼稚で未熟な男だった。自分の本質も分からないそんなちっぽけな男に、なぜ理子についてきてくれていたのだろうか？そう不思議だと7思いだしたらきりはなかったが、それでも理子を愛している気持ちは唯一無二で、ここにしかない綿のような柔らかくもあり重くもなるそんな自在な愛だった。この日も、理子はプロデューサーの処へ行って接待をしなければ

行けないんだろーなと思ひながら、出来るだけその光景を見ないように僕は仲間達と飲んでいた。理子自身も常日頃、飲み会での接待は本当に嫌、すごく疲れると、理子にしては珍しく愚痴をこぼしていた。

その言葉を聞いただけでも安心は出来たのだが、今日は一向にプロデューサーの処へ行かない様子だった。珍しいなと思ひながら飲んでみると、お兄ちゃんが、良かったな、今日は安心して飲めるとね、と、小声でニヤニヤしながら伝えてくる。

暫らくすると、僕とお兄ちゃんと高田さんの飲んでいるところへ理子が近寄ってきて、いきなり僕の隣の少ししかないスペースへ無理矢理に身体を入れて座り、テーブルでちょうど死角になっている位置で僕の左手を握ってきた。

「ちよっ・・り、理子、まずいつて！」

と、最小限に周りへ聞こえない小声で伝えると、すぐに戻らなきや行けないからもうちよっただけ祥の隣にいさせて、と、よく意味が分からない返答が返ってきた。

言葉通り、理子は暫くすると元いた席へ戻って行った。

「どうしたんだろう？」

そう心配していると、お兄ちゃんが離れていてちよつと寂しくなつたんじゃない？と、相変わらずニヤニヤしながらからかってきた。そうかもね、と対して深くも考えず僕たちはまた飲み始めた。

宴もたけなわになった頃、どこで待ち合わせをしようかと理子にメールを送ってみる。が、いつこうに返信はなく、いよいよ忘年会も一本締めで終了というころ、理子に直接話した方が早いと探してみるが理子の姿がどこにも見当たらなかった。

ここ最近での2、3回の飲み会と同じだった。いつもは、理子から自然とここで待ってるねと場所を指定することが多かったが、ここ最近の飲み会では帰りに全く連絡が取れず、電話を直接して繋がっても、ごめん祥！今日は疲れちゃったからもう先に帰っちゃったと、今まで一緒に帰っていたのが嘘だったかのようタイミングが

合わなくなっていた。

少し酔っていた僕は、今日こそは理子と帰りたいと思い足早に忘年会の会場をあとにする。酔いが回ってくると急に寂しさと愛おしさが強まり、理子に電話を試みる。すぐに理子が出て、あ、祥？ごめん！なんか今日の飲み会疲れちゃって、先に帰ってきちゃった。ごめんね。と、何事もなくそう言う理子へ、

「そっか……。うん、わかった。おやすみね。」

そう返すと、うん、ごめんね、祥。また明日連絡するね。おやすみ。愛してるよ。と、優しい言葉が返ってきたのが安心感を補って嬉しい。

でもちよつとがっかりもしたのは確かだった。お酒が入っているせいか少し小腹もすいている事に気がつく、何か食べてから帰ろうかと思い近くにある店をぐるりと一望してみても物色する。結局、一番目に入った牛丼に惹かれここでいいやと牛丼屋に入り、並を頼んでご飯を一粒も残さずキレイに平らげる。お腹がすいていたはずなのに、並を一杯食べただけでもものすごい満腹感になり、満足気にお腹も満たされた僕が外に出る頃、僕のちょうど頭上にオリオン座が輝いて見えて、しばらく眺めてみる。

今日の夜空は東京では珍しいほどくつきりと充分な星を眺める事が出来て、寒さの苦手な僕でも冬の純粋に澄んだ星月夜にくぎ付けになった。

さて、帰路に立とうと駅への道を進む一步を踏み出した瞬間、信じられない光景を目の当たりにしてしまった。

「り……。り。こ……。!?」

自分で言葉を発しているのかいないのか、わからなかった。

理子が歩いている。

手をつないで歩いている。

何が何だか分からず、一気に酔いは醒め変りにパニックで目の前が漆黒の闇に覆われた。

隣で手を繋いでいるのは・・・

森田であつた。

僕はなにも考えられず、純粋な興味本位でも何でもなく、思考は停止したままなのに身体はなぜか自然と二人の後を尾行する形でついて行つた・・・

頭の中がぐるぐる回る。

あれ？理子は帰つてなかったの？森田と打ち合わせ？森田つて奥さんと双子の子供いたよね？あれ、理子がいる。理子はやっぱり待つていてくれたのかな？手はつなぐもの？森田がなぜ？理子はなぜ？どうして二人でいるの？あ、ご飯でも食べに行くのかな？理子つて疲れて帰つたよね？森田から手をつないだ？いや、そんなことは問題ない？森田の奥さんは？あれ、理子がなにしているんだろう？双子の子供は？どうして森田が？ご飯かな？あつ、プロデューサー呼んでの二次会？どこにいくの？この話してさ？これは現実？あれ？あれ？ここはどこなんだっけ？森田は奥さんは？理子は奥さんじゃないよ？んっ？なに言っているんだろう？二人はなに？あ、遊びに行くだけだ？もうこんな時間？いや、まだこんな時間？何しているんだろう？理子？森田？ん？理子がいる？あれはそもそも理子？いや、あれはそもそも森田？え？なに言っているの？あれ？なんだ？ふたりともにせもの？いや、なんでここにいるんだろう？あ、ドッキリ？森田の手？理子の手？いやいやいや？あ、空がさつきキレイだったんだ。オリオン座？もう酔っ払っている？酔い過ぎた？森田はなにしている？あ、理子は・・・

なにも考えられないで漆黒の中にいる。なのに、ごちゃごちゃと

頭の中は整理がつかず、思考は停止し目の前は真っ暗になっているにも関わらず、二人の姿が鮮明にはつきりと輪郭まで描けるように双眼鏡でも覗いているようなくっきりとした形の情報が目の奥の方の網膜に刷版のように焼き付けられてくる。

どのくらい尾行を続けていたのだろうか？数秒のような気もするし、数時間のような気もする。気がつけば、大通りをひとつ外れた裏路地に入っており、二人が止まるのが見えて、僕も止まる。

声が出ない。言葉が出ない。人は信じられない光景や恐怖、絶品のグルメなど、自分の創造にも及ばないような出来事と遭遇すると声が出ないと聞いたことがあるが、今がまさにそうだった。一言声を掛ければ、姿を見せれば止められるかもしれないのに、誤解が解けるかもしれないのに、僕は声も出せずにただただそこに留まっている。

止まっていた二人が再び動き出した時・・・二人はお互いに熱いキスをして目の前にあるラブホテルへと消えて行った・・・

目から赤いドロツとした液体が流れ落ちているような錯覚に陥って、僕の前頭葉のさらに奥の方で何かが壊れるような音がして全てが崩れ去って行った・・・

この日の一段と輝くオリオン座のベテルギウスとリゲルの対照的な紅白色が、僕と理子との時間を止めるのを告げているようだった。

目が覚めると右側の窓から冬らしい澄んだ薄い藍色の空がすぐ目に飛び込んできた。壁一面が真っ白で見慣れない部屋だと気付き、自分の部屋じゃないと認知し起き上がった時に、あ、あゝ！！よかった！！祥、わかるか？祥？と、お兄ちゃんの少し泣きじやくった声に驚いた。

必死にお兄ちゃんは、祥！！よかった！！と、言って僕の手を強く握っている。その横で高田さんが、先生、意識が戻りました！と意味不明な言葉を言っていた。

お兄ちゃんと高田さんが必死に話しかけてくれているのがよくわかった。でも、なぜか頭は脳が溶けてしまったかのようにぼーとしていた。

暫くして、まっ白な服を着た男性が慌てて駆けつけてきて僕に話しかけてくるのを聞いて、ようやく事態が掴めてきた。

ここは、病院だった。そう理解をした時に残酷な現実が蘇り、全部本当のことだったのかと苦しみが湧き上がってきて、白衣の先生の前でみっともないほどに慟哭した。

あの青天の霹靂に襲われてから、どうやって家に帰ったのかも覚えてなかったが、家に着いてすぐにお兄ちゃんに電話をしたことだけは覚えてる。

なんと伝えたのかまでは分からなかったが、お兄ちゃんによると何を言っているのか分からない程、子供が泣くようにむせび泣きながら、りこ、りこが・・・と理子の名前を連呼していたようだった。理子の名前しか言わなくむせび泣いていた僕を異常だと感じたお兄ちゃんは、夜も更けていたにも関わらず僕の家まですぐに駆け付けてくれたみたいだった。

漆黒の闇が訪れる。失意の僕はお兄ちゃんの電話を切ったすぐあとに・・・

そうか・・・そうだった・・・僕は電話を切ったあと・・・

僕は自殺を図った・・・

もともと偏頭痛持ちだった僕は、家に薬がたくさん常備されていた。無意識で瓶や箱に入っている大量の薬を飲みほし胃の中へ押し込んだ。

徐々に、しかし確実に世の中に映る景色がまどろみの中に薄れて行き、僕の意識を奪っていった・・・

先生の話しによると、服用した大量の薬は胃の洗浄を繰り返しながら一命を取り留めたようだが、致死量ギリギリのところだったようだ。通常の市販薬で致死量ギリギリまで服用するにはかなりの量を飲まないところまでにはならないと驚いていた。当然2〜3日の入院を余儀なくされた。

お兄ちゃんと高田さんから何があつたと、質問がとめどなく続いた。それはそうだろう。もう少しで僕はこの世からいなくなってしまうかもしれない存在だったのだから。まだ、頭も正常に作動していない状態で、一から順を追って説明を試みる。説明を始めるとの二人が歩いていきホテルの前でキスをして消えるまでの見たくもない映像が鮮明に蘇り、DVD録画を繰り返し見ているかのよう

うに記憶がフラッシュバックしてくる。
今でも信じられない。あれがすべて現実で真実だったのだろうか。
・・・

全て話し終える頃には二人とも言葉も表情もすっかりなくなってしまうっており、沈黙が続く中、僕の鳴咽にも似た泣き声がシーンと静まり返った病室にいつまでも鳴り響いていた。

長い、とても長い沈黙がどのくらい続いただろうか？二人とも自分の身が同じ体験をしてきたかのようにぐったりしている。倉田さんに俺、今朝がた電話したよ。そう言い、初めに一声を解いたのはお兄ちゃんだった。えっ？と、驚いている僕に続けて、だからだったのか。電話をして、祥が大変な事になっているって伝えたかったとよ。倒れたと言いつたら電話越しでもわかるくらい慌てとつても俺は祥が倒れる前に俺に電話してきて尋常じゃなかった様子が気になってな、そのことを伝えた上で倉田さんに昨日の夜なにかあったと？と、訊いたら突然電話が切れてしまいよった。どうした

んだろう？と思っていたけどこれで納得がいったと、俯きながらポツリと話した。

お兄ちゃんが言い終わるか終わらないかくらいにかぶせて、続けて高田さんが、

「俺にも、午前中に倉田から連絡があつたよ。当然、祥の事を心配して連絡がかかってきたから、早く来い！って、そう言つて病院の場所と病室は教えたんだが、なんか釈然としない態度にちよつと苛立ちを覚えてさ、死んでしまつかもしれないんだぞ！って、話したら電話の向こうでかすかに噤り泣いているのが聞こえてきたよ。それからは何を言つても無言だったから、とにかく早く来いとは伝えたけど、倉田自身もきつと、お兄ちゃんから聞いた話で、祥がこんなになつてしまった理由に気付いたんだらうな……。」

「……でもな、祥！お前がしようとしたことは、絶対に間違つてるぞ！！自ら命を断とうなんて……絶対に違う！！お前は昨日、自分の命を弄んだんだぞ！？……死んでしまつてどうするんだよ！残された奴らがどんなに……どんなに悲しむか考えたか！？……倉田のな……倉田の味方になるわけじゃないけど……残された倉田はお前の影を一生償つて生きていくことになる……。お前がそれを望んだ復讐って言つなら、俺はお前を一生許さねーぞ！！」

途中から僕の胸ぐらをつかみ憤慨していた高田さんを、お兄ちゃんが抑制してくれていた。そして、高田さんを落ち着かせながらお兄ちゃんは静かに話し始めた。

祥……？高田の言つてることも当然とよ。でもな、俺は倉田さんも祥も本当に素敵な恋人同士だとこんなことがあつて不謹慎だけど、今でも思つとつとよ。人にはいろいろな事が起こるだらうし、いろいろな選択も自由に出来る。倉田さんにも事情があるかもしれないし、祥だつて死のうとしたのは事情があるからこうなつて。祥……？どう選択するかは祥の自由だ。だからこそ、これからの祥が暗い選択なんてせんように、ちゃんと俺が光の未来を照らしてやるから

…。だから…、もう死ぬなんて考えるな！

普段から滅多に怒ることのなかった温厚な高田さんが、両方の瞳いっぱい涙を溜めながら怒りをあらわにしているのに驚き、そしてお兄ちゃんも同じく二つの瞳から決壊したダムのように涙を止められずに、それでも優しく語りかけてくれるのを僕は体感して、同時にとんでもないことをしてしまったのだと恐怖にも似た自責に駆られ、今更ながらにガタガタ震え始めて、自分が自分の人生を終わらせようと自殺を図ったことを実感した…。

そして最後に…。

「……ごめんなさい。」

と、今にも消え入りそうな声だったけど、二人に謝った。

一人でいるいろいろなと考えてしまう。考えまい考えないようにしようと、思えば思うほど見たくもない映像が鮮明に浮かんできて、地獄の業火にでも焼かれているような永遠とも思える苦しさで悲しさが押し寄せてきて僕を押し潰す。しかし、そんな心情とは裏腹に、入院二日目で体調はすこぶる回復していても明日には退院が出来そうだと医者から言われていた。そんな自分の身体の丈夫さを疎ましくも忌々しくも思えた。

さすがにご飯自体はまだ喉には通らなかったが、それはきつと身体のせいではなく、心のせいだという事を十分に分かっていて、それと同時に暫くの間はご飯もきつと食べられそうにない。それでも頑張つて食べたら確実にリバーシしてしまうだろう。

今日は稽古日のはずだったから、お兄ちゃんも高田さんも来ない。昨日、二人の帰り際に稽古場には内緒にしておいてと頼んでおいた。それは、やはり自分のとった行動が恥じるべき行動だったとちゃんと理解をしていたから、出来るだけ人には知られたくなかった。

考えたくもないことがぐるぐる頭の中を彷徨っていて、視覚も聴覚も嗅覚も触覚も味覚も全ての五感がリアルに感じられるくらいの映像がチラついて頭から離れず、気持ち悪い。

身体の回復が無駄に早く健康になってきている分、元氣になればなるほど精神的な苦痛がどんどん増してくるのにおかしな理不尽さを覚える。

相変わらず外は快晴だったがすごく寒そうで、窓一面に附着した大量な結露が内と外の温度差を物語っている。僕はなにをしているんだろうと思っていた刹那、稽古に出ているはずの人が入口に立っていて驚きを隠せないでいた。

今、一番逢いたくないと思っていた理子が顔面蒼白な状態で入口付近から固まったまま、眼を真っ赤に腫らしてこちらを見つめていた。

「・・・・・・・・。」

理子を直視できない僕は、理子の存在に気付いていながらもすぐに真逆の明後日の方へそっぽを向いて毛布をかぶった。理子も何も言わずにただただ立ち尽くしていた。

何分くらい沈黙があっただろうか？ずっと張り詰めていた空氣が動き出し、一步、また一步と理子の近づいてく氣配が感じられる。

聴力が異常なほど發達してしまったのかと勘違いするほど、足音だけではなく理子の鼓動までも聞こえてきそうなくらいはつきりと理子が近づいてくるのが伝わってくる。

僕のベッドの傍まで来て止まったのがわかった。

「あ・・、あのね、祥・・、森・・。」

そこまで言葉が出かかったところで、僕はその言葉を遮り

「聞きたくない。理子と森田のことなんて、聞きたくない！！」

と、なにか言いかけようとしていた理子を一喝した。

「・・そう・・。そうよね、貴方には関係ないものね。これは私の問題だものね！」

いつもの冷静さを身にまとった理子は、少し涙声になりながらもそう冷たく言い放った言葉に、僕は苦しみと怒りと憎しみの入り混じった感情が込み上げてきて、もう抑えることが出来なかった。

「もう・・。君を信じられない。許せない・・。僕は理子を許せな

い。出て行けよ!!」

「・・・・・・・・」

無言で踵をかえして足早に去って行く理子の背中が強烈な印象を残し、僕の苦しみを倍增させる最後の一枚として沈痛のフोटリアルバムに追加された。

高田さんを吉祥寺駅まで送った帰りの空は、あの日の宇宙まで届きそうな澄みきった雲ひとつない空と一緒に、あの病室から感じた内と外を強調するかのように凍てついた寒さが、あの日僕と理子の最後の別れを告げた。

セイシする時<2>

気忙しい年の瀬も越え、また新たな年が幕明け一年のスタートを切っていく。

新年を迎えた人々は、誰もが晴れやかな顔をしているように見えて少し悔しさにも似た敗北感に襲われる。満天に輝く星空が自分への戒めを見透かしているようで憂鬱になってきたが、それのお蔭で自分自身のしてきたことへの償いを風化せずにすんだ。

1月7日

この日は僕にとって一生忘れられない、一年で一番懺悔をする日であり、一年のスタートとなる、そんな大切な一日だった。

この日以外は今でも中野という名前のつく土地に決して降りたとうとしない僕にとって、この1日だけは例え大災害が東京に起こるうとも、毎年変わらず中野に降り立つ、僕の大切で忘れられない日。吉祥寺駅から中央線の特長あるオレンジの車体に乗ってほんの数分、理子との思い出深き東中野の一つ手前、中野駅。

僕は東京に出てきてから中野という街に何故か深い関わりがある。辺りはすっかり丙夜に更けて、無表情で慌ただしく帰路に着くサラリーマンやOLを避けながら北口の改札口を出る。北口改札からすぐに一直線に伸びているサンモール商店街に恐る恐る足を踏み入れる。吉祥寺に比べると随分と人が少なく感じたが、商店街がこの一本道だけなので人口密度はこの時間にしては吉祥寺よりも圧迫感を感じる。

サンモール商店街を暫く進んで、商店街入り口からブロードウェイまでの一本道のちょうど中間地点位に当たる場所にさしかかり、僕は足を止める。

何の変哲もないサンモール商店街の真ん中、僕の目的地はここだ

った。

一年ぶりの中野は全く変わっておらず、いつでも過去に記憶を戻してくれる。苦しさや辛さ、喜び、怒り、憎しみ、感謝、そして決意。この町には僕の感情の全てを再確認させてくれる大切な鍵が所々に眠っている。

商店街で立ち尽くしていると、横に伸びた裏路地から冷たい一陣の風が僕の体温を奪っていく。身震いを覚えて、僕は自分の両腕を乾布摩擦のようにこする。

あの日の夜も、風が吹き荒れるとても寒い夜だった。

心が凍てつく。

理子の最後の背中姿が忘れられない。すっかり体調も元に戻り退院してからの僕は、心が満たされる事のない日々を過ごしていた。胸に大きく空いた穴は容易には修復が出来なく、理子のことを忘れたいと思っているはずでも思い出したくもないと頭では理解しているにも関わらず、独りでいると蘇ってくる記憶は理子との幸せに愛し合っている思いばかりで、それが毎日を苛立たせている。

あんなことがあったばかりなのに、まだ理子を愛している気持ちはどうやっても消えることはなく、いつまでも女々しく考える自分が苦しさに追い打ちをかける。

男とはなんて愚かな生き物なのだろう？

もう、プロダクションへは顔を出さなかった。自分の目指すべき道も何もかもがわからず、自分の存在自体にも疑問が常についてまわる。お兄ちゃんや高田さんからはそこで負けずにプロダクションへ来いと言われもしたが正直、僕はそこまで強い心を持っていないかった。

やること全てが中途半端になっていた僕は、年末だったがこんな状態で田舎へ帰るわけにも行かず、かといってプロダクションを辞

めた僕には、特に東京にいる理由も見つけられず、ただバイトの日々とお酒を頼りに生活を送るしかなかった。

年末も大晦日に差し掛かった日、そんな僕を見かねたのか年越しをお兄ちゃんと高田さんの3人ではしゃいで過ごそうと、お兄ちゃんからの心遣いが嬉しかった。

年越しを3人で馬鹿騒ぎをしながら、楽しく過ごしていく、そんな一年の締めくくりになるはずだった・・・でも、この日は楽しくならなかった・・・

大晦日、一年の最後の日ぐらい豪勢に過ごそうと、お兄ちゃんから中野駅の美味い焼肉を食べに行こうと、夜に待ち合わせの為、高田さんと中野駅でお兄ちゃんの到着を待っている。

暫くすると、お兄ちゃんがごめんごめんと少し足早に駆け寄ってきて、北口のほうへ行こう、とそう言う僕たちを連れて中野通りのガード下をくぐって、北口サンモール商店街へ移動する。

お兄ちゃんは中野に住みついてから、もう6年くらいになるだけあって、さすがに詳しい。僕も高田さんも、よくお兄ちゃんの家には遊びに行くことが多かったが、中野を含めて外食などに出掛けることは珍しい。なにしろバイトだけで生計をたてているわけで、そうそう外での外食や呑みなどはできず、自然とお兄ちゃんの家でたむろし、食事や晩酌をすることの方が自然な流れだった。

お兄ちゃんの家は、中野駅からだと少し交通の便は悪い。普通に歩くと20分近くかかってしまう。稽古帰りにお兄ちゃんの家近くの公園でよく自主稽古したものだ、その公園も当然同じくらい時間がかかり、稽古が終ってからのクールダウンするにはちょうどいい距離だった。

中野サンモール商店街を途中右折し、路地裏に入っていく。途中、何人も黒いスーツを身に纏った呼び込みに声を掛けられて、大晦日

なのに大変だな〜と思いつつも人垣をかき分けた頃に、ここだよとお兄ちゃんが言いがらと扉を開けて入っていく。

一瞬店を見た印象は、決しておいしそうには感じられない少し薄汚れた店構えだったが、肉を口に頬張るととても柔らかくおいしかった。身体が回復しても心の溝を埋められない僕は、まだ満足にご飯を食べることが出来なかったが、ここでの焼き肉はとても美味しく、なぜか少しほっとした。

お酒も進み、いい按排になってきた時、最後に理子に会った事を伝える。

思い出したくもない情景だったが、スッポンのように頭から全く離れない記憶が自然と出てきてしまう事で、また自分自身へ苛つきを加速させた。情景を一つ一つ丁寧に話して行くと、お兄ちゃんが不思議なことを言い出した。なんか、倉田さんって過去になにかあったのかな？その時に言いかけた事って重要なことだったんじゃないのか？とお兄ちゃんの言っている意味がよく分からなかったが、お兄ちゃんは続けて、いや、祥が来なくなってからの倉田さんはさ、今まで以上に芝居へ対して鬼気迫るものを感じてさ、もう俺や高田でも近寄りがたくなってるんよ。俺や高田はそのことを知っているってわかってはいるはずなのに、全然そのことはおくびにも見せずさ、まるで周りが全く見えてないようないにね。だからあの時の、祥が入院した時の倉田さんの態度からは今の態度が想像出来なくてさ。ま、でもお別れをしたんであれば、もういいんだけどな。

と、ますます理解不能な事を言って、焼酎を一気に煽っている。

理子の事を聞けば聞くほど憎しみに似た怒りが気持ちを包み込み、愛し合った日々がボディーブローでも受けたかのように徐々にダメージを与えていく。理子の事は許せなかった。頭では許せないと分かっているのに身体と心は理子を欲している。身体と頭が分断されて別々の信号を発している。

「くそっ・・・！」

いつの間にか、内面の葛藤しているのが言葉に出ていた。

「おいおい、どうしんだんだよ？」

高田さんが心配そうに顔を覗いてくる。

「わかった！もうすぐ年も明けるし、そろそろお兄ちゃんの家に行つて年越し蕎麦でも食べよう！」

高田さんの精一杯の優しさが伝わってきたが、僕のやり場のない苛つきはお酒の力をかりて益々抑えるのが困難になつていった。

店を出て、もと来た道を引き返す。外の吹き荒れる北風が今の僕にはちょうどいい寒さを運んでくれた。サンモール商店街に差し掛かる頃、もう年が明けるまで数時間後まで近づいてきているのに、それなりに人通りがあり賑わいをみせていた。

商店街を駅へ向けて歩いてしていると、商店街の一部を席捲している若者たちがふざけ合っている。10人近くはいるだろうか？通行していく人たちは迷惑そうに、それでも氣を使いながら横を通り過ぎている。

僕たちも横を通り過ぎようとした際、イライラしていたこともあり噛んでいたガムを若者たちの真横で口から投げ捨てた。

「おい！！ちよつと待てよ！」

通り過ぎた頃に若者がそう怒号をあげて近寄ってくる。

もう堪えることが限界に来ていた僕は、近寄ってくる若者めがけて有無も言わず殴り倒していた。

「おい！祥！何してるんだよ！」

高田さんとお兄ちゃんが同時に僕を止めに入つたが、もう遅く・

「お前ら邪魔なんだよ！なに道塞いでんだ！！」

怒りの限界に来ていた僕は、そう咆哮しながら飛び掛かっていた。若者たちも一斉に怒り心頭に飛び掛かってくる。10人も入れば、どんなに難しい計算したつて無事ですむ訳なんてないのはわかつていたが、僕は血気盛んな子供のように殴つては殴り返された。高田さんも若者たちに囲まれ殴られているのがみえて、より一層の憤り

を感じ向かって行つたが、しかし、お兄ちゃんは必死に止めようと僕と若者たちの間に入ってきた。

若者たちはそんなお兄ちゃんにも容赦なく、殴りかかる。必死に頭を下げて、コイツはちよつと嫌な事があつたんだ、謝るからコイツを許してやつてくれ、と殴られながら必死に謝っている。その姿をみて、僕の心は杭にでも刺されたかのように急激に胸が痛くなつた。

その時、そんなお兄ちゃんに対して一人の若者がどこから持ってきたのか角材で容赦なくお兄ちゃんの顔面めがけて思いつきりフルスイングをした。

まるでスローモーションを見ているような、お兄ちゃんが目の前で走り高跳びでもしているかの如く、空中を漂い石でできたタイルの床へ・・・

頭からダイビングして倒れ込んだ。

「・・・!!お兄ちゃん!!」

誰がみてもヤバい倒れ方だった。よく格闘技などの中継を見ていると実況が、あゝつと、これは危険な倒れ方をしたぞ、大丈夫か？と言つのを耳にするが、実際に生で見ているからこそこれは危険だ、これは危機的状況だと直感でわかった。

「お兄ちゃん!!お兄ちゃん!!」

若者たちもものすごい勢いで地面に叩き付けられたお兄ちゃんの姿をみて、言葉をなくし慌てて一人、また一人とそこから走り去っていく。

高田さんも鼻を随分と殴られたようで大量の血を流し、それを抑えながらお兄ちゃんの傍まで寄ってくる。

「おい!お兄ちゃん!おい!」

返事はなく、眼も開かない。それどころか、徐々に顔から青紫色になつていき、女性が白粉でも塗るかのように身体全体が真っ白に

なっていく。

「・・・・！！おい！祥、救急車！救急車だ！」

高田さんのその言葉を聞いて、手が震えながらもすぐに119番を携帯からかける。

お兄ちゃんに対して、専門的な知識が僕たちにあるはずもなくまったく何もできないまま救急車が一秒でも早く来ることを祈るしかなかった。

中野駅近くということもあり、5分程度で救急隊員がストレッチャーを持って走ってくる。

救急隊員はすぐに倒れているお兄ちゃんを見ると、事情を聞くよりも先にお兄ちゃんへ駆け寄り、大声で耳もとへ叫んで何かを確認している。

「チアノーゼだ！！急いで気道確保！急げ！！」

慌てて気道確保のため口を開かせると、殴られたショックで沢山の嘔吐物が出てきていて救急隊員がそれを取り除いている。

「くっ、嘔吐物で・・・・！呼吸停止！心肺停止確認！第？期だ！！BLS実施！！急いで蘇生させるぞ！」

騒然とした光景だった。目の前が真っ白になった。呼吸停止？何を言っているんだろう？この人たちは？心肺停止・・・

「もどって来い！！おい！もどって来るんだ！！おい、君たちも声をかける！」

はっと、我にかえって、お兄ちゃんに僕と高田さんは精一杯呼びかける！何度も何度も。声がガラガラになっても、何度も何度も無我夢中で呼びかけた。

数分間、救急隊員が心臓マッサージなど続けている。アバラが折れてしまっんじゃないかと思えるくらい、何度も何度も強く押し叩いて、マウストウマウスで蘇生を試みる。

暫くすると、救急隊員は手を止め、

「心肺確認！気道確保！呼吸確認！急いで病院へ運ぶぞ！ACLS

が必要だ！」

そして僕たちにも救急車へ乗るよう促してきた。

「あ、あの、お兄ちゃんは・・・」

「一命は今のところ取り留めた。しかし予断は許さない極めて危険な状態だ！ちよつと、救急車の中で状況を聞きたいから。・・・あと、君たちも治療をしないと。」

僕たちはそのまま病院へと救急車で直行した・・・。

どれくらいの時間が経っただろうか？

救急車の中で出来るだけ詳細にお兄ちゃんの倒れた経緯を説明し、病院に着いてから治療も一通り終わり、警察に事情聴取をされ、全部終わる頃にはもう元旦もお昼になっていた。いつの間にか、僕も高田さんもベッドで眠りにについていた。

お兄ちゃんの姿はない。ハツとし、高田さんを起こしお兄ちゃんの様子を見に行く。

お兄ちゃんはICUにいた。直接はお兄ちゃんに触ることは出来なかったが、遠目からみても重傷だという事が僕と高田さんへ絶望という現実を叩きつけてくる。

「あの、先生。お兄ちゃんは大丈夫なんでしょうか？」

思わず聞いてしまったが、先生の顔は決して明るくなく今は彼の生命力に期待をして様子を見るほかない。と、言われ、続けて、ご両親にはもう連絡してあります。彼の友人にも声を出来るだけかけてくれるように、親しい友人たちを連れてきて下さい。君たちは、もう退院しても大丈夫ですから。

そう告げられると、僕たちは暫く管まみれになっているお兄ちゃんを凝視して涙が止まらなかった。

自分の子供加減、幼稚さが憎く許せなかった。

お兄ちゃんが入院してから一週間が経とうとしている。僕と高田さんは毎日お兄ちゃんと面識がある人と呼んで病院に顔を出した。

しかし、意識が一度だつて戻ることはまだなかった。

でも、僕はどこかで樂觀にも似た安心感みたいなものをなぜか持っていた。ただ単純に現実逃避してただけなのかもしれないが、お兄ちゃんが死んでしまうなんてことは考えられなかったし、絶対に治ると信じていたし、なにより人はそんなに簡単には死なないとどこから来るのかも分からない、根拠のない自身に満ちていた。

一週間経つてみて、僕は自分のことで悩んでいたが、やはり3人で一度揃って行くべきだと考えて、理子と高田さんと僕の3人で一緒に見舞いに行こうと理子に電話をした。4人でよく自主稽古して、4人だけで舞台もやった、他の誰よりもここ2年の時間をお兄ちゃんと共にした4人だったからこそ、目が覚めるかもしれないと思った。

病院で待ち合わせた。理子と久しぶりに再会する。あの、言いようもない衝撃の夜からもう、ひと月近く経過しようとしていた。

・・祥・・・。 後ろから不意をつかれ声を掛けられる。

「理子・・・。」

久しぶりに見る理子は、やはり美人で、凜とした希薄の真ん丸な黒目が理子の顔立ちをより一層輝かせている。しかしどこことなくつれているようにも感じた。

「・・・・・。」

あんなことがあったばかりなんだ。お互いに言葉もなく、沈黙を続けるしかなかった。気まずさが凝集されたこの空間は次第に空気が無くなってしまったのではないかと、思わせるくらいに息が詰まり、息苦しさを錯覚させる。息苦しさの中、理子が、祥・・・、あのね、私もう・・と、言いかけた所で高田さんがやってきて、よし！行こうと病院内へ促した。

まだ、ICUにて治療しているお兄ちゃんはいろんな医療器具に囲まれ、窮屈そうに身体のとろころへ管が通されている。

僕たちはご両親に挨拶をして、お兄ちゃんの横まで行く。

「お兄ちゃん。理子も連れてきたよ。」

僕は、お兄ちゃんと普通に話しをするかのように話しかける。

「この4人で集まるなんてすごい久しぶりだね。なんかさ、自主稽古やってたの本当に昨日のことみたいだね。・・・お兄ちゃん・・・お兄ちゃんよく言ってたよね。この4人でやる稽古は本当に楽しかった。絶対俺達4人は売れるとよって。」

話しているうちに目頭が熱くなるのを感じた。自然と頬を伝っていく雫を感じた。

祥・・・、僕の横でそう言っ、理子も声こそ出していないが泣いているのがわかる。

「坂田、懐かしいだろ？あの時、毎日一緒に稽古をしていた4人が揃ったんだぞ！」

高田さんも両目いっぱいこぼれんばかりに雫を溜めて語りかける。

坂田さん、また稽古一緒にしよう？と、理子も優しい表情でお兄ちゃんへ伝える。

「お兄ちゃん、僕、お兄ちゃんにいっぱい伝えたいことあるんだ。プロダクションもさ、お兄ちゃんいなかったらきつと合格してなかったよ、僕。理子とも、ちゃんと縁結びしてくれたのはお兄ちゃんが僕の相談に乗ってくれたからでしょ？いっぱいお礼なきゃ！芝居で売れるんでしょ？僕と理子と高田さんで大きな舞台を絶対にやるんだって言ってたよね？」

僕は何度もお兄ちゃんに呼びかけた。そして、今まで生きてきて神様に一度だって頼んだ事はなかったが、必死に祈った。もし、神様がいたのであればお兄ちゃんを・・・神様が人命を司るのであれば、たった一つだけの願いでもいいから・・・そのたった一つだけの願いを・・・お兄ちゃんを・・・お兄ちゃんを救ってください。

「ね？お兄ちゃん。早く目を覚ましてよ。いつまで僕たち3人を待たせるの？早く一緒にお芝居をやるうよ！4人でもう一度芝居をやるう？」

「・・・う、あん。」

！！！！

3人とも、いや両親も含めて全員が顔を見合わせる。

今、確かに反応をした。見間違いない。確かに反応したんだ。

「お兄ちゃん！！おい！お兄ちゃん！！」

僕と理子が必死に呼びかけている横で、高田さんがナースコールで先生に

「あ！！意識が・・・！意識が戻ったかもしれないんです！！」

と、必死の形相で先生を呼び掛けている。

両親も驚きの表情をしながら、両目からは滝のような大粒の涙が流れ落ちていく。

みんなが一度に長く長く感じていなかった安堵の空間が一気に広がり、これでもう大丈夫という安心感がみんなに涙をより一層際立たせた。

これでお兄ちゃんはもう大丈夫と誰もがそう思い、僕たち3人も先生に任せて病室を後にした。

1月7日 午後3時23分

・・・そして僕たちが立ち去った一時間後に、

お兄ちゃんは永眠した・・・。

この日は、くしくもお兄ちゃんの誕生日であった。生まれた日に眠りにつく。

先生からあの時みなさんから意識が戻ったとナースコールが来た時は驚いたと、あとから話していたのをよく覚えている。

もし、本当にそう返事をしたのであれば、それは奇跡だと。坂田さんが、君たちに最後のお別れを言いたくて力を振り絞ったのだと。

火葬式は東京で行われることになった。ご両親の息子に対する最後の優しさだった。こちらで現在のお兄ちゃんに関わった人たちに骨を拾ってあげて欲しいと。

火葬中、お母さんから言われた言葉が、今でも胸を熱くする。

「瀬戸さん。あの子ね、貴方と出会ってからよく家に電話がかかってくるが多くなったの。電話をかけてきては貴方の事を話すのよ。あの子は一人っ子だったから、相当嬉しかったみたい。今までろくに電話もかけてこなかったのにね、ふふ、母さん！東京で僕の弟が出来たんだ！ってね。あの子の最後は貴方達にあえて幸せだったのよ。瀬戸さん、本当にありがとうね。」

そうお母さんから言われて、僕はその場に崩れ込んでいつまでも号泣し、いつまでも僕の幼稚さを恨んだ。

人の命はなんて儚いのだろう？

お兄ちゃんは僕が殺してしまったようなものだ。だからこそ、僕は横を向いて寄り道なんてしている場合じゃないし、役者として大成しなければならぬ。お兄ちゃんが志し半ばで逝ってしまった6年前の今日、あの日に僕はお兄ちゃんの分まで役者として売れて表現者として芝居で犯罪をなくす決意をしたんだ。

その為には、僕は役者を諦めないし、どんなことでも耐えていく。

ここに来ると、その決意を忘れずに、あの愚かだった自分をいつまでも懺悔して戒めることができる。ここが、僕の本当の役者を目指し始めた原点でありスタート地点であった。

あらかじめ買っておいたお兄ちゃんの好きだった黄色いガーベラを1本、お兄ちゃんが倒れたその場所に添えて、手を合わせる。

そしてポケットからハイライトを2本取り出し、2本とも火をつけ、1本はガーベラの横に置き、もう1本は自分で吸う。むせ返るほどの煙草の匂いをいつも身にまとっていたお兄ちゃんは、ハイライトをこよなく愛していた。

理子との身が引き裂かれそうな言い難い辛い別れ、お兄ちゃんともう二度と会えなくなってしまった生死の別れ。苦しいと思えることなど世の中にはたくさんある。僕は役者としての自分の決意は、この先何十年経とうが変わらずに生きていることだろう。お兄ちゃんの死別の別れが僕を奮い立たせ自分の道を確認することが出来るからだ。しかし、理子の事は？忘れる事が出来ないまでか、自分の再生には決して繋がっていない。それは、きっと僕の中の理子は今でも変わらず色褪せない輝きを持ってしまっているから。あの、理子の裏切りともとれる不倫から、でもどうしても信じられない自分もいる。6年も彷徨っていて未だに答えは見つからないし、だからこそ時間が静止してしまったままだった。

あの夜、理子は何を言いかけたのかな・・・？

お兄ちゃんはず、理子の様子に疑問を思ったのかな？

この日の懺悔を続ける内に、やはり理子の気持ちがついてまわり、毎年同じことを繰り返してしまう自分が滑稽に思えて、決まって疎外感がすぐに追いかけてきて追いつき目の前を真っ暗にさせる。

僕に未来はあるのかな・・・。

いや、本当は分かっているんだ。でも、認めたくない僕が過去からの決別を拒否して、そこへ滞在している。

僕は、未だに理子を愛している。

サンモール商店街を今度はもと来た道へ引き返し、駅を通り越し南口に出る。楕円形のバスロータリーに二つ目の光がいくつも入ってきて、信号の点滅に併せて横を通り過ぎる。

一年にたった一度だけの中野は、僕を毎年あの時の青い鎖を赤く変色させ更に太く進化させ、どうしようもなかった僕をいつまでも懺悔させてくれる。

夜になると人を一人見つけるのに苦勞する田舎が嘘みたいに、東京はこの時間でも動いている。行き交う人と黄色い星のような車のライトを避けながら、青梅街道の公園にたどり着き、僕はベンチに腰をかける。

みんなと稽古した公園。こうしてベンチに座って公園を眺めみると、昨日の事のように過去が鮮明に蘇ってくる。毎日って言うほどの時間をこの公園でお兄ちゃんと理子と高田さん、そして僕の4人でプロダクションの稽古帰りに、ここでよく稽古をした。

さすがに閑散とした夜中の公園は、今の僕にはちょうどよかった。周りをぐるりと見渡してみると、公園の端っこにチカチカと点灯して消えかかっている街灯が妙に気になって、街灯の下まで来て眺めてみる。

今にも消え入りそうな街灯を見て目を静かに瞑ってみる。

消えそうだね、キャンドル。

そう真ん丸な潤んだ瞳で言うつと、今にも消え入りそうなキャンドルをジッと子猫のように見つめている。理子はアロマキャンドルが好きで一晩中、炎を灯してよく朝まで二人で話したものだ。アロマの香りを全身で呼吸でもしているように感じながら包まれて、満足気に僕の胸をクッション替わりに至福の時を過ごす。ねえ、祥光はどうして消えちゃうんだろう？

いつも大人びててどんな問題でも解いてしまう印象の理子は、二人きりになると姿を現さなかった。というよりも普段の理子が一倍頑張っている姿で、きつと、こっちの顔が本当の理子のような気

がする。

一つ一つの記憶が細い糸で繋がっていて、こうして目を瞑っていると僕を勢いよく手繰り寄せてくる。過去に縛られたまま僕はここに行くんだろう？こんなに忘れる事の出来ない事へ怒りにも似た憎しみが僕自身の苦しみをさらに逆撫でする。だからといって、決して自分の事を可愛そうな奴だと悲劇のヒロインを演じるつもりは毛頭ない。むしろあの日あの時の僕があまりにも子供だったせいで僕にとっての理子、僕にとってのお兄ちゃん、そして僕自身、それぞれに過酷というにはあまりにも酷い現実を突きつけられた。そう、僕が子供だったせいで…。

未だに現在から未来へ進む勇氣のない僕は、いつまでも逃げてばかりだから一年に一度ここに訪れれば、あの時のあの気持ちを再確認でき、また一年頑張れるような気がしている。僕にとっては再生をする為に必要な儀式みたいなもので、リハビリのように毎年決まった日にここへ来る事が何か光を灯してくれる気がしていた。再生と構築に必要なヒントがあるような気が…。

祥、何年経つてもずっとこうして隣にいてくれる？

ふと、二人きりの時に出す理子の子猫みたいな甘えん坊さが僕の愛おしさを刺激して、くすぐったさと抱擁感の狭間で感情がどんどん強固になっていく。

「もちろんだよ。僕は理子を絶対に離さないから安心して。」

本当に？約束してくれる？どんなことが起きても離さないでいてくれる？

不安な顔を一生懸命隠しながらも希望にすぎる子供のような目で求めてくる。

「うん、約束するよ。」

安堵の表情をうかべる理子は、僕の腕を何度も確かめながら、優しい表情で眠りについていく。

理子とのこの安らかな空間、お兄ちゃんや高田さんとの心地よい

稽古の空間、僕はこの空間がずっと続くものだと思じて疑わなかった。

チカチカと点灯する街灯は輝きを今にも終わらせてしまいそうだった。

進化する退化

雪が降る。シンシンと降り積もる。

朝起きると辺りは一面白銀の世界になっていた。しかし、天候は素晴らしく晴れわたり昨日の曇天が嘘のような、真冬にも関わらずとても爽やかな日差しが二人の門出にはちょうど良かったと思えた。

いろいろと自分なりに考え悩み苦しんだあげくに結論を出した結果、高田さんの結婚式に出席することにした。

正直、自分の過去にずっと縛られている僕には厭らしくも理子に逢いたいと思ってしまうたのが、出席する決め手となった。

過去の決別もできない僕が、それでも過去を見つめなおそうと“逢いたい”と考えがまとまった事に、自分でも驚いている。なぜ今更なのか分からなかったが、理子を想い続けている自分には今度ある大きなオーデイションの前に確認をしたかったのかもしれない。それでも今までは想い続けて苦しむほか、すべがなかったのが直接逢うだなんて答えを導き出した自分の考えが自身でもよく分からなかった。

なにかの期待を込めて・・・

高田さんの結婚式は都内にある有名なホテルで披露宴を兼ねて行われた。

僕は、絶対に忘れまいと普段は違う銘柄の煙草を愛煙していたが、今日はハイライトを忘れずに持つていく。今でもそうだったが、僕は自分の験担ぎに決まってハイライトを吸う。大事な日であったり、勝負の日であったり、役者の現場であったり、僕にとってお兄ちゃんと一緒に見て行きたい処は、必ずハイライトを持参した。お兄ちゃんの愛煙したハイライトを。

結婚式はチャペル式で行われる。礼拝堂が開場するまでまだ時間

があつた。僕は高田さんへ挨拶しに行こうと、新郎の待つ部屋をホテルの係員に聞いて、階段を昇る。

新郎の扉の前に立つと同時に、呪文でも唱えたかのようにいきなり扉が開かれ、扉とぶつかりそうになる。

「お！祥じゃないか！よかった！本来に来てくれたんだな。」

扉が開いたと同時に新郎の高田さんがいつもからは想像もつかない見違える姿で勢いよく飛び出してきて笑顔でそう言った。

「あ、高田さん！本日はおめでとうございます。」

礼節をわきまえて、社交辞令よろしく僕が言うつと

「はは、ありがとう。いやゝ、髪から服装までビツとセットされちゃってさ、ちよつと窮屈だよ。役者での衣装やメイクの方がまだ楽ちんだな。」

そう言つて、ちよつと煙草を吸いに行くところなんだよ。一緒に行こう。と、促されて親族専用の喫煙所へ移動する。

高田さんが煙草を取り出すのを見て、

「あつ！ちよつと待つて下さい。せつかなんでこつちを吸つてく下さい。」

と、僕は高田さんへハイライトを一本差し出して火を点けようとした。

「・・・そつか、ハイライトか。・・・うん、そうだな！」

高田さんもこのハイライトの意味がどういふことなのか、当然のように充分に理解をしていたようで、ありがとう。と一言告げて僕の手にあつた火を煙草の熱へと奪っていく。

僕も同じくハイライトに火を点けて、一緒に吹かし始める。あたりはすぐにハイライトの独特な香りが立ち込める。

「ふう、懐かしいな。いつもこのむせ返るほどのハイライトの匂いを身に纏つてた人だもんな。」

そうしみりと言葉を出した。

「そうですね。ハイライトだけはご祝儀を忘れてでも絶対に持って来なきゃと思つていたんですよ。」

「こら！そつちも忘れるな！！」

「はは、大丈夫ですよ。」

暫く談笑したのち、準備があるからと高田さんは控室に戻って行く。戻り間際、高田さんが振り返り、

「そついや、もう・・・倉田とはあつたのか？」

と、訊いてきたので首を横に振った。

「倉田や社長は、今日祥が来るなんて知らないから。」

そう言つて控室に戻って行つた。そんな情報を教えてくれたのは高田さんの優しさなんだろう。よし！と、両頬をパチンと軽くハタキ、式場へ向かう。

先ほどまで待つていた出席者が、いつの間にか礼拝堂へ参列している。僕も慌てて、入口に程近い右側の列に参列する。席に着くと落ち着く間もなくすぐに、礼拝堂一面に反響しながら安らぎさえ感じられるパイプオルガンの独特な音がせせらぎのように耳に響いてくる。そして自分が結婚でもするのではないかと錯覚するほどの高揚感が僕を包み込んでくる。

初めに新郎の高田さんが現れ、花嫁を一番前で待ち、迎え入れようと緊張の面持ちで構えている。そして、父親に連れ添われて花嫁が一步步つゆつくりと歩んでくる。とても奇麗で素敵な花嫁だった。花嫁に見とれてジツと見ている。花嫁が一步步進んで背景が視界に飛び込んできた時、ハツとした。

「理子・・・」

思わず小声で口に出してしまった。相変わらずの真っ黒で長く細い髪は健在で、黒い髪をさらに目立たせるような淡い碧色のドレスが印象的だった。久しぶりに見る理子は、僕の記憶の中の理子と全く変わりがなく、いや、それどころか僕の記憶の方が間違えたのではないかと思えるほど、より一層の美しさで輝いている。

時は進む。時空を飛び越えて常に人は進化の過程を歩む。そう、

時の流れが止まらない限り、退化するなんてありえない。

本当に久しぶりに見る理子はとても美しくとても奇麗で、聖歌の合唱が始まる頃、僕の今までの漆黒の闇に閉ざされた扉の6年間という月日は、理子の優しい美貌に聖歌の柔らかなメロディーが混ざり合いそつと開かれていくのが感じられた。

挙式が終わり、参列者がみな披露宴会場へ大移動する。あらかじめ渡されていた座席表に従い、席に着く。僕と理子の席は随分と離れていたが、僕は話しするまでの決心を付けられずにいた。

席に着き言われるままにとりあえず、ビールを頼む。乾杯や祝辞など披露宴でのおなじみの社交辞令にも似た機械的な儀式がひと通り終わると、暫く談笑の時間になった。

僕は結局、理子を一目見たかったただけなのかな？そう考えているところへ突然声をかけられ振り返る。

「おお！やっぱり瀬戸じゃないか！久しぶりだな！」

一番会話を避けたかった人が話しかけてきている。森田だった。

「お前、ウチを辞めた時は連絡もなくて心配したんだぞ！？でも、元気そうで何よりだ。」

「・・・はい。お久しぶりです。」

「瀬戸、知っているぞ！お前ほかでちよくちよく頑張っているじゃないか。何よりだ。」

話したくもないのに、どんどん突っかかってくる。

「おう、そういうば倉田も来ているんだぞ！おい！倉田！瀬戸がいるぞ。」

突然、理子呼び出して僕の鼓動が激しく波打つのがわかった。上座の中央で、高田さんが心配そうにこちらの様子を伺っているのが遠目にでも見て取れた。

「ひさしぶりだろ？ほら、倉田。」

そう言って、馴れ馴れしく理子の肩に手を掛けては僕に理子を促

す。

「久しぶりだね。瀬戸君。」

苦しんでいた僕はなんだったんだろうか？こんなにも簡単にあっさり無理子が言葉をかわしてくる。

「ああ・・・久しぶり。」

森田が何も気にせず理子をここへ呼んだのは当然であつた。森田は、僕と理子の間に何があつたか知らないし、理子と森田の不倫の関係も僕が知らないと思っている。

「瀬戸君、最近ドラマとかで活躍してるね。」

「いや、全然。本当に小さな役でしか出演できてないよ。」

久しぶりに理子とかわす会話。なんでもない、どうでもいい話しだつたが、こうして話しているとすごく落ち着く自分がいる。

「そうだよな。お前そんな所に行かずにウチで頑張っていれば、もっと大きな役とかで今は大スターだつたのに。」

森田の言う事がいちいち癪に障つた。

「いえ、そんなどこにいても僕は変わらないですよ。」

「いや、お前はうちに居ればもつと売れてたよ。なんせ、倉田のお気に入りだつたからな！」

一瞬、言葉が理解できなかった。え・・・！？理子のお気に入りだつたから！？森田の棘のある言葉に疑問と怒りが増して行く。

「ちよつと、社長！」

理子が森田を制するのを無視して僕はその疑問を投げかけた。

「どういふことですか！？」

「ん、だからお前に新人の時から結構仕事が入つたのはさ、倉田がお前のことを気に入つたから優先してマネージメントしていたんだ。じゃなきゃ、新人のお前にマネージャーなんかつかないだろ？」

悪意にも感じる森田の言葉に身体が怒りで震えた。

「だからな、まだウチでやっていれば倉田のお気に入りのお前は、他のタレント達よりも最優先でマネージメントをしていたから、今

頃お前は売っていたってことなんだよ。もったいなかったなあ、お気に入り君。」

何も言わずにプロダクションを辞めたことへの嫌味だろうが、僕の役者としての人生を全否定するような、森田の悪意に満ちた言葉は僕のプライドをズタズタにする、そんな呪いのような言葉だった。それに併せて理子を奪われた憎しみや、自分の妻や子供もいるのに不倫をしている森田への怒り、全てに対して今ここで、森田を殺せるものならば殺してしまいたいと思えた。しかし逆に生まれてから初めて体感するであろう、その殺意という感情が自分を恐ろしく思えさせて、辛うじて冷静さを保つ事が出来た。

「そうですか！」

僕は森田に向かって一言だけそう言うと、今度は理子の方へ「悪い、ちよつと体調が悪いから先に帰る。高田さんにそう伝えておいて。」

そう言つて荷物を手早く取り、披露宴会場を足早に飛び出した。耐えられなかった。森田と理子は僕と付き合う前から関係を持っていたことがよくわかったし、理子の掌の上で僕の役者としての仕事 が弄ばれていた気がして、僕のプライドが許せなかった。

ホテルの外に出て、駅に向かおうと足早に歩いていると、理子が走つて追いかけてきた。

「祥！待ちなさいよ！祥！」

「・・・・・・」

「祥！高田さんの結婚式だよ！祝福する為の結婚式なのに途中で帰るなんてやつぱり失礼よ！」

理子の言葉にしている意図が僕の考えている意図とは違い、それが腹立だしさに拍車をかけ、気付けば遠吠えのように大きな声を張り上げていた。

「理子は！・・・・理子は、僕が役者としてやっていけないと思っていたのか！？」

「・・・・・・」

「僕が子供で情けない奴だったから、憐れみで僕と2年間過ごしていたのか！？僕のことを人形のように思っ、大人な森田に僕の事を話して斡旋して満足する、そんな玩具とでも僕の事を思っていたのか！！」

「・・・・・・・・」

「僕は・・・理子とあんなことがあつてからも、この6年間、一日として忘れられなかつたことがある。理子が・・・理子が最後に言いかけた言葉を聞かなかつた事に後悔をしていた。もう、これで最後かもしれないだろう・・・？だから・・・理子が本当は言いたいことがあつたんじゃないかと・・・ずっとそう想つてた・・・」

「・・・なぜ・・・？私は今のままで充分よ。」

「・・・・・・・・！」

最後に冷静に言い放つた理子の一言に、僕の脳は直接いかずちが落ちたかのような衝撃を受けて、僕はそのまま無言でその場を立ち去った。

逢わなければ良かった。逢いに行かなければ良かった。淡い期待をもつて活き込んでいた自分が哀れだった。こんな事になるんだなんて予想もしてなかつた。

晴天のお蔭で朝方まで積っていた雪も日陰以外はもう随分溶けている。薄雲が強い風で流れていく真つ青な空は、僕の心境とは真逆に気持ち良さそうだった。

吉祥寺駅に着いて失意の僕にいろんなものの誘惑が目に入る。家にそのまま帰る気がせずに、ただフラフラと空中を漂う埃のように舞っていた。気がつくと井の頭公園まで来ていて、湖をボーッと眺めている。ちょうど日が暮れ始め、宵の空が朱色に染まり僕の気持ちしがシンクロを始める。吞まずには居られなく適当に缶ビールを途中で購入していた僕は、朱色の空を眺めてビールを飲み干した。

ブー・ブー・ブー

携帯のバイブレーションに気付き電話を手取る。尾澤さんからの電話だった。

「もしもし瀬戸君？今日さ、早上がりなんだけど何やってる？」

「・・・」

「もしもし？瀬戸君？」

「・・・あ、ああ、今、井の頭公園で夕焼け見てる。」

「え？井の頭にいるの？じゃ、今から行っていいい？」

「・・・うん。」

何もかもがどうでも良かった。人との受け答えすら面倒に思えた。僕は何をしているんだろうな？いや、何をしてきたんだろう？分かりきっていたことじゃないか！理子はもう僕に対して何も想っていないことなんて。僕だけが時間を勝手に止めていたなんてことは分かっていたはずじゃないか。

「瀬戸君！どうしたの？こんな寒い中公園で。あれっ？ビールも呑んでるの？」

「・・・うん。ちょっとね。」

「あ、私も貰っていい？」

「どーぞ。」

「頂きまゝす。」

隣りで明るく会話をする彼女が今はせめてもの救いだった。僕の中の失意が和らげられる気がした。

「ね、お酒呑むんなら、どっかお店に入ろうよ。ここじゃ日も暮れたし寒いよ。」

「・・・ん、そうだね。」

尾澤さんの裏表のない意見が眩しかった。

「もう！本当に元気ないね。どうしたの？」

「・・・うん、まあちょっとね。・・・じゃあ、行こうか！」

僕が無理やり空気を奮い立たせ店へ向おうとした時、

「・・・慰めてあげようか？」

突然、尾澤さんからそう声を掛けられて

「えっ・・・？」

と、振り向いた刹那、尾澤さんのとても暖かで柔らかい唇が目に見え、飛び込んできて、井の頭公園の橋の上でキスをされた。

「・・・・・・・・！！」

優しさに満ちたその柔らかい唇から愛を感じられるキスに、僕も自然といつの間にか目を閉じて身を任せ、尾澤さんの小さな背中に僕の二の腕をまわし安らぎの抱擁をしていた。

この日の寒さは雪解けの地面のように暖かさが感じられる、そんな寒さだった。

半分の失ったもの

ピンと張りつめ熱せられた空気の中に、瞬間冷却をして大量の水蒸気が上がり、冷めたかと思うと、また熱のこもった緊張感が繰り返す。稽古中のそんな空気を僕は気に入っていた。

村中先生の檄が飛ぶ中、汗だくになりながら1日の稽古を集中していく。

過去へのわだかまりは未だ消せてはいなかったが、僕は自分の再生の為にひとつずつ必要なパーツを拾い集めては当てはめていった。失ったものの半分は自分であり半分は理子であった。ようやく気付けた時はもう既に遅かったが、自分が自分である為に理子が理子でいてくれたあの日々を、芝居で循環しようとしているが、まるで輪廻を彷徨い続ける亡者のように蜘蛛の糸を見つけては切り落とされていく、そんな流転を繰り返しながら再生を試みた。

時は進んでいく。雨が降りしきる季節が通り過ぎる頃、見事なまでの巨大な入道雲が暑さを主張するかのように目の前まで向かってきて、騒音にも等しいセミ達の合唱が真夏の到来を知らせてくれる。それは同時に僕が自分でやるべき人生の分岐点ともいえる大きなオーダーションがすぐ目の前まで迫ってきていることを告げていた。

人生にどれだけ自分の可能性へのチャンスがここだと、確実に理解できる時が何回あるだろうか？今まで歩んできた人生の中で僕にもチャンスという時はきつと何回かはあったはずだったが、このオーダーションは僕の人生を左右するであろう、そんな予感を感じさせるオーダーションだと不思議な直感が働いていた。

理子の言葉が木霊する。僕の心の奥の方で木霊しては響き渡る。
『・・・なぜ・・・？私は今のままで充分よ。』

気持ちたちが締め付けられる。それがお兄ちゃんに対しての使命感に

も似た自責の念と両天秤に掛けられて、自分の再構築へと一步一步足を進めてみる。

完全に壊れてしまった心の修復は可能なのだろうか？時は心を癒してくれるのだろうか？ただただ、時間だけを無駄に浪費しているような印象もあったが、僕の修復の作業は目の前のオーディションにヒントを見出していた。

やるべき目標が目のあるのは今の僕にとって唯一の救いでそれはまるで、パンドラの箱を開けてしまい、あらゆる災いや悪が世に広がり一番最後に箱の底へ残った希望と同じように思えた。

日差しが眩しく、一か所に立っているだけで汗が湧き出してくるが、天空は青々とした濃厚な藍色が印象的で、入道雲の白さが明暗を分けるように強調され、とても夏らしい快晴が気持ち良かった。

オーディション会場に向かう途中、電車の中で変わった少女を見かけた。電車の中にも関わらず椅子に座ってお弁当を食べている。隣に座っていた少女は、そのお弁当を美味しそうに口に頬張りながら、ご満悦な表情を浮かべている。弁当をチラツと見てみると、なぜかウナギのかば焼きが入っていて、少し驚き苦笑をこらえた。外装からみると母親に持たされたお弁当だというのはすぐにわかったが、なぜウナギなんだろうと考えていたが、結局答えは見つからない。ついチラチラとお弁当に目がいつてしまう僕に

「お兄ちゃん、なに？」

と、小さな少女が訝しげに僕へ言葉を投げてきた。

「あ、ううん、なんでもないんだ。ごめんね。」

「ふん。」

まだ小学生でもほんの低学年くらいであろうその少女は、そう言うともた夢中にウナギを口に頬張っては満足げな表情を覗かせて、口をもぐもぐとさせている。

その仕草が昔の僕を連想させる。いつも僕が必ず夕食のご飯の支度をして、理子が皿を洗う。完全分業みたいな理子の案は嬉しかっ

た。理子は僕の作った料理を満足気にいつも食べてくれる。理子のそんな表情が僕を自然と笑顔にさせ、口いっぱいにご飯を頬張りもぐもぐと食べていると、決まって理子が、

祥、子供じゃないんだからそんなに口いっぱいにご飯を入れないの！

と言われ、

ごめん、理子があまりにもおいしそうに僕の料理を食べるもんだから嬉しくって、

と返すと、理子は顔を赤くしながら、

もう！馬鹿ね。君の作ってくれたものなんだからおいしに決まってるでしょ。

と、少し照れながらも僕に敬愛を示してくれた。

今から自分の分岐を示すであろうオーディションに緊張感で身体が固くなり、必要以上に活き込んでいた僕は、その少女の無垢で純粹な食べる仕草や満足な笑顔に優しさと冷静さを取り戻せて、今一度オーディションへ向かう僕の気構えを見つめなおすことが出来たような気がした。

電車が僕の目的駅を告げるアナウンスが流れ、到着して電車から降りる際に僕は少女へ

「ありがとうね。」

と、一言だけ添えて電車を降りた。

オーディション会場に到着する頃、激しい日差しがちょうど真上に位置し炎天を物語っていた。会場を貸し切りに行っているようで、誰がみても一目でわかるようなとても大きな幕にオーディション会場と記入されていて圧倒された。

先生が主演以外はすべて一般公募と話していたように、もう既にものすごい数の人が集まっている。しかも見渡せば、誰でも知っているような役者やタレント、お笑い芸人までいて、大きなオーディションという事は誰の目から見ても明らかだった。

基樹もこの会場に来ているはずだったが、一緒に行動するのはやめようと僕から提案した。理由はいくつかあったが、僕自身が一人でオーディションに臨みたかったという事と、基樹とは同じ所属だったが今回のオーディションでは、同じ立場のライバルでいたかった理由の二つが大きかった。

今回のオーディションは4次選考まで行われるのが明らかになっていた。メディアでもかなり大きく取り上げられていて世間ではちよつとした話題になっている。会場にも何台かのテレビカメラとレポーターが来ていた。こんな大きなオーディションは、僕にとって初めてのことでやはり場違いな気がしたが、尾澤の言葉がふと思い出される。

「未来を欲張る・・・か。」

心の扉を閉ざしたままだった僕には、少しだけでも未来を覗く窓などはついていなかった。それでも、どこをどう修復していいのかも分からない僕は、このオーディションが僕の未来に繋がる一筋の光だと信じてやまなかった。

なにもかも失ってしまった僕の唯一の光。僕はこの光の密集した光源を取りこぼすわけにはいかなかった。

「祥！」

後ろからの声に、こんなところで僕を呼ぶなんてきつと基樹だろう、別々に行動しようと言ったのにと、振り返り驚いた。

「高田さん！」

「よう。祥もやっぱりこのオーディション受けるんだな。」

「高田さんこそ。」

「ああ、俺にとってはこれが最後のオーディションだと覚悟して受けに来たよ。」

高田さんの表情は決意に満ちていて、本当にこれが最後なんだろうという事が痛いほどに伝わってくる。

「俺はやるぞ！祥も頑張れよ！」

そう言うと、力強い足取りで会場に向かっていった。

高田さんの結婚式のあと、僕は途中で帰ってしまったこと、理子に逢ってしまったこと、理子に酷いことを言ってしまったこと、あの一日で後悔をすることがたくさんあった。

高田さんには、結婚式当日の中途半端に帰宅してしまった事を翌日には電話で謝ったが、

『いや、俺こそやっぱり祥を呼んじゃ行けなかったんだ。嫌な思いをさせてしまつてすまない』

と、逆に謝られてしまったのが、最後まで祝福できずに我慢できなかった自分により一層の負い目を感じずにはいられなく情けなかった。

この日の第一次選考だけで軽く800名は超えていただろう。僕のオーディション選考の順番が来る頃には、辺りはすっかり夕暮れ時になっていて、窓から入ってくる西日が金色の後光のように差し、美しかった。

順番を呼ばれ、会場に入ると横一列にプロデューサーを中心に、監督や製作者が並んでいた。その中にはいつも見慣れた、村中先生の姿も確認できた。オーディション参加者の5名が審査員へ対して鏡のように対面へ座らされる。

オーディションは順に自己紹介から始まりアピールポイントや審査員からの質疑応答に答えるだけで、芝居自体の実演など全くなく、本当に面接だけで終わってしまった。

それで帰らされることに、こんなに大きなオーディションで芝居自体を見なくていいのかと疑問が生まれ同時に不安の残るオーディションだった。

帰りぎわ、基樹が会場出口付近で待っていて、神妙な面持ちでどうだった？と、自分の事も含めてだろうが心配そうに聞いてくる。

「なんか、オーディションってよりも、学校受験の面接みたいだったよ。」

そう答えると、

「あっ！やっぱり！？よかったあ。俺達の組だけが面接だけで終わらされたのかと思ってビビってたんだよ！」

と、安堵の表情を浮かべて、いつもの屈託のない笑顔にいつの間にか戻っている。基樹も同じようにこれでいいのかと疑問が残り、不安だったのだろう。

「本当に面接だけでいいのかな？なんかあんまり釈然としないオーディションだよな。」

「うん。でも、みんな同じでしょ？それじゃ、大丈夫なんじゃない？」

「まあな・・・。」

「あとは一次選考の結果を待つだけだよ！祥、知ってた？一次選考、今日も入れて5日間に分かれてるんだって。なんか、書類選考はそのままスルーで人数がすごく多いけど、出来るだけ直接合ってオーディションをしたいって意向らしいよ。」

「えっ！？今日だけでこんなに人がいたのに、あと5日間もあるんだ・・・あ、そうか！きつと一次選考自体が直接会っての書類選考みたいなもので、それで面接のみだったんじゃないかな？」

「そうだよ！きつと！いや、すごい気合い入ってるね。」

憶測で言ったことだったが、本当に書類選考としての面接だという事が後日明らかになり、メディアがより一層の話題性を取り上げていた。

それから数日後に合否通知が各事務所へ届いた。僕と基樹、そして高田さんの3人はとりあえず、一次選考という名の書類選考は無事に合格で肩を撫でおろした。

合格を聞いた夜、家に帰るとすぐに尾澤さんから連絡がかかってきた。合格したことを伝えると、お祝いしよう！吉祥寺の駅で待つ

てるからと突然の約束をさせられそうになる。相変わらずな強引さだったが、今日は予定があって行けないんだと丁重に断った。尾澤さんの強引さは今では随分と慣れた気がする。

尾澤さんとは、あの夜、理子と最後の決別をしたあの失意の夜。井の頭公園で優しいキスをしてくれたあの出来事から連絡を頻繁に取るようになっていた。

だが、僕にはまだ理子の事を忘れてしまう事がやはり出来なかった。気持ちが悪すぎた整理をともしゃないが出来ないでいた。

尾澤さんの気持ちはすごく嬉しかった。優しさに満ちた彼女は、理子とは正反対に裏表が全くなく、ストレートに気持ちを伝えてくる。男に生まれて、こんなにも求められているのが僕には少し誇らしかった。

でも、だからこそアルバイト以外で直接逢うには正直抵抗があった。

なぜだろう？なぜ理子じゃなきゃダメなんだろう？僕と理子は、あの時に話したことで完璧なる決別をしたじゃないか！誰が聞いても終わったのは明らかじゃないか！そう自問自答をいくら繰り返しても僕の古時計は全く秒針を動かしてくれない。重かった。感情がこんなにも重くて沈むなんて。

どうしてだろう？

それでも現実にはシビアで待つてはくれない。僕がいつまでも生きているのは過去で、その過去には自然薯のように根っこがびっしりと張りめぐらされてしまっていて、僕は除草剤を求めるようにオーデションの希望にすがっていた。感情の錘をぶら下げたまま一歩も進めないままなのに希望を追いかけていた。

赤いガーベラと黄色いガーベラ

凍える強風に手がかじかみ、身体機能の停止アラームがなるような寒さの記憶しかもう思い出せなかった。冬の季節以外に中野駅へ降り立つのは、もう何年ぶりになるだろうか？

ほんの先日まで真夏のような茹だるくらいの残暑が今では嘘のように、涼しげな風が僕の顔に当たってきて秋の香りを届けてくれる。今までお兄ちゃんの命日以外は決して来ることのなかった町だけで、この日は自然と足が赴いて中野の雑踏へ踏み入れていた。

オーディションも佳境に差し迫り、3次選考までが終了していた。次でオーディションの最終選考となり、出演と役が決まっていく。その最終選考まで僕だけが残ることが出来た。

基樹や高田さんは2次選考と3次選考で落とされてしまった。

『ははっ、落ちちゃったな……。ふう、これで最後だったんだけどな……。落ちちゃった。はは、祥、俺は坂田に顔向けできないな。これが最後の挑戦だったのに最終選考にすら残れないなんて……。今まで何をやってきてたんだろうな……。本当に……。祥は絶対に役を勝ち取れよ！大丈夫！！なんといっても坂田に加えて俺もついているんだからさ！！』

高田さんの最後に精一杯振舞う明るさが、より一層の無念さを伝え僕の胸を熱くさせた。帰り際の悔しさで震える背中が語った悲痛感が僕の心に強烈な痛みを与えて今でもシンクロを続けている。

オーディションなのだからしょうがない、と言ってしまえばそれまでののだが、高田さんの僕以上に特別だったかもしれないこのオーディションには、簡単には計り知れないほどの自分の人生という命を懸けた想いを僕は託された気がしていた。だからこそ、しょう

がないでは終わらせたくなかった。

なにかを思い立ったかのように、そして必然的に僕は最終選考の今日、どうしてもオーディション前に原点を確かめに行く必要があった。理子への消えることがない想いと共に、僕の役者としての原点を確かめに中野サンモール商店街へと足を踏み入れる。

午前中に中野を歩くのは思い返せば初めてなのかもしれない。いつも僕の中野のイメージは深夜だった。もしかしたら昼間にも来たことがないかもしれない。夜の素顔しか知らない僕は、朝のお化粧をした中野が随分と晴れやかな感じにとれた。

サンモール商店街の中間地点まで行く、ここでも夜と朝との姿の違いに僕は困ってしまった。サンモール商店街は一本道だった為、人どおりが凝縮され吉祥寺よりも足の踏み場がない。まだこの程度であれば良かったのだが、一年に一度、黄色のガーベラを一本置いて、お兄ちゃんと一緒にハイライトを喫煙する場所は、店が開かれておりとてもその場所を確保するのが困難なのは自明の理であった。よくよく見るとそこは小さな靴屋さんで、お世辞にも若者向けの靴は置いていたとは言えない、いわゆる婦人者向けの靴屋さんである。店構えからみると、相当に古く感じることから昔から店を開いている老舗の印象を受けた。

「・・・朝だからな。そうか・・・ここは靴屋だったのか・・・お兄ちゃんは靴屋の前で倒れたんだな。」

あの時の自分の行動が思い出されて、胸がつかえてきて立ち眩みを覚える。黄色のガーベラを手にしたまま、お兄ちゃんの倒れたその場所に立つてみると、あの時にあの子供じみた自分をいつまでも戒めなくなる。後悔しか僕には残っていなかった。僕の人生はなにもかもが後悔の塊のように思えた。

「あの・・・いらっしやいませかな？」

店に背中を向けて店の入り口付近のど真ん中に立っていた僕に対して、人の良さそうなとても優しい笑顔のおばさんに声を掛けられ

た。

両目にいつの間にか雫が溜まっていた事に気づいた僕は、慌てて二の腕で目頭をこすって振り返る。

「なにかお探し物かしら？」

笑顔でそう接客するおばさんは優しく僕に言葉を投げかけてくる。

「あ・・・、あ、いえ、すいません。お店塞いじやって。申し訳ありません。」

そう言っただけを返し足早に立ち去ろうとした時に

「あ、ちよつと待って貰えるかしら？」

そう呼び止められて僕は再度振り返る。

「はい・・・？」

「そのお花。」

「え・・・？あ、ガーベラですが・・・。」

「そう、黄色のガーベラよね？」

「はい・・・。」

優しい笑顔のおばさんはそのまま笑顔を崩さずに、僕のすぐ目の前まで歩み寄ってくる。

「あなた、毎年一度、必ず来ているでしょう？」

「えっ・・・！？」

「ふふ、こちらへいらっしゃい。この時間はお店にお客さんはほとんど来ないから。」

おばさんにそう促されて、いきなりそんなことを言われたことに驚いたが、不思議と嫌な感じはしなかった。

店の奥に入ると、すぐにお茶を差し出してくれた。

「いつもね、不思議ね」と、思っていたのよ。1月8日の朝お店に来ると決まってガーベラが店の前に飾ってあってね。」

「・・・・・・・・。」

「ずっと、毎年あなたが飾っていったのね。やっと会えたわ。」

「・・・はい、すいません。勝手に店の前に花を置いて行ってしまうって。」

単純に迷惑をかけてしまったのだと思い、自然と謝罪をしていた。「いいえ。責めているわけじゃないのよ。逆なの。感心していたの。あんな事件があった現場だものね。毎年忘れずに偉いなとすごく感心をしていたのよ。」

全く予想外の返答だった。それどころか今日初めてあった全く面識のない優しい笑顔のおばさんの口から事件の事が出てきたのには驚きを隠せずにはいられなかった。

「え！？知っているんですか？事件の事を・・・」

「もちろん、知っているわよ。あの亡くなった方はあなたのお身内の方？」

身内・・・お兄ちゃん存在はもう僕にとっては身内となんら変わらない存在となっていた僕は、

「・・・はい。僕の兄でした。」

そう、思わず答えた。

「そう。あなたのお兄さんだったの。辛い事件だったわね。それじゃ、今でもとても苦しい日々を送られているのね。あなたにとっては、とても大変な過去だったわね。」

とても優しさの感じられるその温かい言葉に安堵感にも似た胸の安らぎを僕は覚え、久しぶりの感覚に戸惑った。おばさんは続けて優しい言葉で投げかけて来る。

「今日はどうしたの？御命日まではあと二か月近くあるわよね？」

投げかけられた質問に不思議と母みたいな暖かさを感じた僕は、正直に今日来た理由を涙が今にも零れ落ちそうなのを堪えながら丁寧に説明をした。中野での事件の詳細、中野に近寄らなくなったこと、今日が僕にとってどういう日なのか、ひとつひとつ、まるで自分に言い聞かせるかのように丁寧にゆっくりと説明をしていた。

お兄ちゃんの事を第三者に話すのはこれが初めてのことだった。話し終える頃には先程まで出ていた涙がより一層、決壊したダムのように流れ出ていた。

お兄ちゃんの事を僕は絶対に人には見せない部分であったし決し

て人に話すことはなかったのに、おばさんに対してなんでも話せてしまった自分は、不思議と後悔も嫌さも全くなく、逆に心地が良かった。

ひと通り話し終えると、おばさんは不思議なこと言い始めた。

「今日は、黄色のガーベラ一本だけなのね？御命日じゃないから？」

「・・・？えっ？いや、僕はいつも黄色のガーベラ一本だけしか持つてきていませんよ。」

「あら、そう？おかしいわね。毎年朝来ると黄色のガーベラと赤色のガーベラの2本が瓶に生けてあるのに。」

「・・・！！！」

そう言われてすぐに誰が来ていたのがわかった。

昔、僕が風邪で寝込んでしまった時、お兄ちゃんが理子に対して早く帰ってやれと促してくれたことがあった。僕と理子は、後日そのことに対してお礼をした。あらかじめお兄ちゃんの好きな花を聞いて、お兄ちゃんの役者としての華が映える意味を添えて。その時お兄ちゃんが好きだといった花が、ガーベラだった。そして、僕と理子はお互いに黄色のガーベラと赤色のガーベラを花束にしてお兄ちゃんへプレゼントしたのだった。僕はそれがあつたから、毎年変わらずに決まって黄色のガーベラをお兄ちゃんの事件現場に持つてきている。

「あの、それは毎年変わらずですか？」

「そうよ。あの事件があつてから毎年欠かさずにね。あなたと一緒によ。」

僕が毎年、お兄ちゃんの命日に中野へ花を持ってくる時はもう深夜に近い時間だったが、一度でも僕が来る前に赤のガーベラが置いてある事はなかった。それに、僕は瓶などを用意していなかった。理子が急速に近くに感じられる気がした。理子があんなことをしたのは、やはり何かの間違いじゃないのか？

いや、馬鹿な！きつぱりと言われたじゃないか！

考えれば考えるほど頭が狂いそうだった。

「大丈夫？」

そう言われハツとして

「あ、・・・大丈夫です。すいません。みつともない所お見せしまして。僕、もうオーディションの時間が近づいてきているので行きます。」

「はい。わかりました。また、ぜひお寄りなさい。年に一度じゃなくてもいらつしゃい。」

純粹に嬉しかった。また目頭が熱くなってきた必死に僕は堪えて「・・・はい。本当にありがとうございます。いろいろと整理をつけることが出来たら、また必ず伺います。ありがとうございます。」

僕はそのまま、振り向かずに店を後にする。去り際、最後におばさんが言った一言が僕の進むオーディションへと足を一歩後押ししてくれた気がした。

「そのガーベラの花言葉と同じく、あなたの今日という日が幸せでありますように。」

僕は向かう電車の中、毎年持つて行っているのにガーベラの花言葉を気にもとめていなかったが、携帯のネットで慌てて調べてみる。

ガーベラの花言葉…「希望」。

お兄ちゃんの声が聞こえた気がして、腕を見ると身の毛が逆立っていた。

最終のオーディションに残っていた合格者達は、皆どこかで見たことがある人たちばかりだった。しかし、気負いは全くなく落ち着いていた。おばさんのお蔭かなと今更ながらに再度感謝の意を心の中でそっと思つた。

僕の気負いになるとしたら、今は理子の引き出しが前面に出てしまっているということだった。今さっきまで僕の知らなかった理子

の行動が紐解かれてしまったことで、オーディション最中だというのに、理子の事が頭からトリモチのように全く離れなくなっていた。三次選考で随分と落とされたのか、最終選考には思っていたよりもかなり人数が少なかった。残っているメンバーが皆、テレビや映画などの一線で活躍している人達ばかりで場慣れしているせいなのか、いつものオーディションより緊張感はさほど感じなく、比較のリラックス出来ている。

ドアがスタートの合図をするかのようにガチャツと勢いよく開き、プロデューサーをはじめ制作関係者が入ってくる。もちろん、その中には村中先生もいて一緒に入ってきた。

最終選考オーディションの説明がプロデューサーより案内される。「おはようございます。えー、改めまして小湊です。今日は最終選考オーディションにご来場頂きましてありがとうございます。ま、

最終ですから当然ですが今日の選考で終了いたします。皆さん、緊張せずに今日は私に思う存分芝居を見せて下さい。それで今日はですね、キャスティングを決めて実際に映画で使用する台本で演技をして頂きます。まあ、使用すると言ってもまだ第3稿の台本ですので、今後セリフは変わってくるでしょうが……。それで、今までのオーディションを踏まえ、こちらでやって頂きたい役のキャスティングはもう決めてあります。今から、抜粋した台本をそれぞれのキャスティングごとに配布しますので、その役の芝居を思うがままに自分のカラーでやって頂いてかまいません。楽しみにしています。

役が決まっている？それぞれ？同じ芝居でキャスティングを争うんじゃない、もうあらかじめキャスティングに合っている人を選抜して最終の選考をしようという事らしい。要は、三次選考までは配役についての見極めだったのだ。参加者達にもその意図が伝わってどよめきが起こっているのがわかった。

「それじゃ早速、名前と役名を呼ぶので、呼ばれた方は前に台本を取りに来て下さい。」

名前はあいうえお順に呼ばれ、それに合わせて役名も呼ばれて行く。僕も程無くして呼ばれ前へ台本を受け取りに行く。僕の配役の台本を見ると、すぐに哀愁に満ちた台詞が多いことに気がつく。

この時点ではまだ抜粋の為、この男が果たしてどんな生き方をしていたとどんな苦しみを抱えているのかは分からなかった。ただ、僕にはこの男がとても苦しい経験を重ねて生きていて、それで哀愁や苦渋を抱えているのだと、台詞を読んでなぜか不思議とそう思った。

本読みから始まり、立ち稽古、本番と舞台のような演出でオーディションが進められていく。稽古が始まりすぐに僕は一番初めの本読みから不思議に思っていたことがあった。僕に与えられた役の表現というか芝居が他のライバル達とはずいぶん違っていた。あれっ？僕の本読みが違ったのか？と不安にも思えたが、僕には何度台詞を読み返しても、この男の感情は第一印象から変わることはなかった。

理子の事が頭から離れないからだろうか？この男の心理がどうしても自分の心理とシンクロしては絡み合っていく。

終わってみれば、やはり僕だけ表現方法がみんなとは異なっており、自分の芝居へ対する表現に自信を失くして、暗闇を抱えるように帰路についた。

夜の秋空の澄んだ空気が肌寒く感じ、今にも飛びだしそうなペガサスの四辺形が輝く爽やかなはずの満天の星空は、僕の落胆を一層増して行く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7622w/>

ひと雫の光源

2011年11月11日03時21分発行